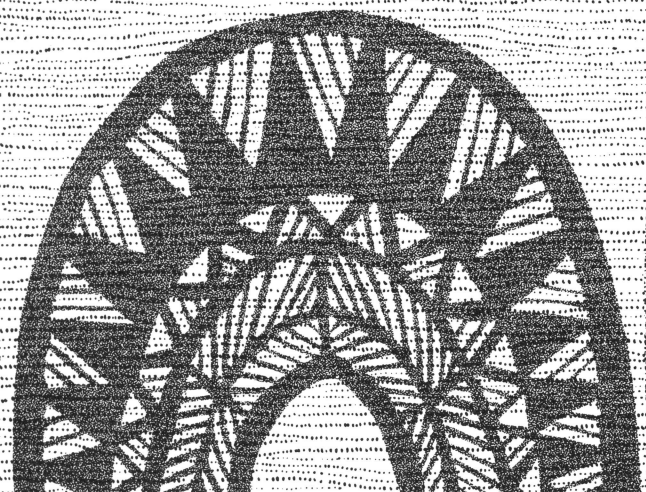
調査研究







朝日遺跡出土の金属器鋳造関連遺物について

石黒 立人・野口 哲也*

(1)1979年度出土の土製品A

はじめに

1972年～1979年にかけて愛知県教育委員会によって行われた朝日遺跡の調査において、銅鐸の飾り耳および銅鐸形土製品など銅鐸に関連する遺物が何点か出土している。詳細についてはすでに報告済みであるため、ここではこれらについては触れず、1979年度の調査中に出土し、未報告のままであった土製品について紹介する。

出土状況

この土製品の詳細な出土状況の記録は残されていないようであり、ただ「……北居住域内にあたるⅣ３H25の包含層（土坑であったと思われる）出土の二次的焼成または高温度の熱を受けたやや赤味を帯びた粘土塊がそれである。この粘土塊が出土した位置は、小銅片の北西約45m、銅鐸耳飾の北約15mにあたり、三者は相近接し北居住域内におさまってしまう。…」という記述があるのみである。(1)

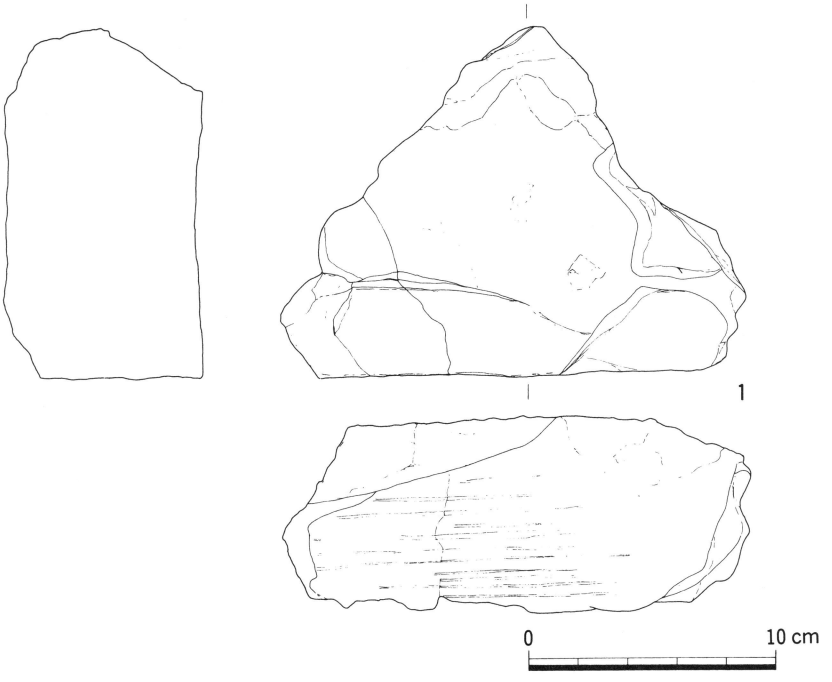
観察

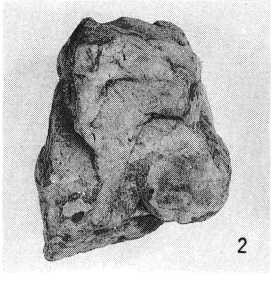
資料は比較的大きな塊と小さな塊があり、胎土などからすべて同一のものであると考えられる。このうち比較的大きなもの３点について観察を行う。１は資料中最も大きな塊である。現状では長さ18.6cm、幅14.1cm、厚さ8.0cm、断面はほぼ長方形である。上下面ともほぼ平坦である。外側に当たると考えられる部分も平坦であり、板の小口状の工具でつけたような数条の調整痕と考えられる横位の線条痕がみられる。また、上面左端に長さ9.9cm、幅3.5cmの斜めの面がみられる。上半部は二次的焼成または高温度の熱を受けたようで赤味を帯び、下半部は灰色である。胎土は通常の土器のような礫粒などを含まず、非常に細かく均一な砂粒である。銅鐸などの文様を掘り込んだ面などは見られない。２・３は胎土は１と同様であり、不定形である。２は１と同様上半部は二次的焼成または高温度の熱を受けたようで赤味を帯び、下半部は灰色である。上面に二段の段がみられる。３は比熱を受けた部分があまりみられない。上面に一段の段がみられる。

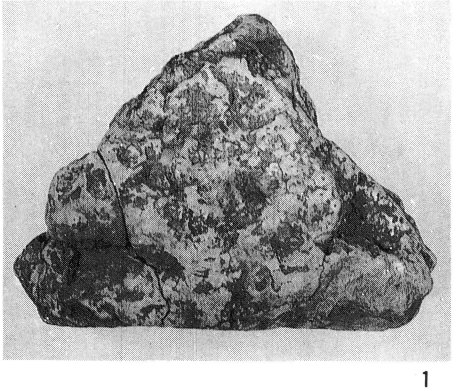
結語

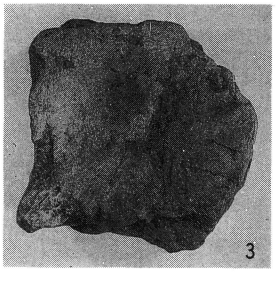
これらの土製品が、その形状や胎土などから、土器あるいは土器製作の粘土素材ではないと考えられるが、銅鐸などの製作に関わるものであると積極的に肯定もできず、現状で

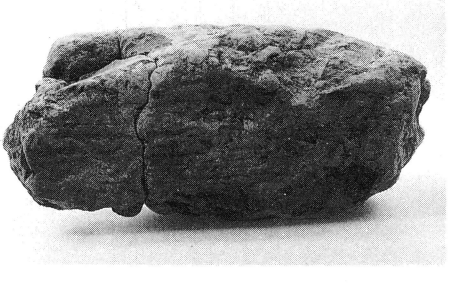
＊愛知県清洲貝殻山貝塚資料館職員











第Ⅰ図　1979年出土土製品A

は、非常にそれらに近いものであると推測できるだけである。今後さらに詳細な検討を加えたい。（野口哲也）

註 (1)久野雄一郎「愛知県朝日遺跡出土銅滴の調査報告」『考古学の広場』第1号1983の中の高橋信明氏のコメントによる。

(2)1988年度出土の土製品B

はじめに

愛知県埋蔵文化財センターが実施した1988年度発掘調査で、D区において金属器鋳造に関連すると思われる土製品が出土した。

出土状況

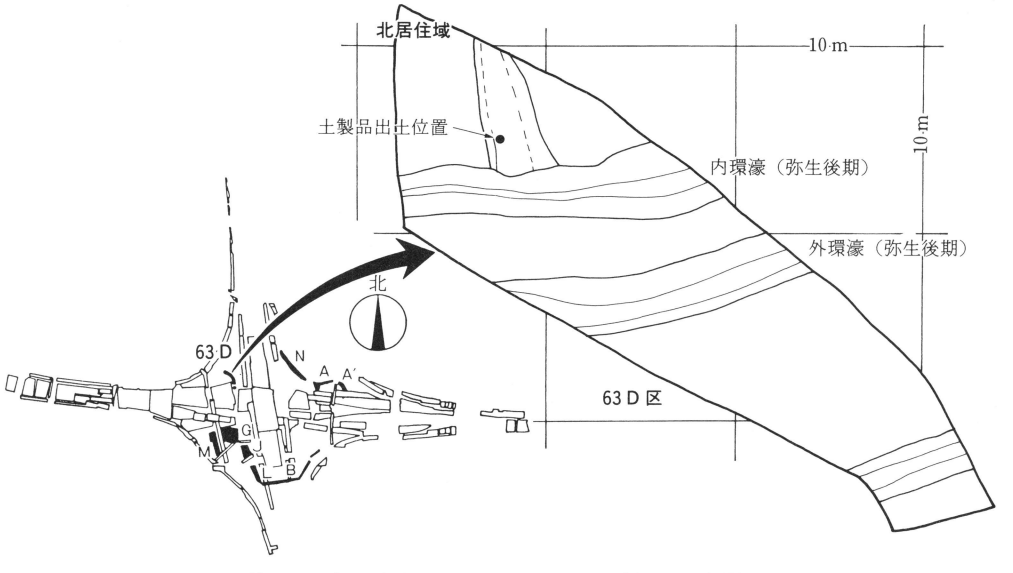
出土地点は北居住域の南縁にあたり、2条ある環濠の内側の環濠に近接した位置で、中期末の貝層を切って環濠につながる溝内に堆積した後期前半（山中期）の貝層中より出土した。

出土した段階ではこれが土製品であるとは気がつかず焼けた粘土塊程度に考えていたが、洗浄後に面を持つことがわかり、しかも問題がありそうなのでここで紹介することにした。

観察

土製品は、面を有するもの4点のほかは、小片が20点ほどある。前者の内大きいものは図示した2点で、4は、截頭円錐形を呈し、上部は平坦面をなすものの表面は剝落して胎土が観察できる。側面は灰白色を呈している。5は、側面の破片で、4と同様な円錐体である。側面上部は4と同様灰白色を呈し、下部は灰色から淡い橙色になる。

胎土は砂礫を含まず緻密であるが、赤色部分と白色部分が5～10㎜の粒状に分布し、破

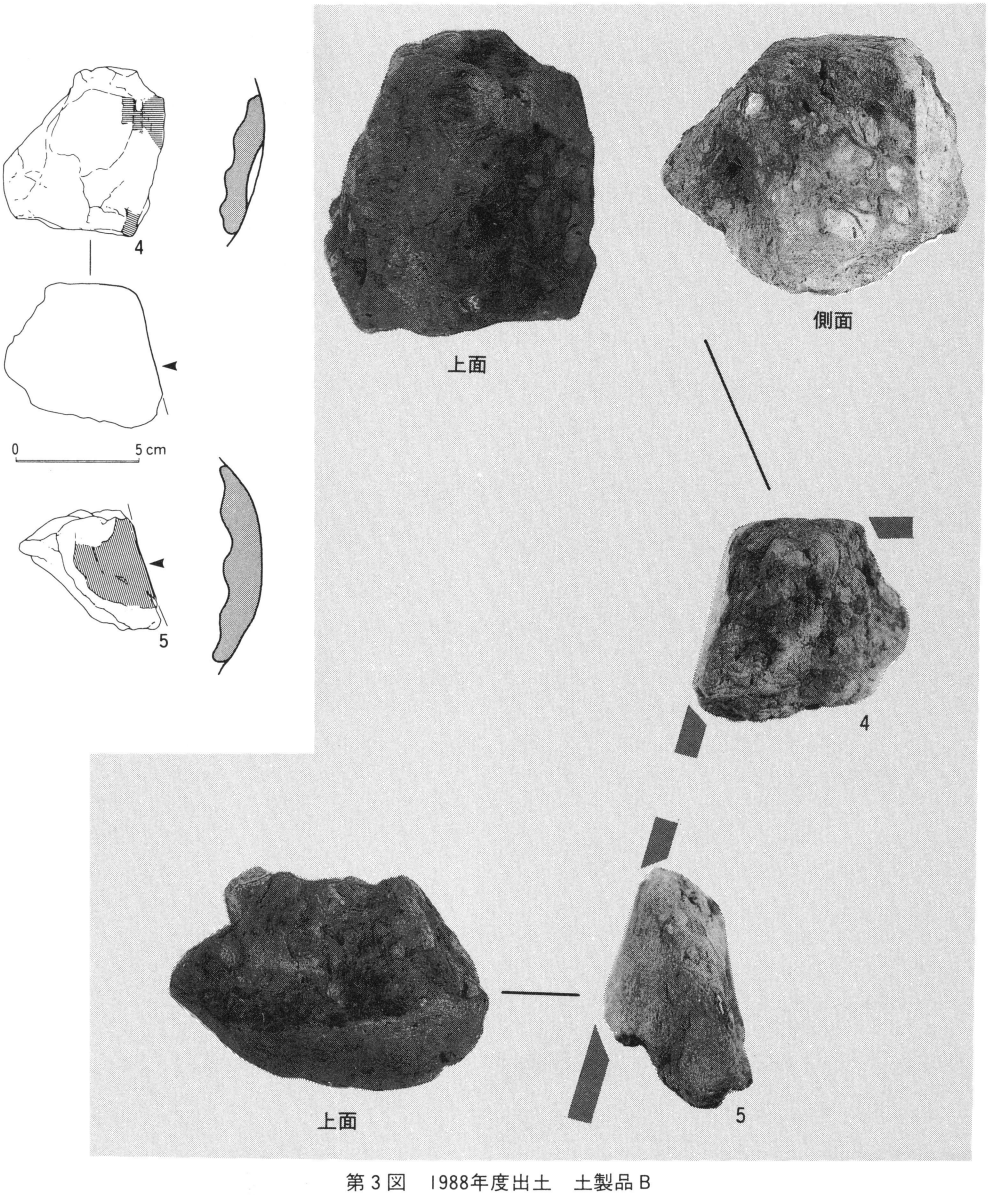


第2図　朝日遺跡63D区位置図および土製品出土位置図

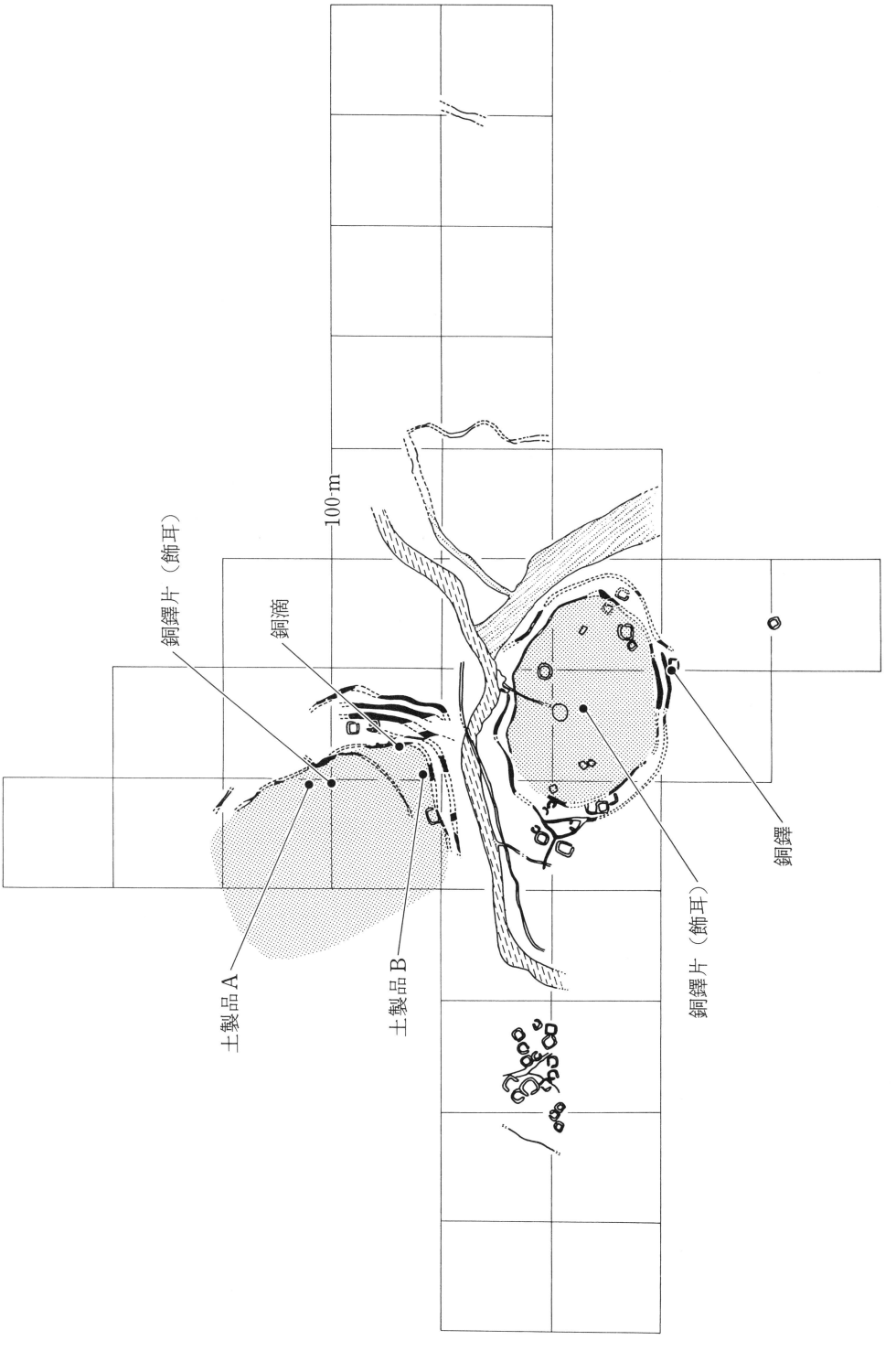
面ではあばた状をなしている。丁寧にこねられているという感じではなく、粘土が小さな粒状のまま大きな塊にまとめられたという状況を示している。

結語

ここで紹介した土製品は、確実鋳造に関連すると断定できる資料ではない。あくまで、可能性の段階にとどまるものである。しかし、朝日遺跡で青銅器鋳造が行なわれたことは銅滴の出土からうかがわれるし、先に紹介した土製品の存在、これら遺物がいずれも北居住域からの出土であること、また銅鏃の出土例も北居住域が多いことなど、状況証拠では北居住域が青銅器に関係する何かを持っていると考えざるをえないのである。(石黒立人)



第3図　1988年度出土　土製品B



第4図　朝日遺跡概略図および銅鐸等出土位置

朝日遺跡出土の骨角器

宮腰 健司

I

弥生時代の環濠集落として知られている朝日遺跡では、主に弥生時代中期に、谷の肩や溝の中に大量の貝が廃棄され、貝層が形成されている。この概要については、これまで『年報』等で述べられてきたが、その貝層を中心に骨角器が多数出土していることについてはあまり触れられていない。今回この文では、昭和60年度・61年度の調査で出土した292点の骨角器について若干の分類を行い、弥生時代では数少い良好な骨角器資料として紹介していきたい。ただその所属時期については、今回問題にしなかったが、大部分が弥生時代中期のいずれかの時期に属している。また、分類と各類の個数については第1表に示したとおりであるが、生活用具、装飾・祭祀用具とも判断がつかなかった棒状の加工品が87点、加工の痕跡はあるが形態が不明なものが22点あった。ただ、製作途中でできる、いわゆる加工痕のある骨角については数にいれていない。

骨角器分類				個数
生活用具	刺突具	I	A	32
			B	11
			C	12
		II	A	22
			B	8
			C	27
		III 釣針		3
	紡錘車			3
	弭形角製品			7
装飾・祭祀用具	垂飾		A	10
			B	9
			C	18
			D	2
	加工品		A	9
			B	4
			C	2
			D	4
棒状加工品				87
不明				22
計				292

第1表 骨角器分類別個体数

II

1．生活用具

刺突具

広義には、ヤス状刺突具、固定銛、離頭銛、鏃、尖頭器など先尖形態のものが刺突具には含まれており、各々の分類により、固定銛のみを刺突具と呼んだり、離頭銛を除いたものをそう呼称したりしている。本文では、先端を研磨し尖らせ、刺すといった機能を想定できるものを全て刺突具として括り、投擲するものをⅠ類、手で持って私用するものをII類、それ以外のものをIII類とした。

Ⅰ類（投擲具）

A（1～13、41～43）　いわゆるヤス状刺突具である。鹿中手骨・中足骨・角を使用している。その中を、断面形が丸く、基部・先端部とも棒状を呈しているものをA_1類（1～8）、断面形が丸く、基部が平坦になっているものをA_2類（9～11）、断面形が平らで方形をなすものをA_3類（12・13）と三種類に分けることができる。さらにA_1類の中では、長さによって4つ程のグループに分けることが可能である。また41～43に関しては、単独で柄に装着する場合、数本を組合わせて柄に装着する場合、銛頭の先端に装着し、挟み込み式銛の逆刺として使用する場合が考えられる。

B（14～29・40）　銛頭として分類されるものである。ほぼ鹿角を使用している。大きく長径のものと短径のものに分けられる。長径のもののうち14・15は直線的で逆刺が左右対称に作られており、16・20・21は湾曲し、逆刺が非対称に作られ数も少ない。後者については、2本（もしくは数本）を基部で組んで使用する組み合わせ式銛の可能性も考えることができる。また14については、木製の柄部との装着法が判る数少ない例であり、中空の柄に差し込み、樹皮で巻き固定されている。短径のものは、C類の鏃型のものと径が近似している。これも長径のものと同じく、逆刺が対称なもの17と非対称なもの18がある。19については、逆刺とは異った突起が4ヶ所みられるが、その用途については不明である。40については、先端部の側面に平坦面があり、先述したA類の41～43の逆刺状のものが装着されるかとも考えられるが、大きさ・厚みともに挟み込み式銛のそれより華奢である。

C（22～29）　鏃型の骨角器である。22・23・25のように石鏃を忠実に模倣したものと、24・26～29のような、器体部と茎部の長さが同じか器体部の方が長いものに分かれるが、それぞれ完全に定型化されておらず、特に前者については生産用具ではない可能性も考えなければならないであろう。

II類（手持具）

A（30～34）　鹿や猪の尺骨を使用した手持ち刺突具で、定型化された一定の製作法があったことが窺われる。

B（35～39・44～46）　A類でみられた尺骨以外の部位を用いた刺突具である。37～39は鹿角で作られたもので、39は装飾品の“髪針”と類似するが、通常のそれらよりもはるかに太い。38は基部に穿孔があり、ぶら下げることができるようになっている。35は螺旋状に割れた猪の左脛骨の先尖部を利用して刺突部にしており、36・44～46についても、先鋭的に破損した部分の先端部をさらに研磨して使用している。特に46については、錐の可能性も考えられる。

C（47・48）　縫針である。長さは長短2種類がみられるが、太さ・孔径に関してはほぼ同じである。

III類（49～51）　I・II類に分類できない刺突具として釣針があげられる。3点出土しているが、軸頭から鉤先まであるものがないため詳細は不明であるが、全て単式釣針であると思われる。49は猪牙、50は鹿角製である。51はチモトが外に付くものであり、他のものに較べ華奢にできている。

紡錘車（55・56）

鹿角および鹿角角座を使用したものが3点出土している。

頭形角製品（52～54）

短径と長径のものがある。短径のもの（52・53）は円筒状をなし、体部に凹部をもつ。52の孔部には有機物が付着している。54の長径のものは非常に精巧に作られたもので、体部側面に横方向の穿孔がなされ、可動する両端が傘状にひらく装飾品が挿入されており、その間を幾条もの横位の沈線が刻まれている。

2．装飾・祭祀用具

垂飾

穿孔されているか、管状になっていて、紐等を通してつり下げて使用されたと思われるものについてあげた。

A（61～63）　管状垂飾である。鳥類の管状骨を使用している。

B（64・65）　輪鼓状耳飾と呼ばれるものであり、耳飾及び一般的な垂飾品として使用されたと考えられる。角類の椎骨の中央部に穿孔がなされている。

C（69・71～74）　歯牙垂飾である。69はツキノワグマの犬歯に穿孔がなされている。71～74はイノシシの牙で、73・74は同地点から出土しており、腕飾又は首飾として使わ

れた可能性が考えられる。

D（59・68）　穿孔のある加工品である。59は非常に丁寧に研磨されており、68は精巧な線刻がなされている。

加工品

非常に丁寧な装飾や加工が施されていたり、何かを模倣したりしているもので、生産用具とは認められないものについて取り上げた。

A（60・70）　いわゆる髪飾類に属するものである。

B（66・67）　骨に刻み、沈線を施したもので、67は刻骨となろう。66については垂飾の可能性もある。

C（75・76）　剣や有頭棒を模した骨角器である。75は海洋性哺乳類の肋骨、76は鹿角を使用している。

D（77・78）　儀式的な場で使用されたと思われる骨角器で、骨の一部分のみを加工している。77は鹿肩甲骨を使用したト骨、78は猪下顎骨に穿孔を施したものである。

その他用途不明なものの中には、57・80の腰飾の部分かと思われるものや、完形品である刺突具状の58がある。また、83は側面に磨痕のある鹿角で、79は弭形角製品の部分か、弓飾の部分かと思われる。81・82は用途不明である。

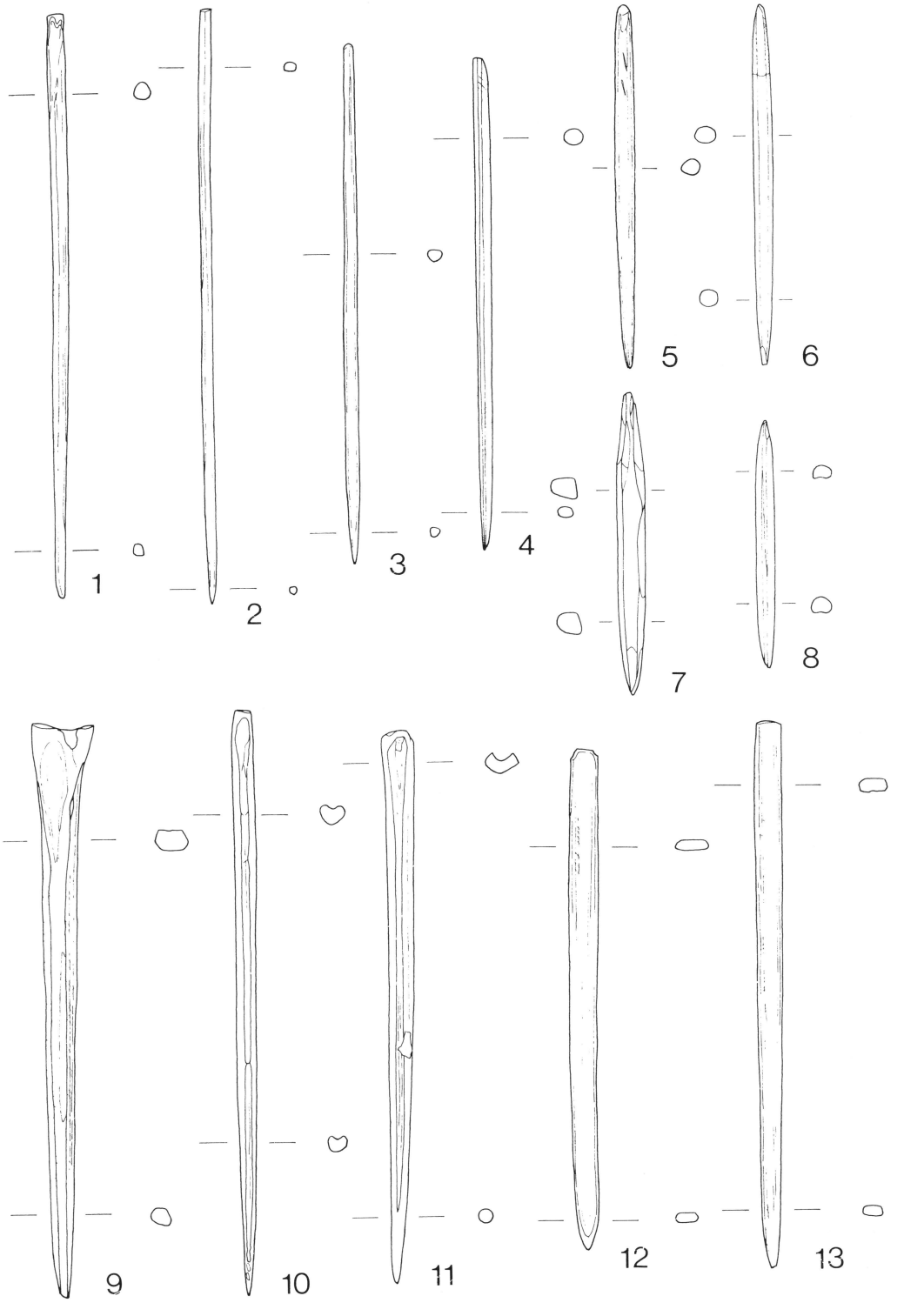
III

以上朝日遺跡で出土した骨角器の代表的な例を分類も含めて紹介した。分類もまだ斬定的なものであり、刺突具ＩＡ類（ヤス状刺突具）のように、数値的な処理を施せばさらに細分できるものや、加工品としたものや不明品については、更に検討が必要であろう。また今後、加工痕のある骨角類より明らかにされる製作工程や、多数出土している骨角類からみた動物遺体の使用状況を考えていかなければならない。さらに、縄文晩期より続く縄文的骨角器使用の形態が、弥生社会の中でどのように受容されているのかがこれからの問題点となろう。

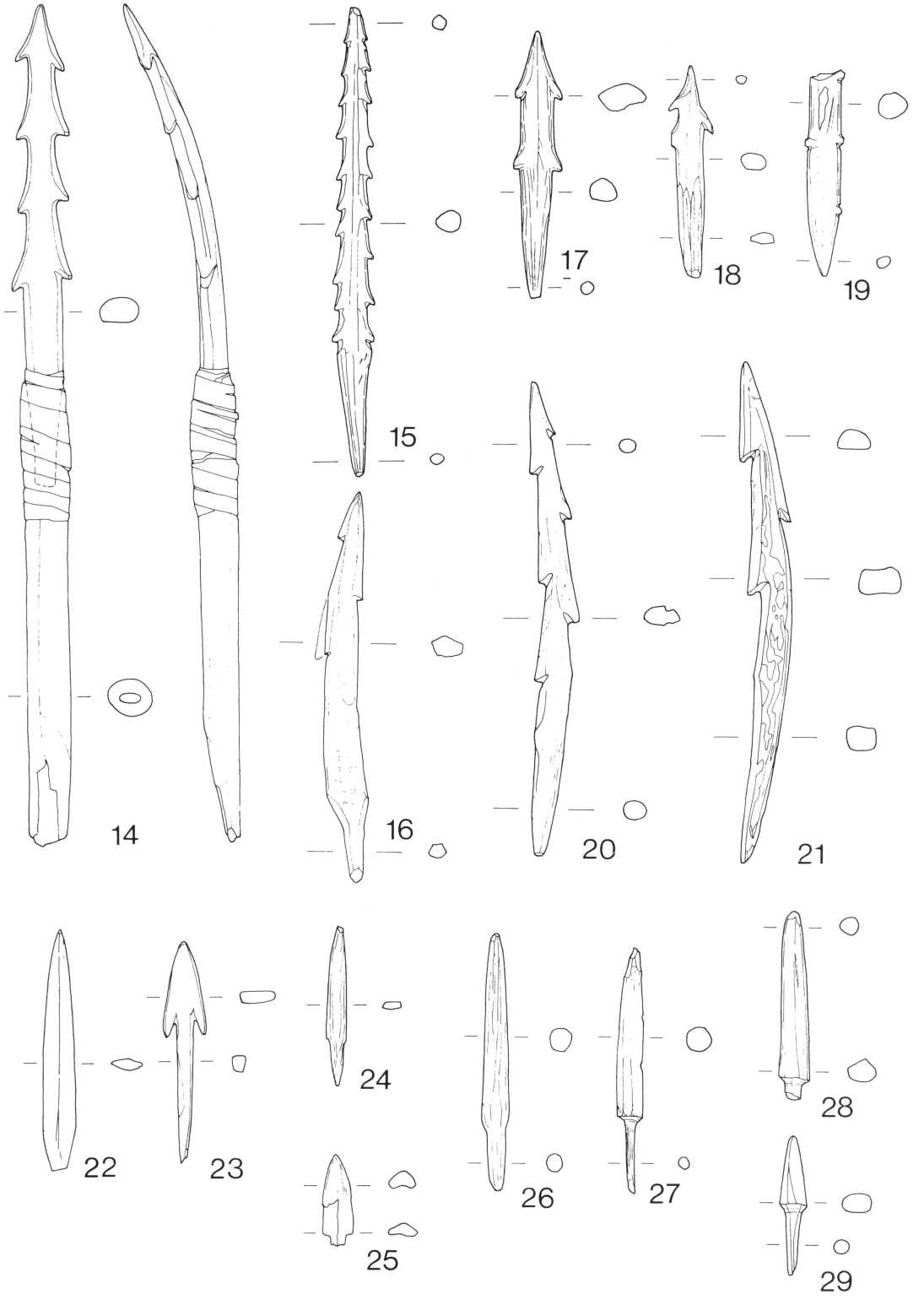
小文を記すにあたり、名古屋大学渡辺　誠先生には多くの御指導をいただいた。文末ながら記して感謝したい。

参考文献

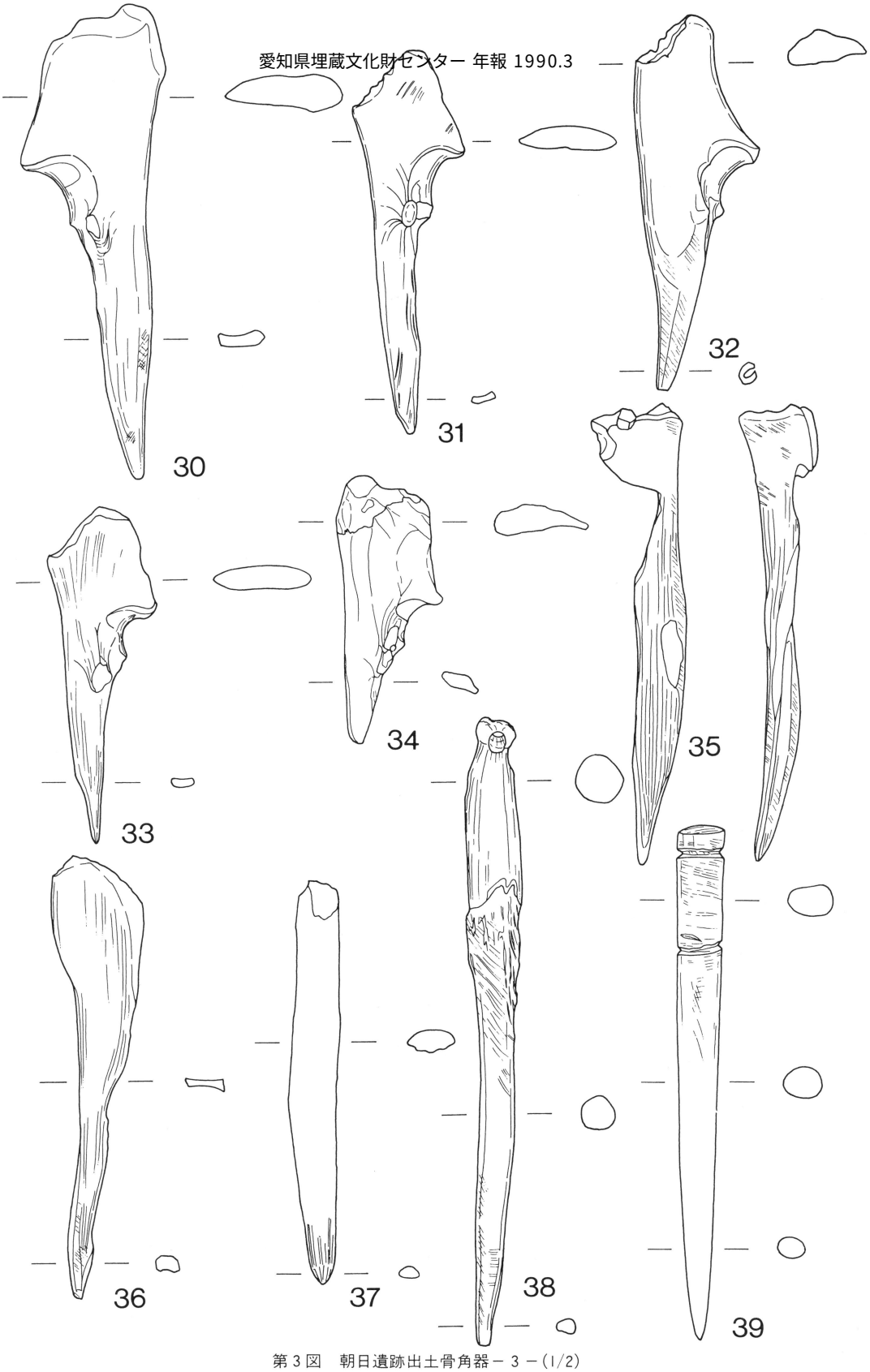
大竹憲治　『考古学ライブラリー53　骨角器』　1989　ニューサイエンス社
金子浩昌・忍沢成視　『骨角器の研究Ｉ・II』　1986　慶友社
福島県いわき市教育委員会　『薄磯貝塚』　1988
宮城県教育委員会　『田柄貝塚III』　1986
宮腰健司・佐藤治　「朝日遺跡出土の動物遺存体」　『年報　昭和63年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター　1989



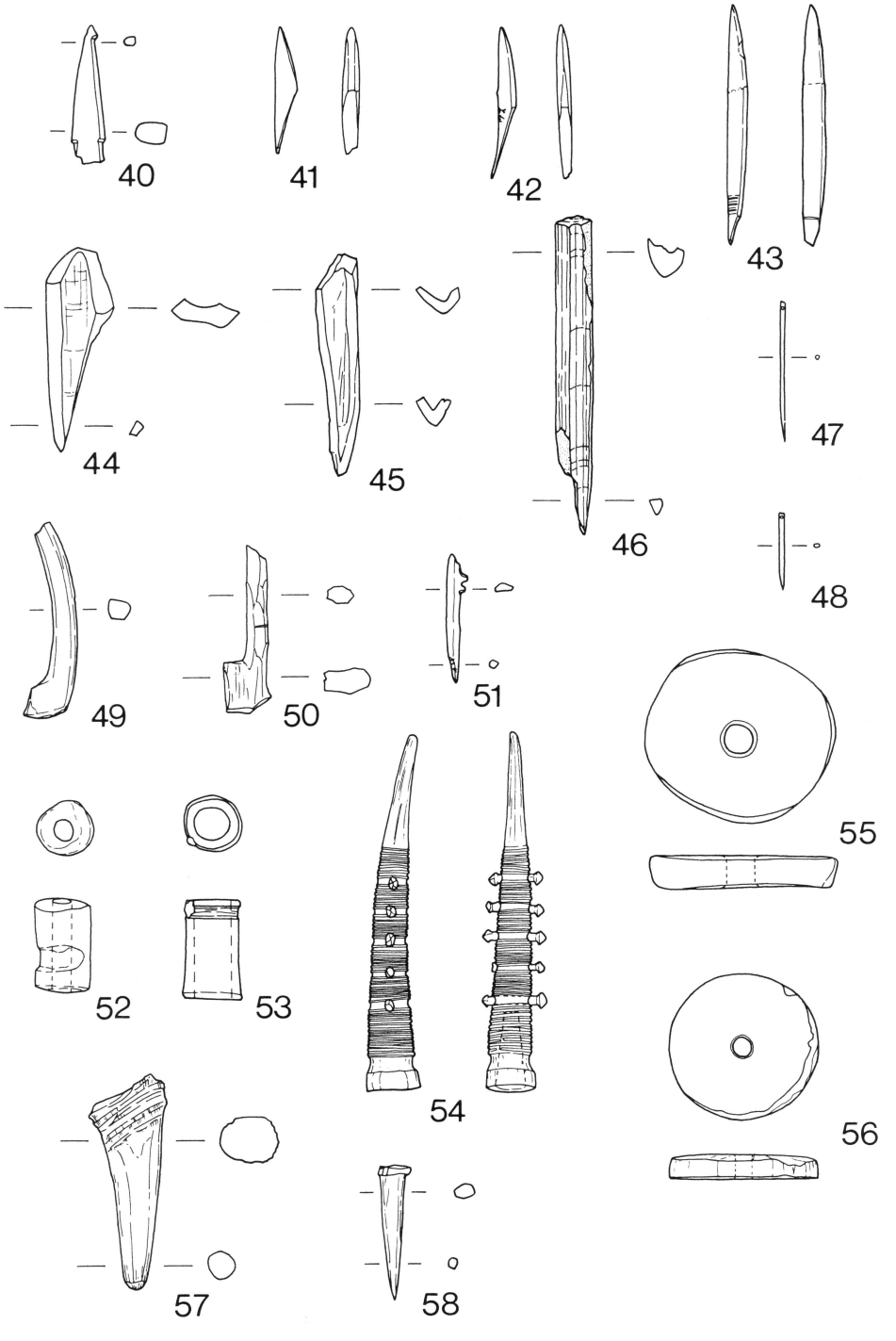
第Ⅰ図　朝日遺跡出土骨角器－Ⅰ－(1/2)



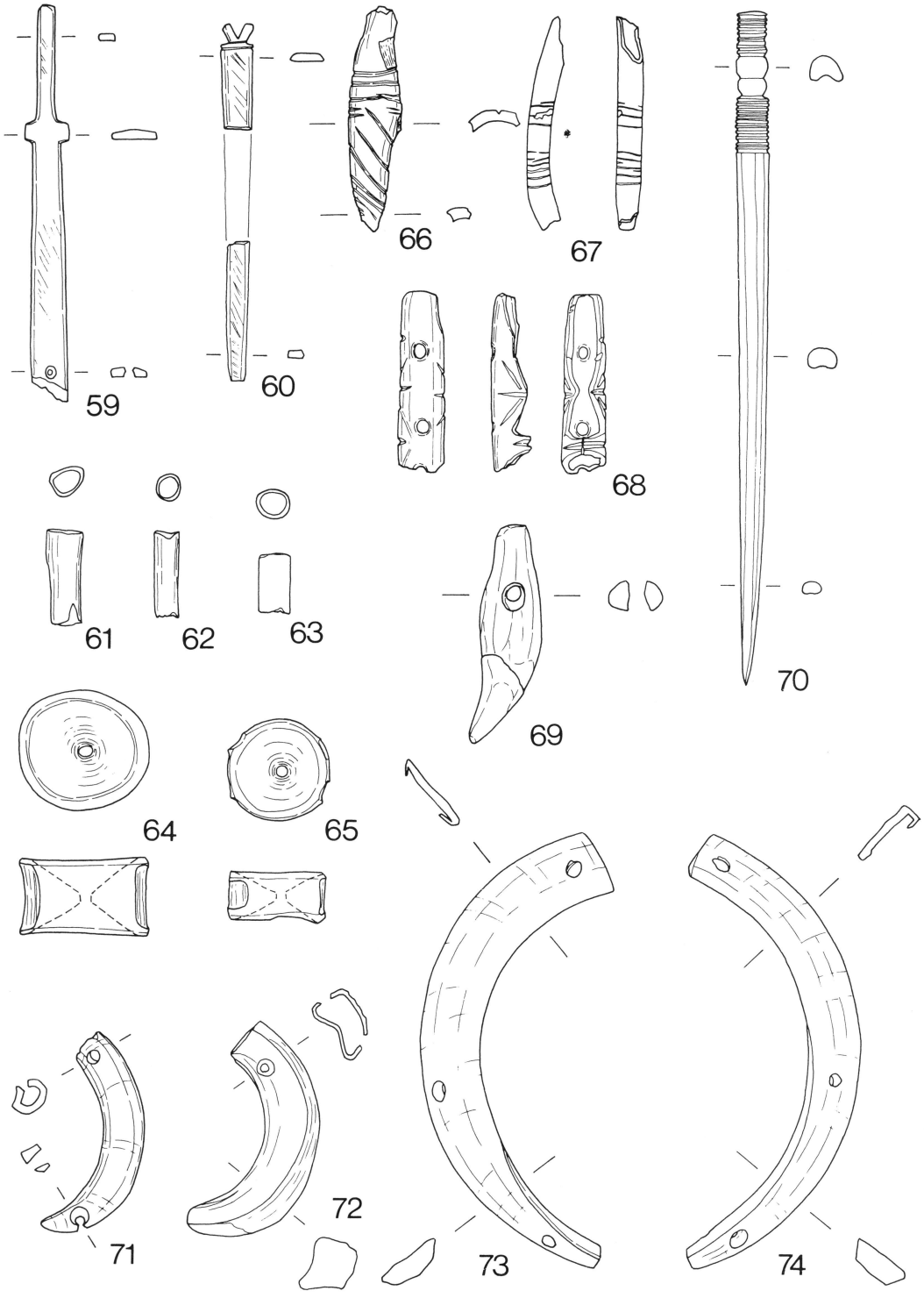
第２図　朝日遺跡出土骨角器－２－(1/2)



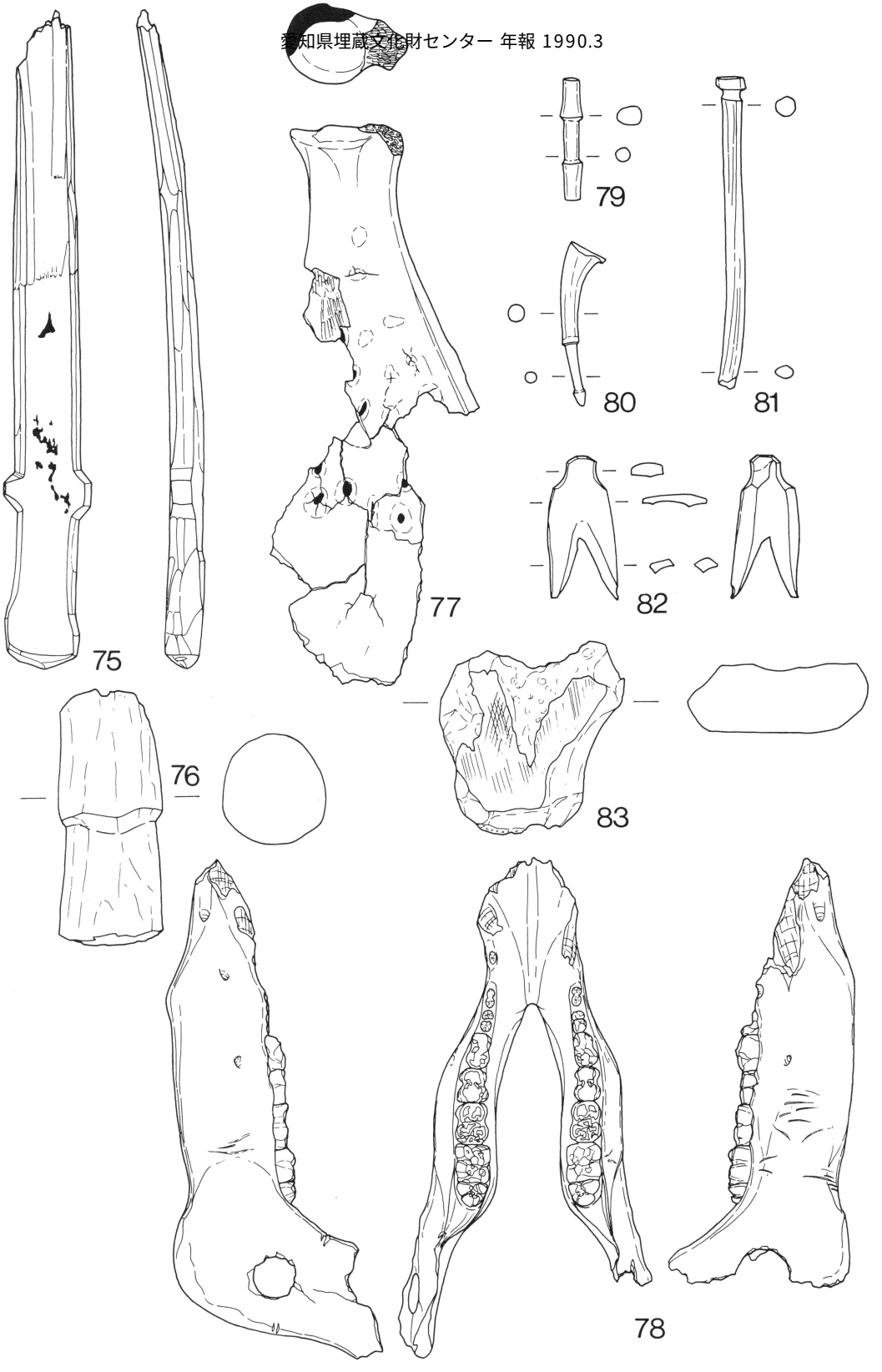
第3図　朝日遺跡出土骨角器－3－(1/2)



第4図　朝日遺跡出土骨角器－4－(1/2)



第5図　朝日遺跡出土骨角器－5－(1/2)



第6図　朝日遺跡出土骨角器－6－(1/2、75・78は1/3)

春日井市松河戸遺跡ＳＤ120について

後藤　浩一・神谷　友和

１．はじめに

松河戸遺跡は、名古屋市北東に接する春日井市南西部の松河戸町（第１図）に所在し、地理的には尾張平野の南半部を西へ流れる庄内川中流域の右岸に広がる沖積地(標高約13～14m）に立地する。これまでの調査により、水田遺構（室町時代後半～江戸時代）の下層の微高地より縄文時代早期末から後期にかけての遺物・遺構等が数ヵ所確認されている。また、縄文時代中期にさかのぼる埋積浅谷も確認され、縄文時代以後の微地形が明らかになりつつある。

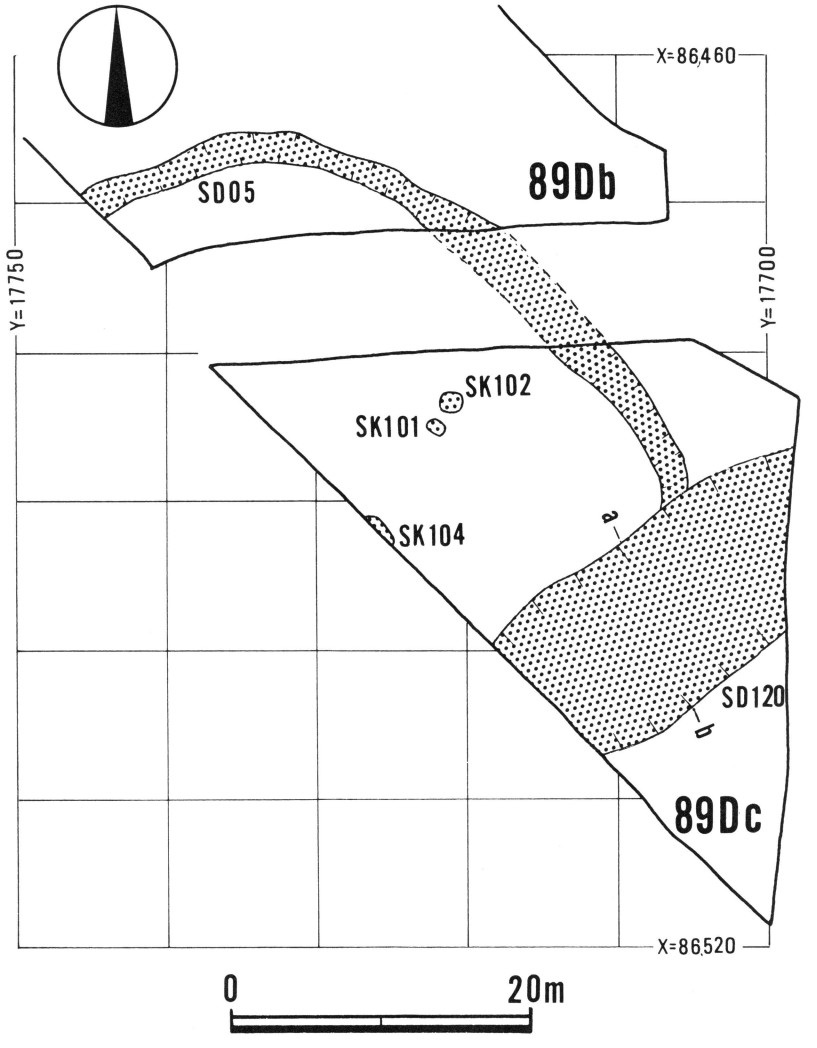
今回調査した89Ｄｃ区（第２図）で、検出されたＳＤ120より出土した縄文時代晩期・弥生時代前期の土器は当遺跡周辺では初例である。本稿では、これらの土器を紹介するとともに、松河戸遺跡周辺の縄文時代から弥生時代にかけての遺跡の動向についても考えていきたい。

２．ＳＤ120の概要

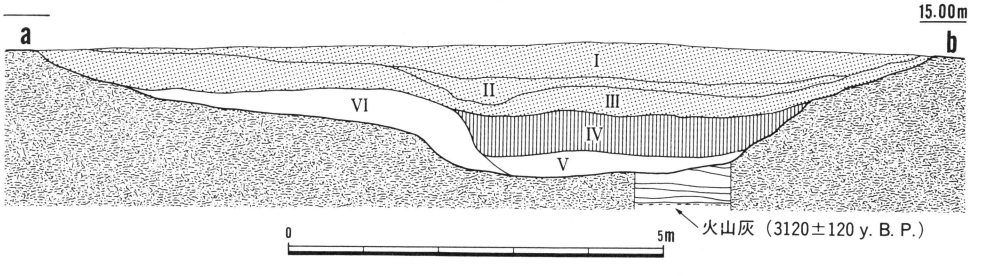
ＳＤ120（第３図）は、弥生時代・中世の時期の遺構がのる黄灰色シルト層の微高地を掘り込んだ幅約12m・深さ約1.8mの東北～南西方向に走る埋積浅谷と考えられる。ＳＤ120上



第Ｉ図　松河戸遺跡位置図（Ｉ：50000）



第２図　89Db・Dc区遺構配置図



第３図　ＳＤ120東壁断面図

層は北西方向に円弧状に伸びるＳＤ05とつながる。ＳＤ120とＳＤ05に囲まれた地区に土坑３基（ＳＫ101・102・104）が存在し、埋土内から弥生時代前期の土器が出土し、その頃にこの地区に集落が形成されていたと考えられ、弥生集落とＳＤ120は密接な関係を有していたと思われる。

ＳＤ120の基本層序を大きく４層に分けて説明する。第Ⅰ層は暗灰褐色シルト・第Ⅱ層が暗灰褐色粘質土・第Ⅲ層が第Ⅱ層の直下で青灰色粗砂となり、南北両端では暗青灰色シルトとなる。以上の３層が弥生時代前期の土器（第５～７図）を包含する層（ＳＤ120上層）であり、幅約12ｍ・深さ約１ｍを測る。土器以外に磨製石剣が出土した。第Ⅳ層は木本質泥炭層であり、流木やクルミ・ヒョウタン・クリ等の自然遺物を多量に含み、幅約４ｍ・深さ約50cmであり、第Ⅴ層は掃流河床堆積物である白色粗砂で、厚く堆積する箇所もみられる。以上の２層がＳＤ120下層で、縄文時代晩期後半の土器（第４図）は、泥炭層と白色粗砂の境界付近で出土したものが大半であった。土器以外に、丸木弓２点・木製品・打製石斧も出土した。

なお、ＳＤ120第Ⅴ層の約40cm下より縄文時代後期と晩期の境界付近に降灰したと考えられる火山灰（3120±120y.B.P.）[1]が検出されており、ＳＤ120は縄文時代晩期に形成された埋積浅谷の可能性が高い。

３．ＳＤ120下層出土の土器（第４図）

壺　（１）　口径18cmの大形で頸部と胴部の境界に屈折部をもち、口縁部は内傾し狭くすぼまり胴部は大きく張る。口縁部外面に研磨を加え、胴部以下に横位の条痕を施す。内面は横の条痕調整の後、なでを施す。

深鉢（２）　口径37cmの大形で、口縁部は素文で外面は横位条痕を施し、やや胴部が張る器形である。内面はなでを施す。

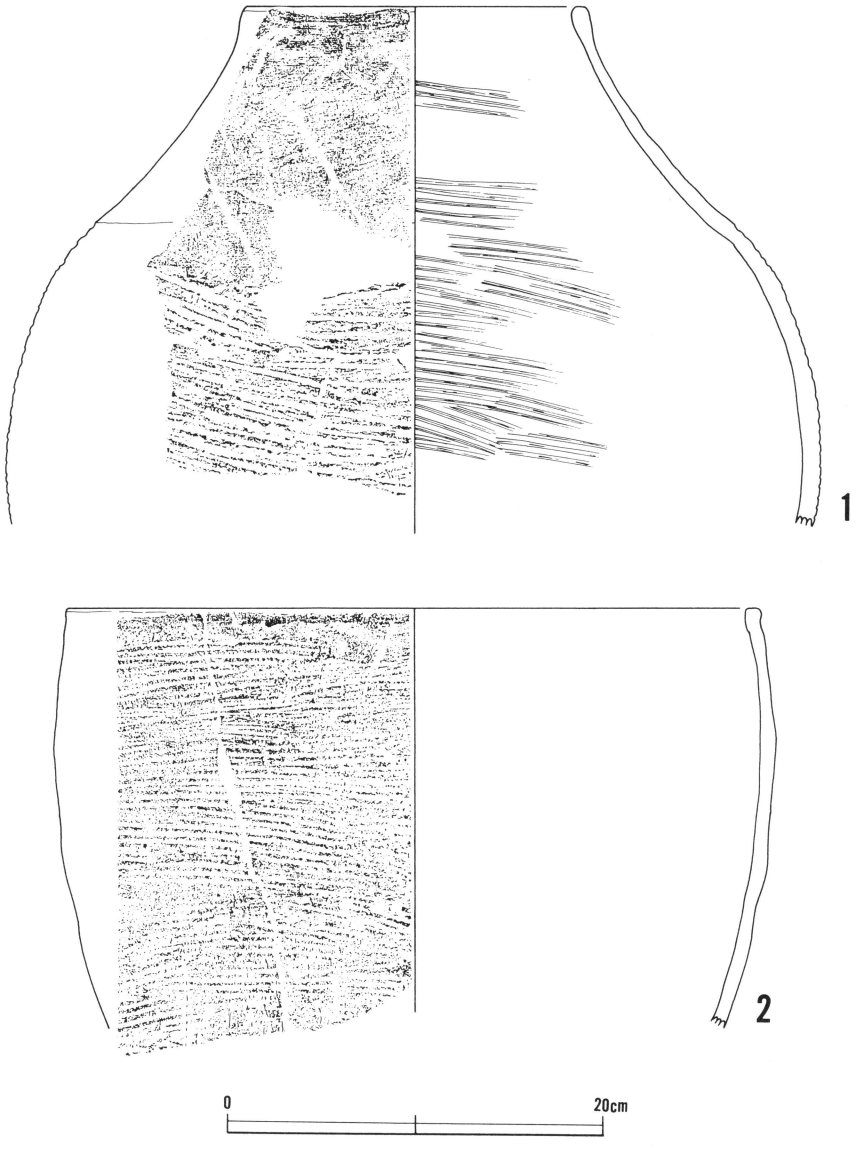
甕　（３～５）　３は断面三角形の素文凸帯をもち、口縁部は外反し内面に沈線を施す。４は素文凸帯を有し、凸帯上部に浅い沈線を施す。凸帯下部は横なでを施す。５は頸部と胴部に段をもち、胴部は右下がりの条痕調整を施す。

浅鉢（６・７）　６は口縁部を肥厚させ、端面に２条の沈線を施す。内面は研磨されている。７は外反する口縁部で肩部が屈折し、その屈折部に長楕円の浮線文を施す。大洞Ａ系統の土器と考えられる。

これらの一群の土器は、愛知県一宮市の馬見塚Ｆ地点[2]出土の土器に類似する特徴をもち、五貫森式に比定される。

４．ＳＤ120上層出土の土器（第５～７図）

弥生時代前期の土器が大量に出土し、遠賀川系土器と条痕文系土器の割合はほぼ半々で



第４図　ＳＤ120下層出土の縄文土器

ある。第Ⅰ層～第Ⅲ層にかけて出土し、層位で時期の細分ができるほどの内容は持っていないように考えられるので、まとめて一括資料として扱っていくことにする。

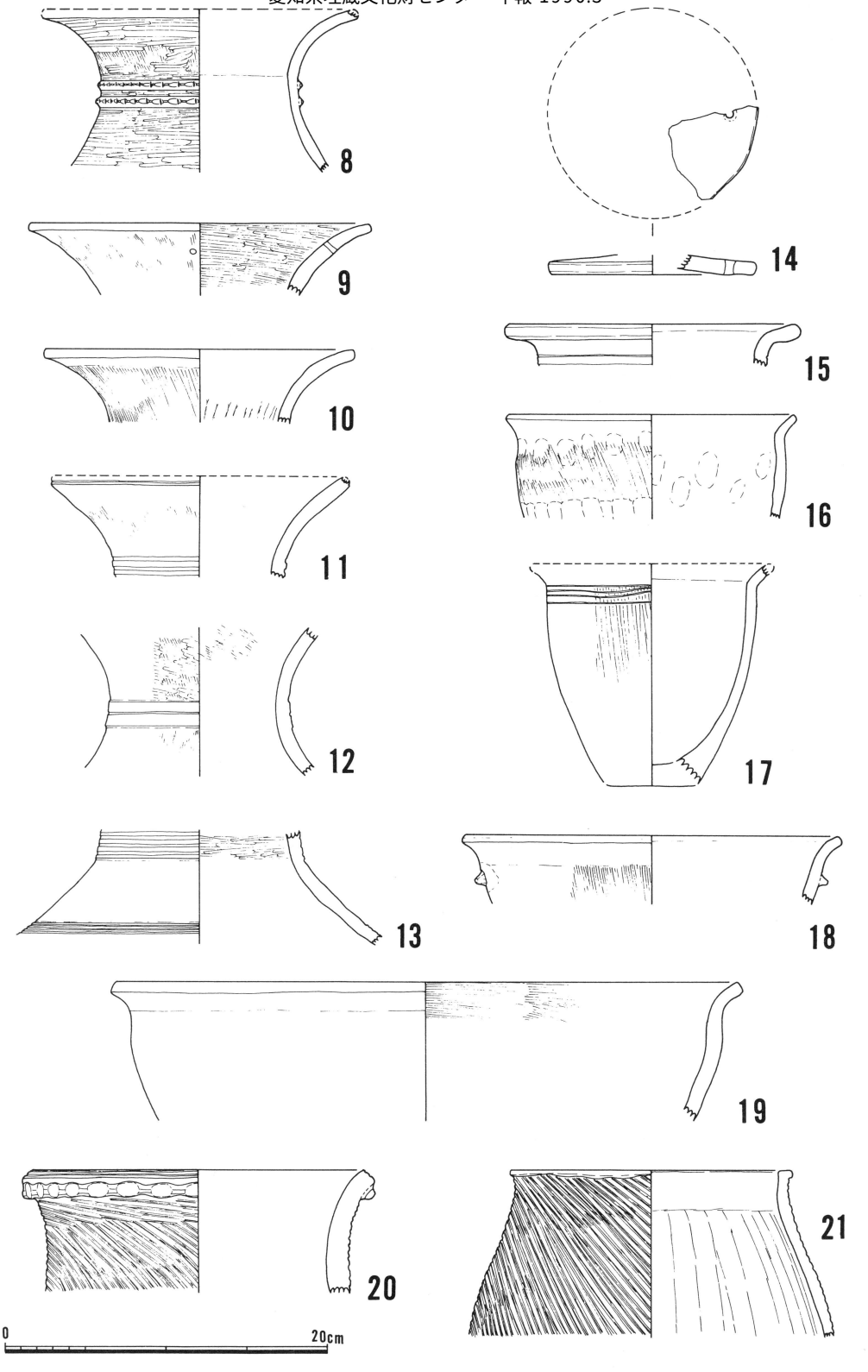
壺A（8～13・22～30）　遠賀川系土器の壺をさす。太い頸部をもち、外上方に大きく広がり、口縁部はやや方形状におわる。頸部に2条の貼付凸帯をもつもの（8・28）があり、8は凸帯上をさらに指圧痕・篦で施文している。11は、口縁端部に篦描沈線を施している。9は、口縁部に穿孔をもっている。11～13・22～25は、頸部・胴部上半に篦描沈線を施し、5条（22）・6条（23）など多条である。頸部に削り出し文様帯（上・下端を切り出して幅広の低い凸帯状のものをさす）をもち、その部位に篦描沈線をもつもの（12・13）がある。26・27は、胴部に貼付凸帯をもち篦の刺突文を施している。29・30は、凸帯の上に指圧痕している。

甕（15～19）　遠賀川系土器の甕をさす。内下方にのびる胴部と外上方にのびる口縁部で口縁端部は方形状におわる。外方に屈曲して端部が肥厚するもの（15）・無文のもの（16）・頸部に4条の篦描沈線をもつもの（17）・頸部下方に2個一対の把手をもつもの（18）・大形のもの（19）などがある。

蓋（14）　壺用の蓋と思われるものが一点出土した。全体の5分の1が残存し、穿孔が1つみられる。偏平で端部は方形状におわる。

壺B（20・31～33）　条痕文系土器の壺をさす。外反する口縁部で端部は方形状におわり、外側の口縁部直下に貼付凸帯をもつ。指圧によるもの（20・32）と篦によるもの（31）とがあり、端部に2条の沈線をもつもの（20）となでているもの（32）がある。器面調整には、横位の条痕（32）・横位と左上がりの単斜条痕（20）・縦の羽状条痕（31）・小形壺の胴部で縦羽状と横位条痕（33）がある。内面はいずれもなで仕上げである。

鉢（21・34～45）　条痕文系土器の鉢をさす。口縁部の形態により、いくつかに類別できる。直立気味の口縁部で内部に突出部をもつもの（34・35）・方形状で面をもつもの（36）・内側に屈曲気味のもの（37）・面取りするもの（38）がある。外反気味の口縁部で端部が方形状におわり刺突文のあるもの（41～43）・無文のもの（40）、端部が丸味をもち刺突文を施すもの（44）、端部が尖り気味で無文のもの（45）がある。21は、外反気味の口縁部で内上方にのび、端部は方形状で外側に折り曲げられている。左上がりの単斜条痕であり、内面は縦方向の器面調整がみられる。器面調整をみていくと、単斜条痕のもの（34～38）・横位と縦羽状の条痕のもの（39～44）・縦羽状条痕のもの（45）



第５図　ＳＤ120上層出土の弥生土器(1)

がある。49・50は、外反する口縁部で端部は尖り気味におわる。端部の外側に篦の刺突文・内側に押引文が施文されていて、器面調整は外側が横位の条痕・内側がなで仕上げである。

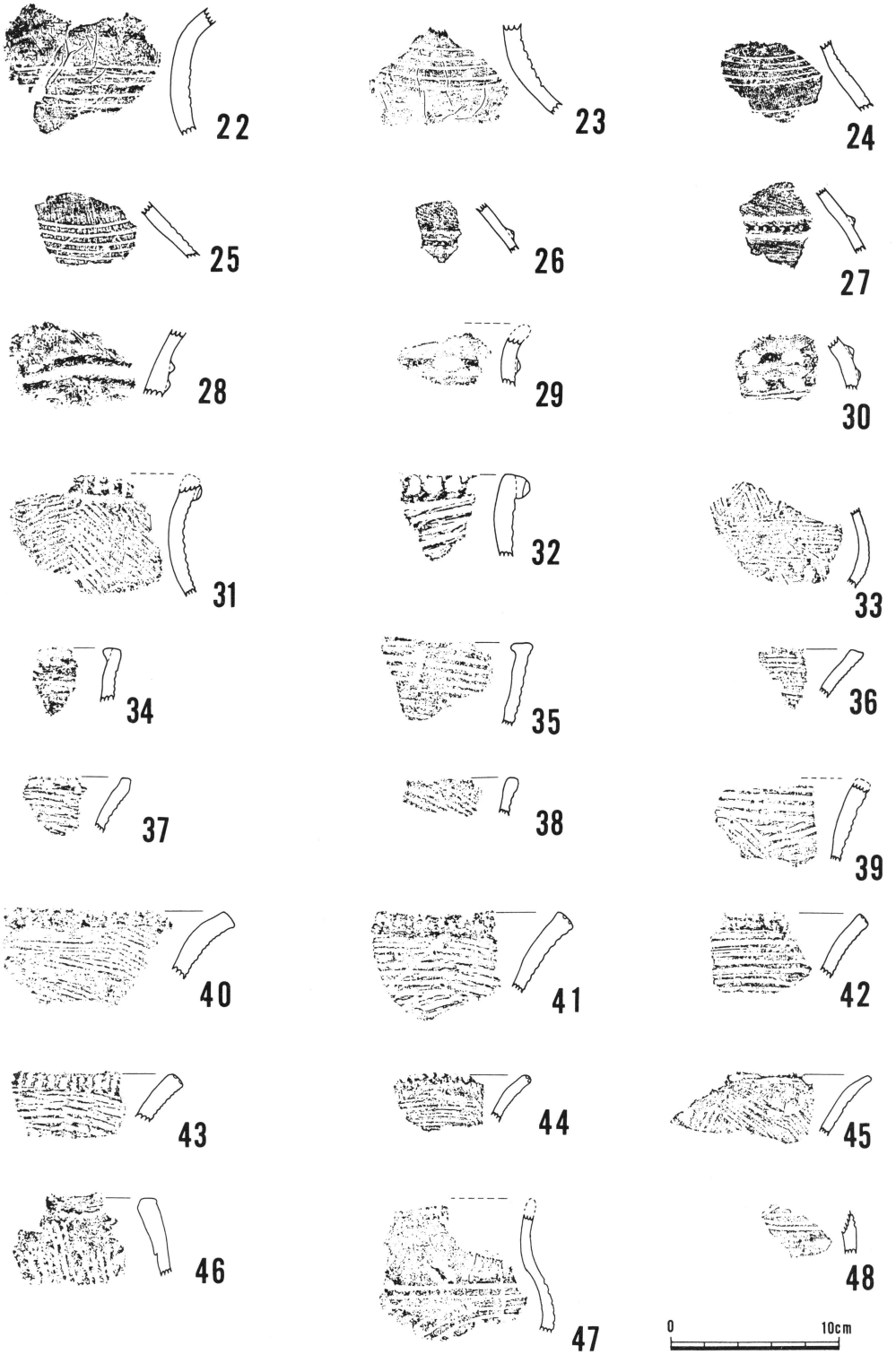
内傾口縁土器（46）　内上方にのび、口縁端部は方形状におわる。外側には縦の条痕・内側はなで仕上げであり、粘土の接合痕がはっきり残る。一宮市尾張病院山中遺跡[3]などに類例がある。

渦巻文土器（47）　口縁部の一部であり、内彎気味で上方にのびる口縁部であり、胴部は膨らみをもつ。胴部に3条の沈線をもち渦巻状に3状の沈線が施文される。一宮市馬見塚遺跡[4]・尾張病院山中遺跡[5]などに類例がある。胎土は赤褐色である。磨滅している。

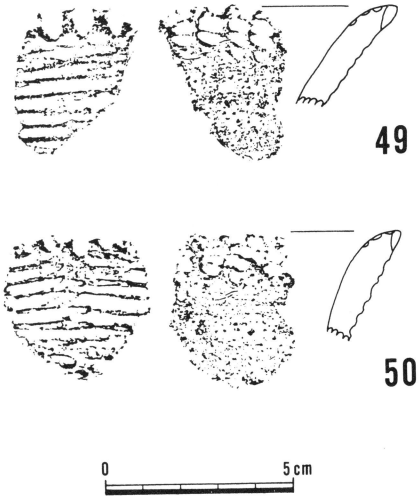
変形工字文土器（48）　胴部の一部であり、変形工字文を構成すると考えられる。外面は研磨され、三角形のえぐりのある変形工字文が施されていたと思われる。内面はなで仕上げである。一宮市二夕子遺跡[6]などに類例がある。

出土遺物をもうすこし検討を加えてみる。従来の編年では、弥生時代前期の遠賀川系土器を細分して朝日第1形式～朝日第2形式[7]、二反地Ⅰ式～Ⅲ式[8]、西志賀1式1層～5層[9]、貝殻山式～西志賀式[10]と研究者によって言われている。朝日第1形式と第2形式の遠賀川系土器の変化は、壺では、頸部・胴部に段や削出凸帯をもつものを主体とするものから、口縁部の外反が強くなり・沈線の多状化がすすみ・貼付凸帯も加わり・幅広い突帯上（削り出し文様帯）に3～4条の沈線を施文するように多様化している。甕では、頸部がゆるやかな屈曲するものから、頸部が強く屈曲して外面に沈線を施すようになる。西志賀1式1層～5層の土器の変化は、層位の堆積により5層に細分できその各層位出土遺物を時期差として捕らえている。器形の変化の推移は上述と同様である。二反地式の場合も、貝層の層序とそれに包含される土器の変遷であり、貝殻山式→西志賀式においても同様であり、そこでは、遠賀川系土器・条痕文系土器という用語に対して第1類～第5類と類別して記述している。つまり、現状の愛知県内では前期を2分・3分する考えであり松河戸遺跡ＳＤ120上層出土遺物は“前期後半”といえる。最近調査された、名古屋市高蔵遺跡[11]の場合では、ＳＤ03から多量の前期の土器が出土し、その一群と比較しても形態・技法に大きな差異をみることはできない。そのＳＤ03を前期末頃としているので、ＳＤ120も前期末には埋没したのであろう。

また、条痕文系土器を取り上げていくと、愛知県内の条痕文系土器の推移は「樫王式→水神平式→岩滑式」と理解されていて、弥生時代の開始を樫王式の時期に置き、前期前半を樫王式・後半を水神平式に併行する[12]と考えられている。ＳＤ120出土の条痕文系土器に



第６図　ＳＤ120上層出土の弥生土器(2)



第７図　SD120上層出土遺物

多様なものが含まれ、問題点としてとりあげてみたい。壺では、貼付凸帯の後に指で指圧痕を施すのが一般的であるが、31のように篦で施文しているものは名古屋市古沢町遺跡１号溝黒土層[13]から出土しているが貼付凸帯に差がみられる。鉢（34・35）の口縁部をもつものは樫王式に相当する古沢町遺跡１号溝貝層出土にもみられ、残存するのか・たまたま混入したのかであろう。さらに、石黒立人氏作成の「《条痕文系土器》主要器種変遷図」[14]と照合すると、そこには載っていない口径がすぼまる鉢21・端部が先細くなる45・端部が丸い44など様々なものが松河戸遺跡で遠賀川系土器と共伴している。それと、鉢49・50について、従来の編年では外面に条痕をもち内面に列点文や波状文が施されるものは「貝田町式か西志賀IIｂ式」と言われていた。ところが、遠賀川系土器に伴って出土した２点は、刻目文と押引文が内外面に施文され、それらとは文様に差異があり、その違いが時期差といえるのかもしれない。しかも、調査区内では、中期の遺構や遺物は検出されていない。弥生時代中期の遺跡ではどこでも出土するような土器であって、この場合はどのように解釈すべきだろうか。春日井市周辺では遺跡の数が少なくて松河戸遺跡近辺の地域色であると断言はできない。あるいは、貝田町式・西志賀IIｂ式にみられる鉢の祖型がこの頃から出現してくるのだろうか。また、条痕文系土器の壺外面に波状文を施文するのがしばしばあり、名古屋市高蔵遺跡や清洲町朝日遺跡など[15]で出土している。ところが、松河戸遺跡ではそれが出土していない。今後に出土するかもしれないが、ＳＤ120の様相が、あるいは尾張平野部での地域色とか時期差の一端を提示しているとも考えられる。

出土遺物の出土地点は、第Ｉ層が16・17・20・25・26・28・34・40・41・45、第II層が10・11・15・24・27・30・31・37・38・44・46、第III層が８・９・12～14・18・19・21～23・29・32・33・35・36・39・42・43・47～50である。

５．まとめ

ＳＤ120と弥生集落　松河戸遺跡周辺の遺跡立地については以前記したこと[16]がある。その概要は、鳥居松段丘が、沖積面下へ埋没する南北に細長い礫層の微高地上に縄文時代早期末から後期にかけての土器や遺構が確認されているということであった。[17]また、それらの微高地に接して、縄文時代中期に形成された埋積浅谷も発見され、松河戸遺跡62Ｅ・Ｆ

・G区では、その微高地を巧みに利用した縄文集落が確認されている。

今回89D区で調査した微地形はそれらとは異なり、東西に帯状に細長く伸びる黄灰色シルト層を基盤とする自然堤防状の微高地に弥生時代前期の集落が立地し、縄文時代晩期に形成された埋積浅谷（SD120）と集落が密接に結びついている状況が窺える。

SD120の下より発見された縄文時代後期と晩期の境界付近に降灰した火山灰より、この微高地は縄文時代晩期以後に約2mを超す堆積のもとに形成され、少なくとも浅谷はこの微高地を掘り込み縄文時代晩期後半には形成された。

このような縄文時代晩期における「庄内川の氾濫」は、この近辺に後背湿地を形成し、初期稲作に適した自然環境を作り出したと考えられる。また、埋積浅谷と初期稲作は密接な関係があったと井関氏により指摘されており[18]、その意味でもSD120と弥生集落との関係は示唆的である。

松河戸遺跡とその周辺　周辺の弥生時代の集落をみていくことにしよう。春日井市内では勝川遺跡・町田遺跡などがあるが、いずれも前期の土器は出土していない。前期の遺跡をみると、春日井市のほかに岩倉市のんべ遺跡・一宮市元屋敷遺跡・馬見塚遺跡・山中遺跡・清洲町朝日遺跡・名古屋市西志賀遺跡・高蔵遺跡など尾張地域で20ばかりの遺跡[19]が確認されている。それらの遺跡を遠賀川系土器と条痕文系土器の固体数の割合[20]で「弥生A型」・「弥生B型」に区分でき、伊勢湾沿岸部と内陸部で傾向がはっきりし、「弥生A型」が沿岸部で「弥生B型」が内陸部である。そうすると、松河戸遺跡は内陸部にあたり、しかも、庄内川の中流域では初めての検出となる。庄内川流域では、下流の西志賀遺跡や月縄手遺跡の沿岸部の遺跡が検出できただけであったのが、中流域まで前期の遺跡が広がってきたことは、さらに上がっていって美濃地域との交流（庄内川水系）を考えていく資料となるだろう。

そして、松河戸遺跡に縄文時代晩期～弥生時代前期に住んだ人々は、おそらく、勝川遺跡に移動したのだろう。勝川遺跡[21]では、弥生時代中期初頭から遺構・遺物が検出されていて、古墳時代前期まで存続する拠点集落である。勝川遺跡では、竪穴式住居跡が32軒・方形周溝墓52基・居住域を囲む溝（環濠）が南東山地区・上屋敷地区の鳥居松段丘上や段丘下の町田地区に立地し、同じく段丘下の苗田地区の溝や掘立柱建物群や木製品貯蔵場など検出されていて、弥生集落を形成している。おそらく、松河戸遺跡に来た人々は、何等かの事情によって、そこを放棄して、勝川遺跡のより安定した場所に定住したと考えられる。あるいは、王子製紙春日井工場の建設に伴って若干の遺物が出土しているのでそちらの方へも移ったかもしれない。弥生時代前期の遺跡の立地がほぼ自然堤防上であるのも、稲作とのかかわりで理解できる。今回の資料が単なる資料紹介でなくて、弥生時代を解釈

するものとなればと思う。

謝辞

本稿を作成するにあたり、石黒立人・赤塚次郎・松田　訓・安井俊則・岡本茂史・土本典生・岡本直久・真鍋雅治・寺沢　薫・森　勇一・井関弘太郎の各氏には御教示・御助言を承り、記して感謝の意を表します。

註

⑴森勇一・伊藤隆彦「愛知県町田遺跡から発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について」(『町田遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1989年)
⑵澄田正一・大参義一・岩野見司「馬見塚遺跡」(『新編一宮市史』資料編一　一宮市役所　1970年)
⑶岩野見司・赤塚次郎『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』(一宮市教育委員会　1982年)
⑷澄田正一・大参義一・岩野見司「馬見塚遺跡Ｄ地点」(『新編一宮市史』資料編二　一宮市役所　1967年)
⑸澄田正一・大参義一・岩野見司「尾張病院山中遺跡」(註⑷と同じ)
⑹澄田正一・大参義一・岩野見司「二夕子遺跡」(註⑷と同じ)
⑺高橋信明・加藤安信「朝日形式の設定」(『朝日遺跡Ⅰ』愛知県教育委員会　1982年)
⑻久永春雄「東海」(『日本の考古学Ⅲ』1966年)
⑼杉原荘介・岡本勇「愛知県西志賀遺跡」(『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編　1972年)
⑽紅村弘『弥生時代成立の研究』1983年
⑾重松和男編『高蔵貝塚Ⅲ－1985年夜寒地区発掘調査－』(南山大学人類学博物館　1988年)
⑿註⑽に同じ
⒀吉田富夫・和田英雄『古沢町遺跡発掘調査報告書』(名古屋市教育委員会　1961年)
⒁石黒立人「《条痕文系土器》研究をめぐる若干の問題」(『マージナル』５号　愛知考古学談話会　1985年)
⒂愛知考古学談話会編『《条痕文系土器》文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料編Ⅰ　1985年
⒃後藤浩一「勝川・町田・松河戸周辺の縄文時代の遺跡立地について」(註⑴と同じ)
⒄縄文時代早期末から前期にかけての土器が松河戸遺跡63Ｌ区において出土した。(後藤浩一・野口哲也「松河戸遺跡」『年報　昭和63年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1989年)
⒅井関弘太郎「弥生時代以後の自然環境」(『岩波講座　日本考古学２』1985年)
⒆松田　訓「比良（月縄手）遺跡」(『年報　昭和62年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1988年)
⒇高橋信明「尾張東北部及び南西部」(『マージナル』５号　愛知県考古学談話会　1985年)
(21)神谷友和「庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態」(註⑴と同じ)

松河戸遺跡ＳＤ105について

岡本　直久

１．はじめに

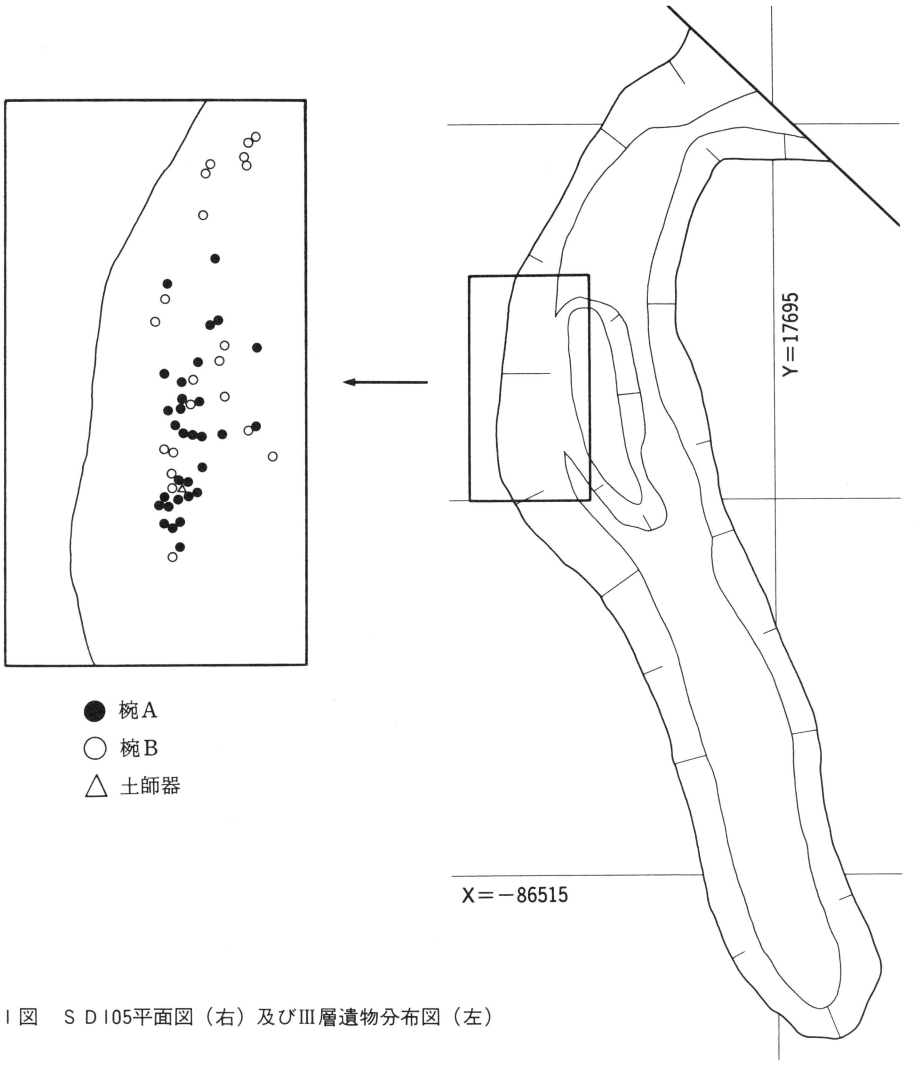
松河戸遺跡は、春日井市松河戸町を中心として西は町田遺跡に接し、東は庄内川に至る広大な面積をもつ。過去３年間の調査において、近世以降の条里制水田跡がほぼ全域に、その下面では、数ヶ所の微高地に縄文時代前期～古墳時代の遺構が散在することを確認している。ところが、中世のまとまった資料は検出されず、わずかにみられた遺構[(1)]についても、その希薄性から、上面遺構である水田跡の開始時期を限定する物差しとしての役割を担うに過ぎなかった。しかし、水田耕作土およびその直下に広がる灰色粘土層に含まれる遺物の大半が灰釉系無釉陶器、所謂「山茶椀」であることから、中世の生活址の存在を予想し得た。

松河戸遺跡89Ｄ・Ｆ区の調査で検出された13～14世紀の遺構群は、松河戸遺跡における空白の時期を埋める重要な資料と考え、その一部を紹介することとした。

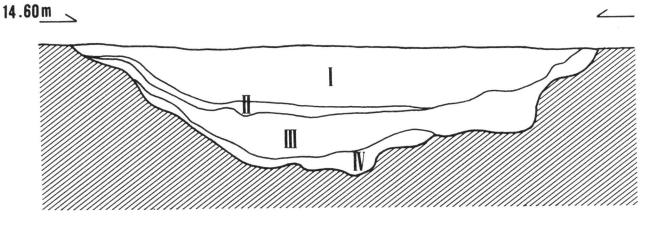
２．遺構

今回取り上げた一括資料は、松河戸遺跡89Ｆａ区ＳＤ105において検出したものである。ＳＤ105はＬ字状に曲がる溝で、このうちＦａ区にかかるのは南北方向の溝（西溝）である（第１図右）。西溝は長さ約12.9m、幅約1.8m、深さ0.6mで、西に向かって若干屈曲する。溝の南端は立ち上がって終わり、北端は東に折れた所で調査区外に及ぶ。溝の南半分は東西両肩がほぼ平行するが、北半分は西肩が外に張り出し、そのため全体的に弧状を呈しているように見える。最大幅2.8mである。また、この部分の底部は楕円形に0.2m程度落ち込む。

ＳＤ105の基本層序は、Ⅰ：灰色粘土ブロック、Ⅱ：Ⅰ層及び鉄分、Ⅲ：暗灰色粘土、Ⅳ：暗青灰色粘土である（第２図）。この内、遺物を含むのはⅠ層とⅢ層である。両層とも遺物の出土地点は西溝西半に偏っているが、Ⅰ層が溝の北端から南端まで隔たりなく遺物の出土を見るのに対し、Ⅲ層は西肩が外に張り出す部分に集中する。また、遺物を比較してみると、Ⅰ層がほとんど破片であるのに対し、Ⅲ層は完形が目立つ。Ⅳ層は、楕円形の落ち込みの埋土である。



第1図　SD105平面図（右）及びIII層遺物分布図（左）



第2図　SD105断面図（1：40）

3．遺物

ＳＤ105の出土遺物は、その大半を灰釉系陶器、一般に「山茶椀」と呼ばれる無釉の椀・皿が占めている。これらは、前述した如くⅠ層とⅢ層で異なった破壊状況を示しているが、遺物自体に両層の違いを見出せるであろうか。

無釉陶器を分類するにあたり、まず、胎土を基準に２つの大枠を設定した。１つは、胎土粒子が細かく表面が滑らかで器壁の薄い椀・皿（椀Ａ・皿Ａ）、もう１つは、胎土が粗く表面がザラつき器壁の厚い椀・皿（椀Ｂ・皿Ｂ）である。その上で、それぞれを器形により型式分類した。

・椀Ａ

椀A_1（第３図１、第５図１）高台がしっかりしており、腰部に張りがある。内面底部中央がやや高く、体部との境に稜を持たない。口縁端部は丸く仕上げられる。口径は14.5cmを中心とするが、最大と最小の差は２cm近く、器高も5.5cmを中心に１cm以上の差がある。

椀A_2（第３図２～６・12～14、第４図１～９、第５図２）高台が低く退化する。体部は内湾気味に開き、口縁直下で外反する。口縁部はやや肥厚し、面取りが行なわれる。内面底部は強くナデられ、そのため底部器壁が極めて薄くなる。内面体部と底部との境には稜が見られる。この類は、口径が13.8cmを中心に、器高は5.7cmを中心に、共に１cm以内で納まる種類と、口径が11cm台、器高５cm台の規格性を強く持つ「小椀」（第３図12～14）がある。

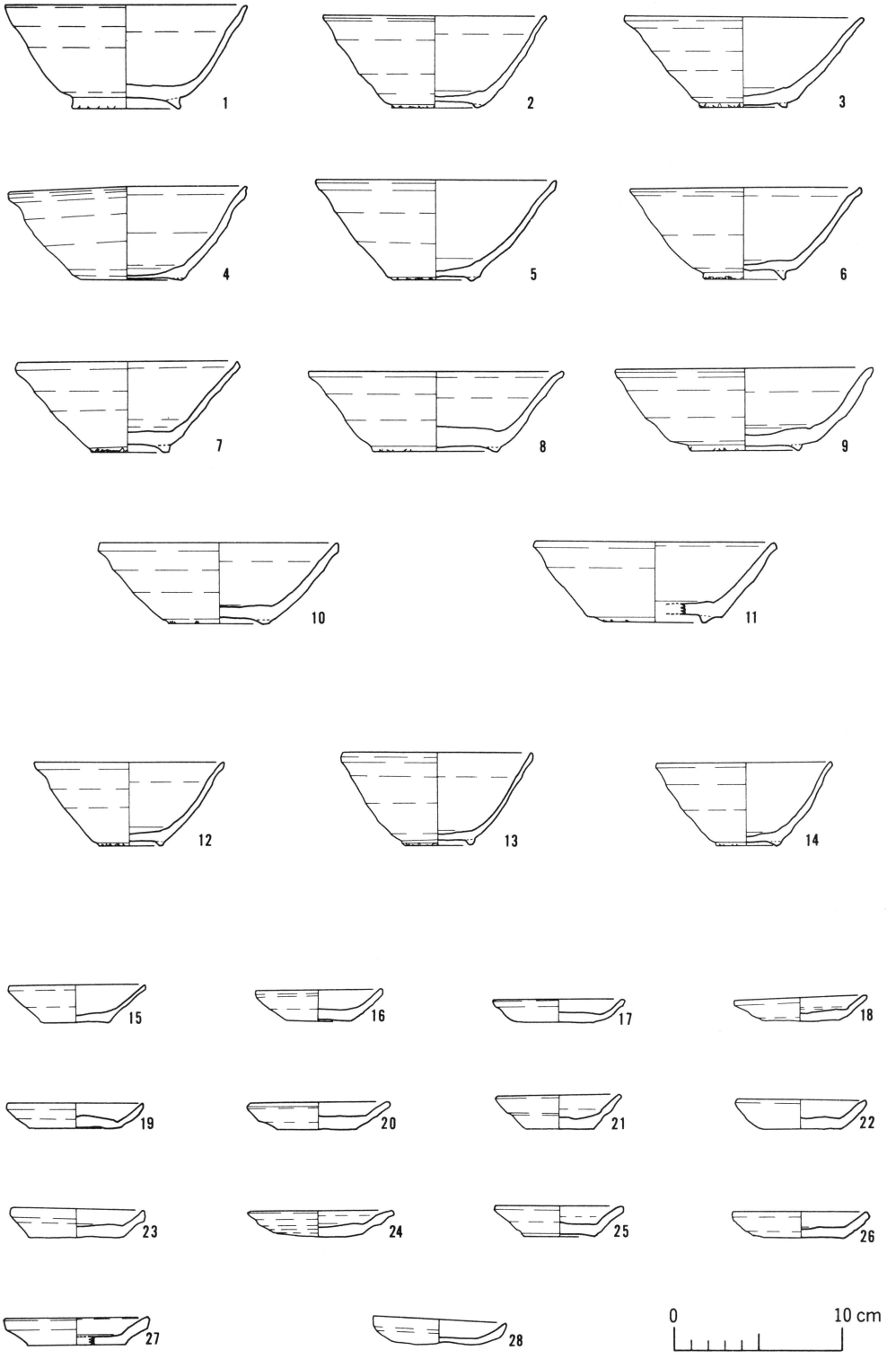
椀A_3（第３図７）体部が直線的に開く。口縁端部はやや内傾し尖る。内面底部は平面で体部との境に明瞭に稜を作る。胎土は細かいものの石粒を多く含む。

・椀Ｂ

椀B_1（第３図10・11）腰部に丸みがあり、口縁直下で外反する。内面底部と体部との境が輪状に凹む。口径に比べ器高が低く扁平な感じを受ける。

椀B_2（第３図10、第５図３・４）腰部に丸みを残し、口縁直下で外反する。口縁部を幅広く面取りするため端部の尖るものが多い。高台はつぶれて断面台形を呈する。内面底部中央は強くナデられ、体部との境には稜を持つ。口径は14cm前後、器高は５cm前後である。数値によればかなり規格性が見られる。

椀B_3（第３図11、第５図５～７）腰部に丸みがなく直線的に立ち上がる。口縁直下で若干外反する。内面体部も湾曲しないために底部との境に角を作る。口縁部は広く面取りし、端部を尖らせる。この類は、口径と器高の比率から２種類に細分可能である。１つは、口径に対する器高比（以下、対口径比）[(2)]が35％前後のもの（第３図10・11、第５図５・７）、もう１つは対口径比が40％を越えるもの（第５図６）である。



第 3 図　III層出土遺物実測図

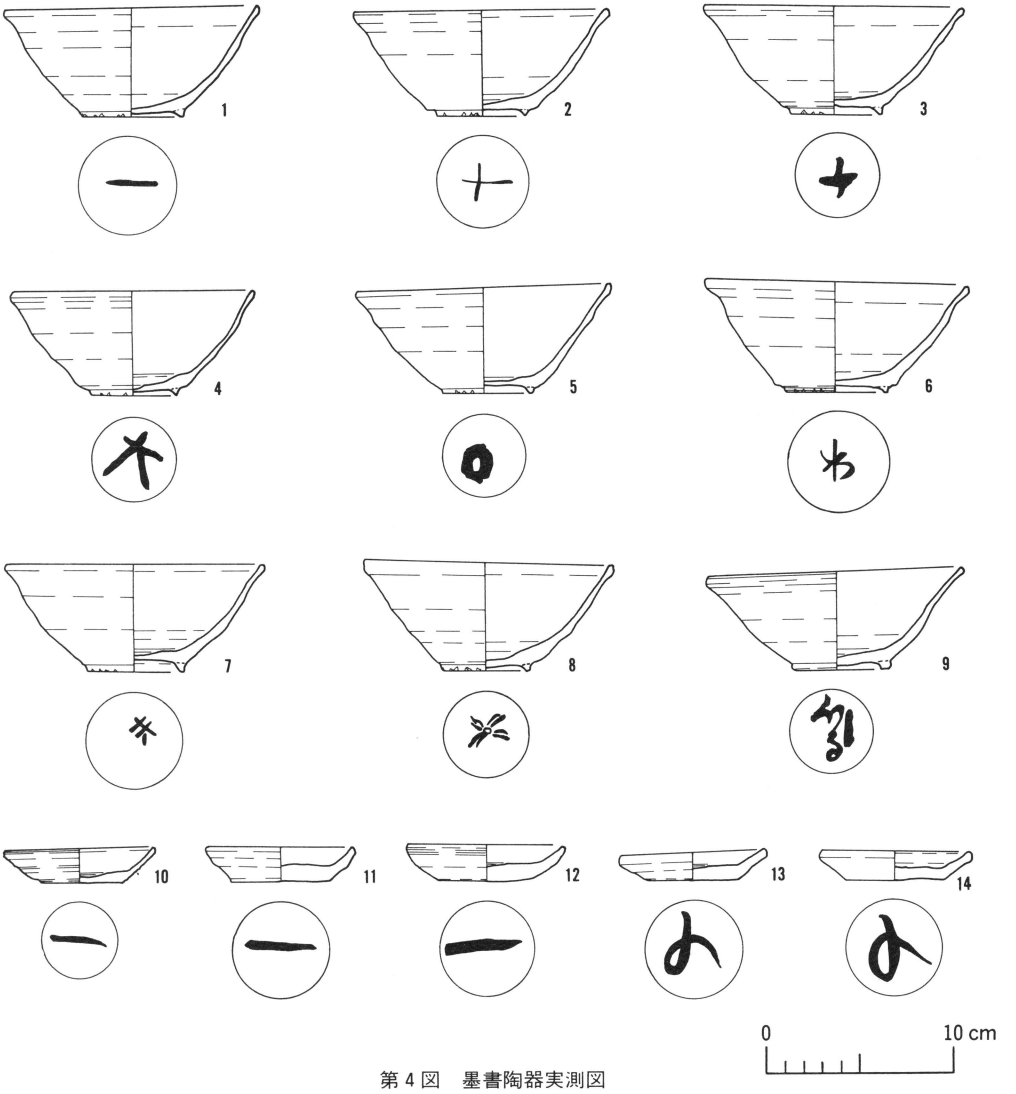
椀B_4（第５図８）無高台であり、形状は椀B_3と共通する。

・皿Ａ

皿A_1（第３図15・16、第５図９）体部は直線的で、内面底部は丸く滑らかに仕上げられる。口径８㎝前後、器高２㎝前後を計る。

皿A_2（第３図17～19）内面底部と体部との境に輪状の凹みを持つもので、底部中央が盛り上がる例が多い。体部は直線的で、口縁端部に面取りを行う。対口径比が20％を下回る低い器形である。

皿A_3（第３図20、第４図10、第５図10）体部は直線的で、口縁端部に面取りを行う。内面底部は平面的で、体部との境は明瞭に稜が作られる。底部中央には強弱の差こそあるも



第４図　墨書陶器実測図

ののナデが見られる。第４図10は極薄手で他の２例とは区別されよう。

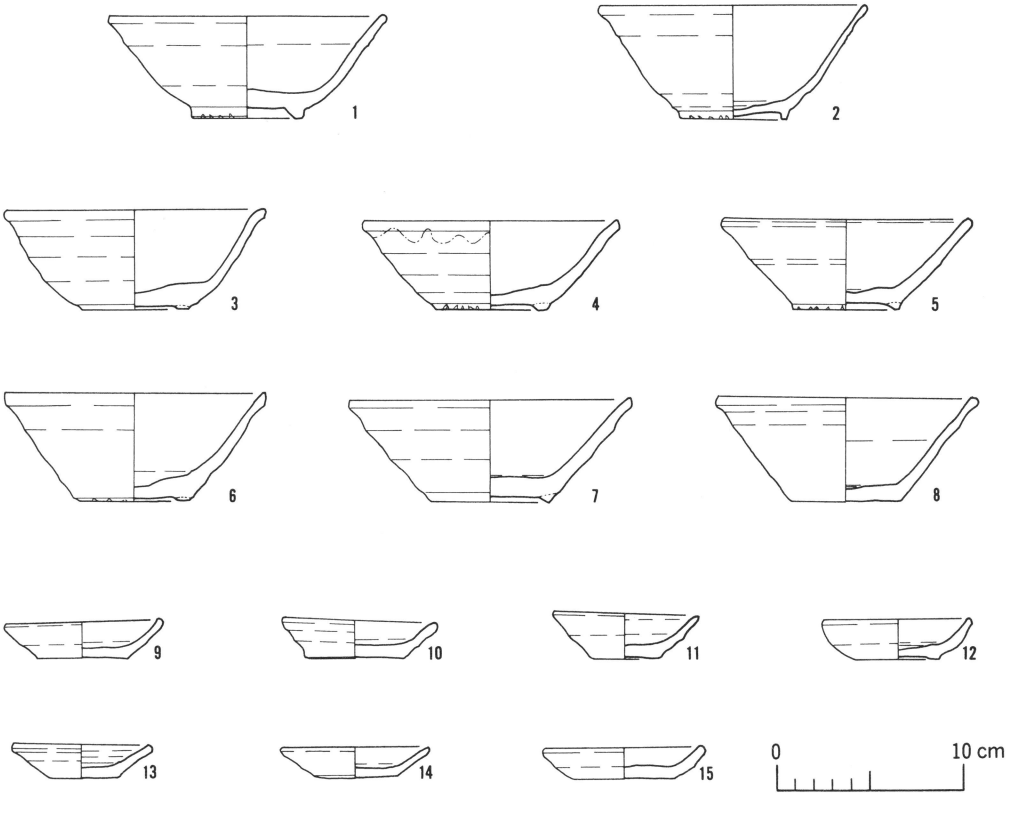
・皿Ｂ

皿B_1（第３図21、第５図11・12）この種に該当するものは、腰部から口縁部に向って先細りする点と対口径比25％前後を計る点で共通する。それ以外は非共通点が多く、細分の検討を要する。

皿B_2（第３図22～27、第４図11～14、第５図13～15）器壁の厚さが体部・底部とも均一で、口縁部に幅広い面取りが見られる。器高が２cm以下で、対口径比20％前後と扁平な形状を呈する。これらは、体部の形状から３種類に細分可能である。１つは腰部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの（第３図22・23・26、第４図13・14、第５図13・14）、１つは体部が外反するもの（第３図24・25・27）、もう１つは体部が内湾するもの、（第４図11・12、第５図15）である。

土師器皿（第３図28）薄手で口縁部がやや肥厚する。口縁端部は鋭く尖る。底部は帯状に底上げされる特異な形状を呈する。

このように、椀Ａを３類、椀Ｂを４類、皿Ａを３類、皿Ｂを２類に分けた。墨書陶器（第



第５図　Ⅰ層出土遺物実測図

4図）は確認できるものがすべてⅢ層出土であり、その内、椀に限ればすべてが椀A_2である。皿はB_2が多い。

椀に限定して時期区分を追ってみると、それぞれの形状から、A類は椀A_1と椀A_2・A_3に大別でき、B類は椀B_1と椀B_2・B_3・B_4に大別できる。この内、Ⅲ層には椀B_4が存在せず、Ⅰ層には椀A_3・B_1・皿A_2が存在しない。つまり、Ⅰ・Ⅲ層共に椀A_2・椀B_3が認められ、両層間に決定的な時期差はないと思われる。ただ、両層の埋土から、Ⅲ層は溝の活動時、Ⅰ層は溝の放棄時という区別ができるのみである。

4．SD105の性格分析

これまで述べてきた事実関係と遺物の出土状況をもう一度整理し、総合的に分析することによって、SD105の性格を解明してみたい。

1．Ⅰ・Ⅲ層とも遺物は西側斜面に偏っている。

2．Ⅲ層の遺物に完形の椀・皿（特に椀A_2類）が目立つ。

3．Ⅲ層の椀・皿のうち、椀A類が集中的、椀B類が散在的に分布する（第1図左）。

4．Ⅲ層の遺物のうち、椀の中に皿を重ね入れる組合せが4組見られる（第3図4と第4図10、第3図13と同図19、第4図1と第3図28、第4図9と第3図26）。

5．墨書陶器はすべてⅢ層出土である。

溝が東へ折れることから溝の東が内側、西が外側と推定できる。つまり、1より、遺物は外から廃棄されたことになる。また、2・3より、椀A類の完形を西肩の一点から入れたことがわかる。その位置で肩が外に張らむこともこの推測を裏付けている。そして、4・5は呪術的、儀礼的意味合いを持つものと思われる。

このような解釈の上で総合すると、次のような推論が成り立つ。溝の外側（西側）に居住する庶民が溝の内側（東側）の空間に対し一種の神聖意識を持ち、椀・皿等を捧げたのではないかと思われる。これに該当する椀が椀A_2類であり、これらは表面が滑らかで奇麗な椀であることから、「奇麗なもの＝貴重なもの」と考え、捧げられたのではあるまいか。つまり、SD105は俗世界と聖界とを画する溝といえる。なお、4の椀・皿の組合せは、椀については椀A_2類に限られるのに対し、皿はA類が1点、B類が2点、土師器皿が1点と別れる。このことは、椀に比較して皿への価値観の低さを感じさせる。

5．まとめ

本稿は、SD105の性格分析を目的とした。そして、溝の性格から、広げて溝を挟む東西両域の性格まで推論し、結果として祭祀的性格を導き出したのであるが、溝一条のみの考察であり、かなり危険を伴った結論であることは否めない。今後、面的調査を重ねることによって解明されていくものと思われる。

なお、椀A類は一般に「均質手山茶椀」と呼ばれる椀である。春日井市では北東端に位置する内津第1号・2号窯(3)がこれに該当する。この古窯に見られる椀はSD105の椀A_2類に酷似する。春日井市には須恵器窯が多く、無釉陶器に関しては内津第1号・2号窯より他に例を見ていないが、SD105に椀A_2類が多いことは消費地である松河戸遺跡と生産地である内津古窯との間にある程度の関わりがあると考えられる。今後の研究課題のひとつである。

内津第1号窯の資料は春日井市教育委員会の古澤直道氏のご好意により実見させていただいた。文末ではあるが記して謝意を表する。

註

(1)松河戸遺跡63L区で13世紀代の溝1条が検出されたのみである。
(2)器高÷口径
(3)春日井市教育委員会　1981　「内津第1号窯」『春日井市遺跡発掘調査報告　第7集』

参考文献

藤澤良祐　1982　「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』
田口昭二　1983　「美濃窯における白瓷と山茶椀」『土岐市美濃陶磁器歴史館報Ⅱ』
愛知県教育委員会　1983　『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1987　『土田遺跡』
愛知考古学談話会　1987　『マージナル　No.7』

岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物

服部 信博

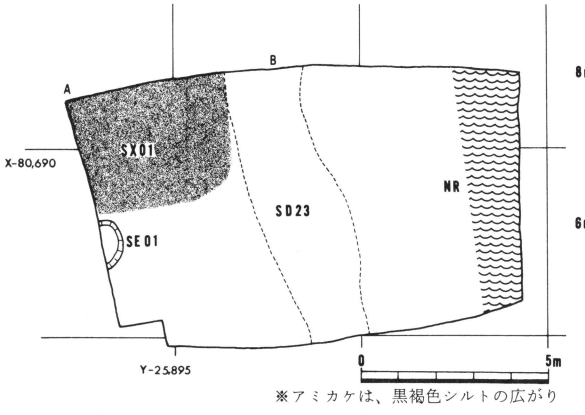
I はじめに

昭和63年より発掘調査を実施している岩倉城遺跡は、戦国期の岩倉城の時代を中心とする遺跡であり、調査自体もそれを明らかにすることを主目的としてすすめられてきた。今回、五条川左岸の89Ｅａ区下層において、新たに古墳時代前半期の遺構を確認し、それに伴う古式土師器が一括して出土した。

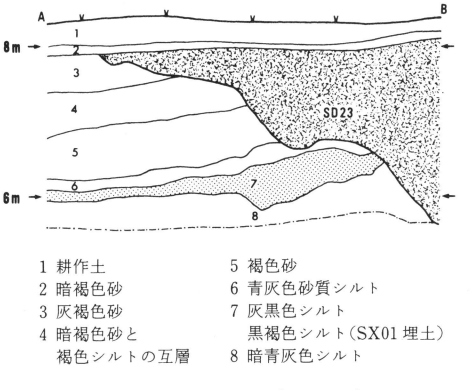
尾張地方は、東西日本両文化圏の境界に位置し、その調査・研究動向は各時代を通して常に注目される地域といえる。しかしながら、当地方における古墳時代前半期の遺跡の調査は、僅かに清洲町廻間遺跡(注1)・稲沢市塔の越遺跡(注2)・名古屋市若葉通遺跡(注3)など数例あるのみで、研究を進めていくうえでの資料不足の感は拭えない。そういった状況のなかで本遺跡より一括して出土した土器は、当地の古式土師器編年研究に欠くことのできない貴重な資料と考えられ、以下、調査によって判明した遺構・遺物を中心に報告していきたい。また、従来より注目されてきた西北出遺跡出土資料に関しても、調査する機会を得たので、併せて紹介していくことにする。

II 岩倉城遺跡89Ea区下層の遺構

岩倉城遺跡89Ｅａ区は、五条川左岸の自然堤防上に設定した調査区である。(注4)調査区周辺の地形は、東から西へ向かって緩やかに傾斜しており五条川に至る。高所で標高9.5m前後、



第１図　89Ea区下層遺構図（１：200）



第２図　89Ea区北壁断面図（１：100）

低所で８ｍ程であり、89Ｅａ区は、その最も低い五条川沿いに位置する。以下、層位及び検出遺構について概述する。

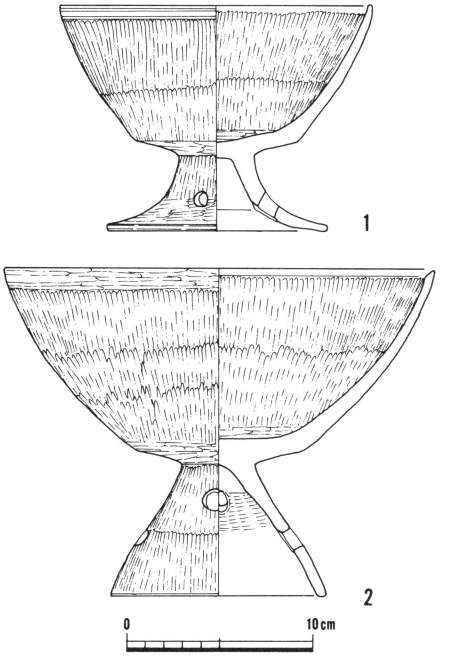
(1)層位（第２図）

89Ｅａ区の層位状況は、第２図に示した通りであり、岩倉城期の遺構は、第３層上位から掘り込まれている。本稿に直接拘わってくる層位は、標高６ｍ前後の第６層～第８層であり、第６層は、古墳時代前半期の土器を多量に含み遺物包含層となる。第７層は、灰黒色シルト層で当該期のベース面であり、この層の上位で遺構を検出した。第８層では、明確な遺構は認められなかったが、第３図に掲載した欠山期の遺物のみが出土した。[注5]炭化物を多量に含んでおり、弥生時代末期の生活面であったと考えられる。

(2)遺構（第１図）

検出した遺構は、当該期に形成された集落の縁辺部に位置すると考えられ、土器集積遺構（ＳＸ01）、井戸状遺構（ＳＥ01）及び旧流路（ＮＲ）がある。

ＳＸ01　発掘区西端で検出した土器集積遺構である。これに伴う明瞭な掘り込み等はなく、径４～５ｍ前後の自然に形成された窪地状の落ち込みに、多量の炭化物を含んだ黒褐色シルトが、恰も充塡したごとく堆積していた。遺物は、この黒褐色シルト内より、壺・甕・高杯・器台・鉢などが、人為的に置かれた状



第３図　第８層出土遺物（１：４）



89Ea区下層全景（西から）



SX01出土状況（南から）

況で出土した。

ＳＥ01　遺構の大半が調査区外となり、全形は不明だが、径約1.5ｍを測る円形の井戸状遺構と考えられる。ほぼ垂直に掘り込まれているが、0.7ｍ程掘り下げたところで湧水が激しくなり、壁面が崩壊したため、井戸底、内部構造等は確認できなかった。埋土中より、甕・高杯・鉢などが少量出土した。

ＮＲ　岩倉城が五条川に接して築城されているため、89年度調査区の多くで旧流路の痕跡を確認している。Ｅａ区下層で確認した旧流路の対岸は89Ｆ区内にあり、幅約50ｍを測る。時期については、遺物の出土がほとんどみられず決め手に欠けるが、遺構等の関係より、弥生時代後期以降と考えられる。

Ⅲ　岩倉城遺跡89Ea区下層出土遺物について

(1)ＳＸ01出土土師器（第５図）

総数18点の古式土師器が出土した。土器の出土地点は第４図に示した通りであるが、それらは、人為的に置かれた状況で出土した。また、小型丸底土器・小型器台・小型鉢の所謂“小型精製土器３種”は、一定の範囲内よりまとまりをもって出土しており、注目される[注6]以下、大まかに壺、甕、高杯、器台、鉢に分類し、説明を加えていきたい。

壺（12～15）　12のようなミニチュア品もみられるが、広口壺と直口壺に分けられる。

〈広口壺〉　14は、所謂柳ヶ坪型壺の口頸部片である。口頸部なかほどで屈曲、外反し、有段口縁となる。口縁内外面に櫛歯刺突の列点文を羽状に施し独特な文様をつくり出す。15は、体部から強く外反する口頸部を有する。体部最大径は下半部にあり、やや下ぶくれ状の形態を呈する。頸部と体部の境界には一条の凹線を巡らす。外面は横ナデ、ヘラミガキ等によって調整し、体部内面は板状具によるナデで仕上げる。外面及び口縁内面は赤彩で飾り、胎土はよく精選されており、乳白色の色調を示す。

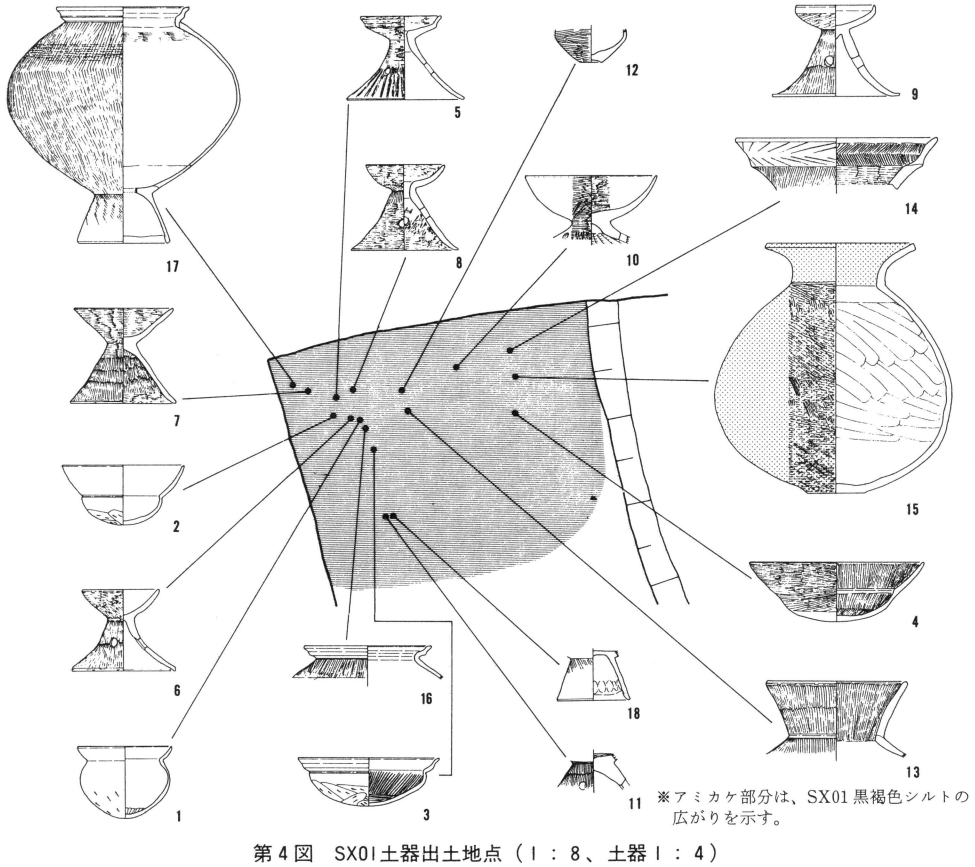
〈直口壺〉　13は、やや外傾し直線的にのびる口頸部を有するもので、体部以下は欠損する。頸部と体部の界には一条の凹線を巡らし、内外面とも丁寧なタテ方向のヘラミガキを施す。

甕（16～18）　すべてＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕）であり、他の形態を呈するものはみられない。Ｓ字甕分類の指標となる口縁部の形状は、16・17ともに口縁中段以上が上外方へ大きく拡大し、端部は肥厚する。また、体部との屈曲部に明瞭な凹線が認められ、これらの特徴より、赤塚次郎氏分類[注7]のＣ類に相当する資料と思われるが、全体的に器壁が厚化し、体部最大径も下方に移る傾向が認められる等より新しい様相を示している。17は、全形を窺うことができる。全体的に器壁は肥厚し体部最大径は中位にある。外面の調整は、ハケを３～４回に分割し、右下から左上に引き上げた後、口縁部との屈曲部から左

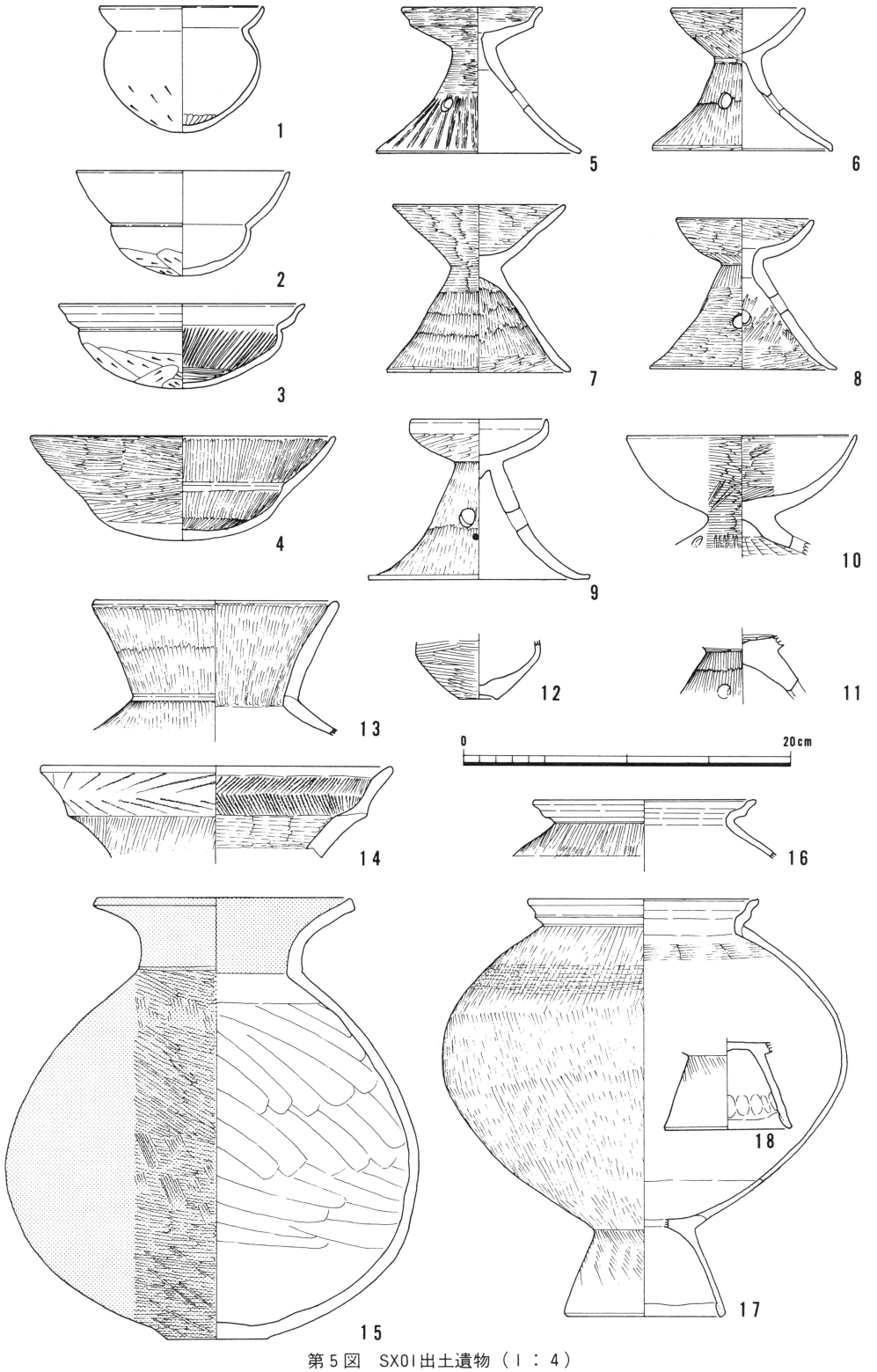
下に引下ろして羽状様にし、さらに体部上半部に横位のハケを施している。内面は、部分的に横ハケの痕跡を残すが、ナデにより平滑に仕上げられている。台部の端部は折り返す。18は台部のみ残存しており、17と同様端部は折り返して整える。

高杯（10・11）　10は、半球状の椀形を呈する深めの杯部に、大半は欠損しているが、裾部径が杯部口径を凌駕するほど大きく開く脚部を有するものである。内外面とも細かいヘラミガキ調整が施される。11は、脚部上半部しか残存していないが、10と同様の形態になるものと考えられる。

器台（5～9）　5点出土したが、いずれも口径・器高とも8～10cm程度の小型器台である。7を除き、緩やかに外反しながら裾が大きく開く脚部を有する点は共通しているが、受部の形態はそれぞれ異なりバラエティに富む。5は、脚部から鋭く屈曲する皿状の受部を持ち、口縁は立ち上がり、外反する。貫通孔を有する。6・8は、半球状の浅い受部を有するもので、8は貫通孔を穿つ。9は、畿内系と考えられ、やや丸味を帯びた受部に、つまみ上げた口縁部を持つ。7は、直線的に外方にのびる受部及び脚部を有するもので、山陰系鼓形器台の影響を強く受けたものと思われるが、脚部がやや長脚の傾向をみせる。



第4図　SX01土器出土地点（1：8、土器1：4）



第５図　SX01出土遺物（１：４）

いずれも外面の調整はヘラミガキ、内面はナデまたはヘラミガキを施す。胎土はよく精選されており、焼成も良好なものが多い。黄褐色・黄白色を呈するが、9のみ淡赤褐色の色調を示す。

鉢（1～4）　器高に比べ、口径が著しく大きいものを鉢類としてまとめた。小型丸底土器を含む四種類の器種が存在し、すべて丸底状の底部を有する点で共通する。1は、丸味を帯びた体部に、内湾気味に外方へ開く短かめの口縁を有する。体部下半はヘラケズリ、他はナデを施し平滑に仕上げられている。2は、小型丸底土器・坩などと称されるもので、扁平な球状の体部に、口径の大きく内湾気味に外方へ広がる口縁部を持つ。口縁部と体部の境界には、一条の凹線が巡る。体部下半はヘラケズリで、その他はナデにより薄く平滑に仕上げられる。3は、畿内系の小型鉢である。浅い椀状の体部に2段に屈曲して外反する独特な口縁部を有する。体部下半はヘラケズリ、また、内面には暗文風の細いヘラミガキが施される。4は、浅い扁平球の体部に大きく直線的に外方へ広がる口縁部を持った浅鉢と称されるものである。内面中位で稜をつくり、口縁と体部を区別する。外面は底部付近を除き横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキで調整する。1～4いずれも胎土は、よく精選されており、焼成も良好である。色調は3が赤褐色を呈する以外、黄褐色・黄白色を示す。

(2)SE01出土土師器（第6図）

甕3、高杯1、鉢2の計6点が埋土中より出土した。

甕（4～6）　S字甕のみ出土した。口縁部の形状は、4～6いずれも口縁中段以上が上

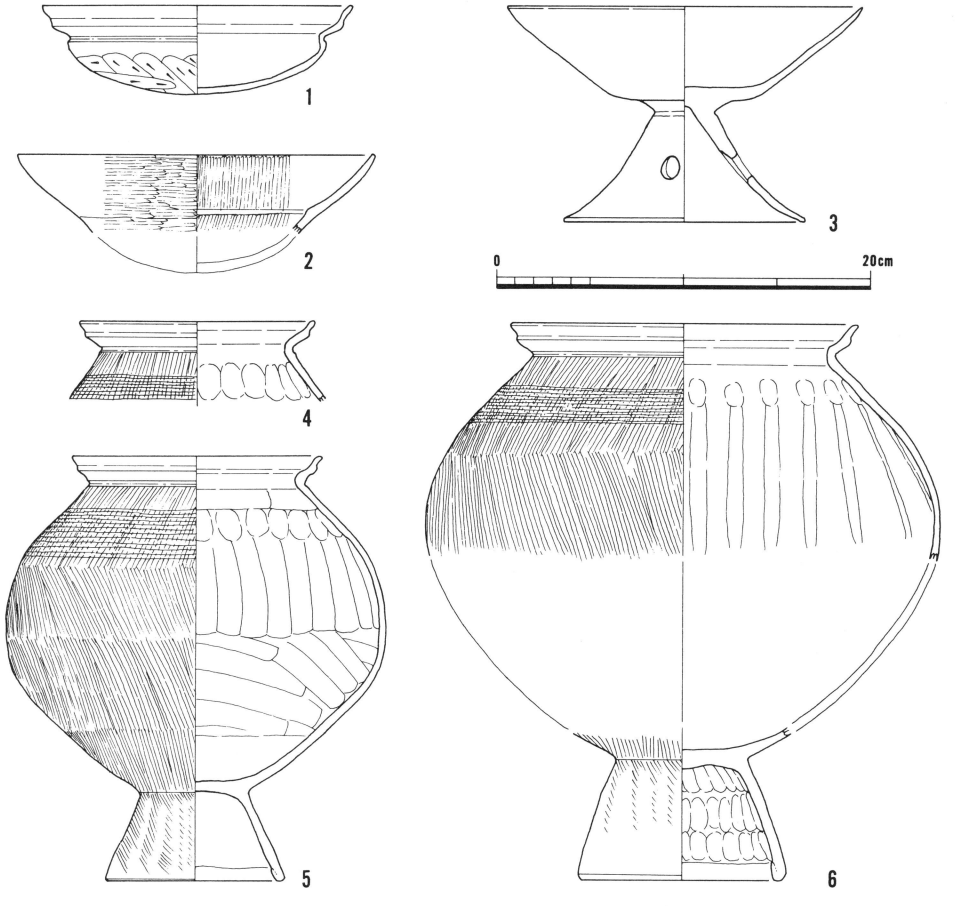
番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	体部径	底径	脚径	胎土	色調	焼成	備考
1	鉢	9.8	7.6	9.4			砂多いが精緻	黄白色	良好	
2	小型丸底土器	12.8	6.4				〃	淡黄褐色	〃	
3	鉢	15.0	5.2				〃	赤褐色	〃	畿内系
4	鉢	18.4	6.4				〃	淡黄白色	やや軟質	
5	小型器台	8.4	8.9			12.3	〃	淡黄褐色	良孔	透孔3ヶ所
6	小型器台	8.1	8.7			11.0	精緻	黄褐色	〃	透孔3ヶ所
7	小型器台	10.4	10.2			11.1	砂多いが精緻	淡黄褐色	〃	
8	小型器台	8.4	9.2			11.3	〃	〃	〃	透孔4ヶ所
9	小型器台	8.4	9.7			13.6	〃	赤褐色	〃	透孔3ヶ所
10	高杯	14.0	—			—	砂多い	淡茶褐色	〃	透孔3ヶ所
11	高杯	—	—			—	〃	淡褐色	〃	透孔3ヶ所
12	ミニチュア壺	—	—	7.7	2.4		〃	褐色	〃	
13	直口壺	14.6	—	—	—		砂多いが精緻	黄白色	〃	
14	広口壺	21.4	—	—	—		1㎜大小石含む	淡赤褐色	〃	柳ヶ坪型
15	広口壺	15.4	26.9	25.0	6.0		砂・小石含む	乳白色	〃	赤彩壺
16	S字甕	13.4	—	—		—	〃	茶褐色	〃	
17	S字甕	14.2	25.2	24.8		9.4	〃	褐色	〃	
18	S字甕	—	—	—		7.4	砂多い	〃	やや軟質	

第Ⅰ表　SX01出土古式土師器法量表

外方へ拡大し、端部は肥厚する。また、体部との屈曲部には凹線が認められ、全体的に器壁も厚化しているところから、赤塚分類C類の新相に相当しよう。5は、全形を窺うことができ、体部最大径は中位にある。外面は羽状様の粗いハケ及び上半部に横ハケを施し、内面は板状具によるナデにより平滑に仕上げる。6は、体部下半を欠損するが、5と同様の形態を呈すると思われる。

高杯（3）　やや短かめの外反する脚部に、外傾しながら直線的にのびる浅い杯部を有するもので、内外面ともナデにより仕上げられる。

鉢（1・2）　1は、畿内系の小型鉢で、椀形の浅い体部に、2段に屈曲し外反する口縁部を有する。体部下半はヘラケズリを施す。2は、体部を欠損するが、大きく外方に広がる口縁部を持つ浅鉢である。内外面ともヘラミガキ調整される。



第6図　ＳＥ01出土遺物（１：４）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	体部径	底径	脚径	胎土	色調	焼成	備考
1	鉢	16.6	4.8				砂多いが精緻	黄白色	良好	畿内系
2	鉢	19.2	—				精緻	淡澄色	〃	
3	高杯	19.0	11.5			12.8	砂多い	淡黄褐色	〃	
4	S字甕	12.4	—	—		—	〃	黄白色	〃	
5	S字甕	13.3	22.8	20.2		9.3	〃	褐色	〃	
6	S字甕	18.4	(30.0)	27.4		10.6	〃	〃	〃	

第2表　SE01出土古式土師器法量表

Ⅳ　西北出遺跡溝Ｂ出土の古式土師器について

(1)西北出遺跡の概要(注8)

西北出遺跡は、岩倉市大地町西北出に所在する。昭和45年に浅野清春氏らによって調査がなされ、弥生土器・土師器等を出土する溝3条、土坑2基が検出された。とりわけ、幅80cm、深さ43cmの溝Ｂと称された遺構からは、古墳時代前半期に属する土師器が比較的まとまって出土し、一括資料に恵まれなかった尾張地方の古式土師器編年を考えるうえにおいて資料的価値の高いものとされてきた。

今回、岩倉城遺跡下層出土遺物整理の過程で、浅野清春氏、岩倉市教育委員会の御配慮により、未公表資料も含め、再実測する機会を得たので紹介していきたい。(注8)

(2)西北出遺跡溝Ｂ出土の古式土師器（第7図）

溝Ｂより出土した古式土師器の総数は、壺1、小型丸底土器1、甕7、高杯8の計17点である。

壺（2）　口縁部のみが残存する。口頸部のなかほどで若干屈折し有段状となるが、顕著な外反は示さない。内外面ともにヨコナデにより調整する。また、内面に部分的ではあるがススが付着している。

小型丸底土器（1）　扁平球の浅い体部に、大きく外方へ開く口縁部を持つ。頸部付近のくびれは弱く、口縁部と体部との境界に一条の凹線を施し画す。体部外面は、不整方向のヘラケズリ、口縁部内面は、ハケを施した後、ヨコナデ調整する。また、体部内面の調整は指オサエのみで完了しており、調整技法の省略が目立つ。

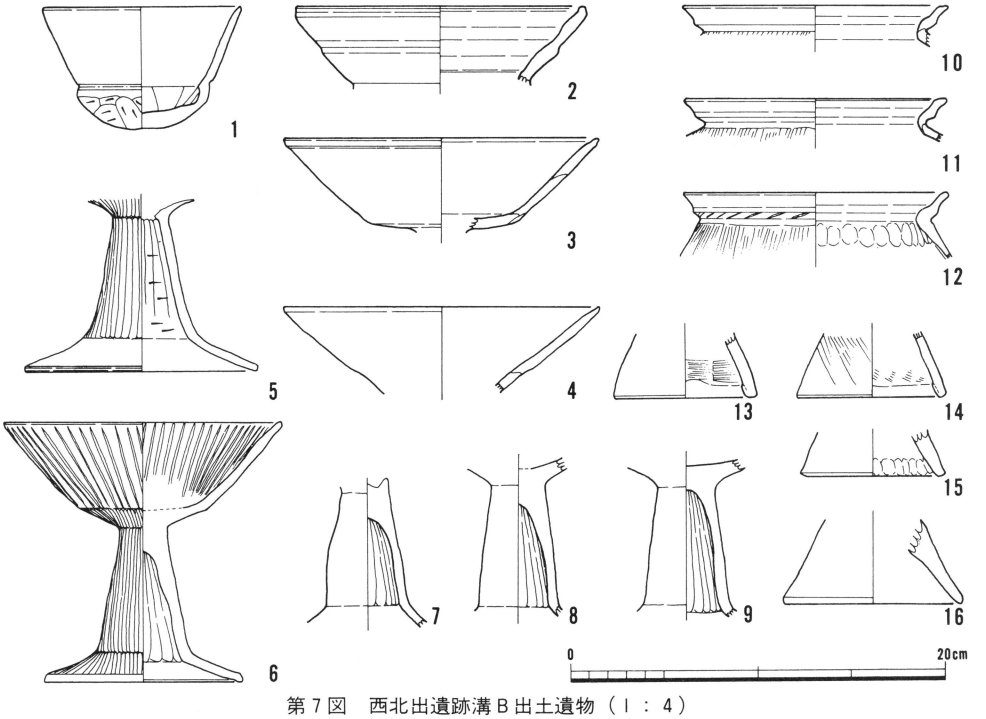
甕（10～16）　S字甕（10～14）と「く」の字状に外反する口縁部を有する台付甕（15・16）とに分類できるが、いずれも細片ばかりであり、全形の窺える資料は1点もない。10～12は、S字甕の口縁部片である。端部が肥厚する傾向が認められ、10・11は明瞭な平坦面を有する。13・14は、器壁の厚い台部片であり、端部を折り返すというS字甕の特徴を持つ。すべて、赤塚分類D類に相当する資料であろう。また、15・16は、台部端部の折り返しが認められず、所謂「く」の字甕と考えられるが、S字甕と同様に器壁は肥厚している。

高杯（3～9）　出土資料中最も多いのが高杯である。すべて、脚部が裾部付近で屈折し

てひろがる当地域に系譜のおけない所謂“畿内型高杯”で占められる。6のみ全形を窺うことができる。杯部は、口縁部が直線的に外方へ開き、脚部は、徐々に広がる中空の柱状部から鋭く屈折して裾部へつながる。杯部内外面は、暗文風のヘラミガキが、脚部外面には縦方向の面取り風ヘラミガキ（ヘラナデ）が施されている。他に、内外面ともヨコナデ調整された杯部片（3・4）、裾部が鋭く屈折して開く柱状脚部片（5・7～9）があり、5は脚部内面に回転ヘラケズリを施す。

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	体部径	底径	脚径	胎土	色調	焼成	備考
1	小型丸底土器	10.5	6.5				小石を含むが精緻	赤褐色	良好	
2	広口壺	15.3	—	—	—		精緻	褐色	〃	有段口縁壺
3	高杯	16.8	—			—	〃	淡赤褐色	〃	
4	高杯	16.8	—			—	砂含む	赤褐色	〃	
5	高杯	—	—			12.4	〃	淡赤褐色	〃	
6	高杯	14.7	13.9			10.6	精緻	赤褐色	〃	
7	高杯	—	—			—	小石含む	淡赤褐色	〃	
8	高杯	—	—			—	微砂含む	〃	〃	
9	高杯	—	—			—	砂含む	淡黄褐色	やや軟質	
10	S字甕	14.1	—	—		—	〃	淡赤褐色	良好	
11	S字甕	14.0	—	—		—	砂・小石含む	淡黄褐色	〃	
12	S字甕	14.2	—	—		—	小石含む	褐色	やや軟質	
13	S字甕	—	—	—		7.4	砂・小石含む	淡褐色	〃	
14	S字甕	—	—	—		8.0	砂含む	淡黄褐色	良好	
15	く字甕	—	—	—		7.0	砂・小石含む	淡赤褐色	やや軟質	
16	く字甕	—	—	—		9.4	〃	淡褐色	〃	
注8	高杯	16.4	—			—				注8文献より

第3表　西北出遺跡溝B出土古式土師器法量表



第7図　西北出遺跡溝B出土遺物（1：4）

Ⅴ　まとめ

以上、岩倉城遺跡下層より検出された遺構・遺物及び西北出遺跡溝Ｂ出土資料について概述してきたが、それらに若干の検討を加えてまとめにかえたい。

1　土器集積遺構ＳＸ01について

岩倉城遺跡下層より検出された土器集積遺構の特色をまとめると次のようになる。

①自然地形をそのまま利用し、改変を加えていない。

②窪地状の落ち込みに堆積した埋土の中に多量の炭化物を含む。

③土器は人為的に置かれた状況で出土した。

以上の３点が、その特色としてあげられ、なかでも②・③はヒトの意識的な行為が伴って初めて起こる現象であり、単なる土器廃棄とは違った遺構の性格付けが要求されよう。遺構検出地点周辺の環境・出土土器の様相等からその一端を探ってみたい。

遺構検出地点は、標高６ｍ前後の自然堤防と旧流路との変換点に立地しており、安定した日常生活を送るには非常に不向きな場所に遺構は占地していると言えよう。そして、西方に広がる自然堤防上には居住域が、旧流路の対岸の微高地上には墓域が展開している可能性が強く(注10)つまり、居住域と墓域とに挟まれた集落の縁辺部に形成された遺構と考えられる。

また、ＳＸ01より出土した土器を検討してみると、祭祀的色彩の強い土器とされる小型精製土器３種、ミニチュア壺、赤彩で飾る広口壺などが、出土土器全体の６割以上を占めるという高率を示し、遺構の性格をその出土状況と併せて考える時、極めて示唆的である。

河川に接し、不安定な集落縁辺部への立地、祭祀的色彩の強い土器の存在等、この遺構は、日常生活のなかで使用されたとは考え難く、一般生活から遊離した当時の「非日常的」部分を語る遺構と思われる。

2　岩倉城遺跡下層出土遺物の編年的位置付け

出土土師器の編年的位置付けを考えるにあたり、まず、ＳＸ01・ＳＥ01出土土師器の時間差の有無を確認しておきたい。

土器の組成をみると、ＳＸ01からは、壺・Ｓ字甕・椀状杯部を有する高杯・小型器台・小型丸底土器・小型鉢と各器種を網羅する土器が出土している。それに対し、ＳＥ01からは、Ｓ字甕・脚部が外反する高杯・小型鉢の３器種のみであり、欠落する部分も多い。そこで、ＳＸ01・ＳＥ01に共通する器種であるＳ字甕と小型鉢に注目してみると、Ｓ字甕に関しては、ＳＸ01・ＳＥ01共に赤塚分類Ｃ類の新相に相当し、器形等も大差はない。小型鉢についても、畿内系の口縁部が２段に屈曲するタイプと、口縁部が外方に大きく開く浅

鉢と称される２つのタイプが、それぞれの遺構より出土しているが、やはり形態等に差違は感じられない。よってＳＸ01・ＳＥ01出土資料は、ほぼ同時期の使用を示す一括資料として捉えることができよう。

以上の前提条件に立ってＳＸ01・ＳＥ01出土土師器の特徴をみると、次の諸点があげられよう。

①柳ヶ坪型壺が存在する。

②Ｓ字甕は、全体的に器壁の厚化が目立ち、Ｃ類でも新しい様相をを示す。

③ＳＥ01から、脚部がラッパ状に外反する高杯が出土している。

④小型精製土器３種が揃っている。

⑤小型器台の形状が多様化する。

これらの点より、ＳＸ01・ＳＥ01出土資料は、Ｓ字甕分類を基本とした赤塚次郎氏編年の元屋敷様式後半塔の越ＳＸ01段階に位置付けられうると考えられる。しかし、そのメルクマールとなる塔の越遺跡出土資料(注11)と比較した時、Ｓ字甕や高杯において、より新しい様相を本遺跡出土資料に見出すことができ、(注12)塔の越ＳＸ01段階でも新相に置くべき資料と言えよう。

また、今回の出土資料で、特に注目されるのは、尾張地方で初めて出土した畿内系小型鉢の存在であろう。浅い椀状の体部に、口縁部が鋭く２段に屈曲する独特の口縁部を有するもので、布留式土器を特徴づける器種とされてきた。(注13)今、本遺跡より出土した小型鉢を畿内寺沢薫氏編年に対比させるならば、布留Ⅰ式２式に併行すると考えられ、本資料により尾張と畿内との編年的対応がより明瞭となったと言えよう。

3　西北出遺跡溝Ｂ出土遺物の編年的位置付け

西北出遺跡溝Ｂ出土土師器は、従来、大参義一氏編年(注15)の石塚期の内容を充たす資料とされてきた。しかし、近年、土師器編年研究の進展に伴い、大参氏の編年案に対する疑問・矛盾が出され、西北出遺跡出土資料に関しても見通しが迫られることになってきた。そこで、最新の研究成果を参考にしながら、その編年的位置付けを再考してみたい。

土器の組成をみると、壺・甕・高杯・小型丸底土器などがあるが、量的にも少なく器種構成上欠落する部分も多い。しかし、それらの土器は、塔の越ＳＸ01段階に後続し、“様式移行期の様相を示す土器群”とされた(注16)ように興味深い情報を内包していると言えよう。その特色をまとめると次のようになる。

①扁平な体部と大きく開く口縁部を持った小型丸底土器が存在する。

②二重口縁壺は、退下した形状を示す。

③Ｓ字甕は、すべてＤ類に相当する。

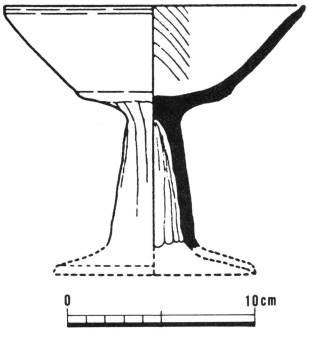
④高杯は、脚部が屈折して開く“畿内型高杯”に変化し、在来系のものは全くない。

②～④は、元屋敷様式にはみられないものであり新しい要素と考えられる。それに対し、①は形態的には古い特徴を残しているのであり、①の取り扱いが問題となろう。しかし、この小型丸底土器は、調整技法の省略が顕著に認められるのであり、元屋敷様式後半に位置付けられた岩倉城遺跡下層出土の小型丸底土器との間に、大きなギャップが存在する。よって、西北出遺跡溝Ｂ出土資料は、元屋敷様式のカテゴリーには含めず、加納俊介氏や赤塚次郎氏も指摘される(注17)ように、元屋敷様式の後続様式の初頭に位置付けるのが妥当と考えられる。また、尾張地域で西北出遺跡出土遺物に併行する資料をあげるならば、朝日遺跡63Ｂ区ＳＺ01上層出土の土師器類が該当すると思われる(注18)。

最後となりましたが、小論をまとめるにあたり、赤塚次郎氏には数々の有益な御教示と御指導を賜り、岩倉市教育委員会、浅野清春、加納俊介、金子健一、神谷友和、松原隆治の各氏・機関より御助言と御協力をいただいた。記して感謝いたします。

註

(1) 「廻間遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報－昭和60年度』 1986
(2) 塔の越遺跡発掘調査団他『塔の越遺跡発掘調査報告書（II）』 1988
(3) 名古屋市教育委員会『若葉通遺跡発掘調査の概要』 1989
(4) 第３図１は、欠山期特有の深い杯部に、外折れ矮小化した脚部を有する。小型高杯の祖型と考えられる資料である。
(5) 第５図９のみ検出時に取り上げたものである。その出土地点は、小型精製土器群が出土した範囲から、大きく逸脱するものではない。
(6) 赤塚次郎「Ｓ字甕覚書'85」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』 1986
以下、Ｓ字甕分類はこれに従う。
(7) 西北出遺跡の概要については、浅野清春・安達厚三「西北出遺跡出土の土師器」『いちのみや考古』No.18 1971を参考にした。
(8) 再実測を許可して下さった浅野清春氏、実測場所等の便宜をはかっていただいた岩倉市教育委員会に御礼申し上げます。また、出土遺物中１点のみ実測することができなかったので、注７文献よりその図を掲載しておく。
(9) 欠山期まで、時期は遡るが、自然堤防上にのる89Ａ・Ｂ区において竪穴住居を８棟、旧流路対岸の89Ｆ区で方形周溝墓を１基検出している。
(10) 赤塚次郎「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』 1989
(11) 注２に同じ
(12) Ｓ字甕は器壁の厚化が顕著となり、体部最大径も中位にまで下がる。また、ＳＸ01出土の椀状杯部を持つ高杯は、脚部での屈折が認められなくなり、ＳＥ01の脚部が外反する高杯は、短脚の傾向をみせる。
(13) 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻２号 1974
(14) 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委員会 1986
(15) 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』47（史学18） 1968
(16) 加納俊介・浅野清春・北村和宏「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』86号 1988
(17) 加納俊介「古墳時代の土器」『断夫山古墳とその時代』第６回東海埋蔵文化財研究会1989及び注10文献
(18) 「朝日遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター年報－昭和63年度』1989



戦国城下町岩倉の復元的考察

——調査の成果と地籍図の検討から——

金子 健一

Ⅰ はじめに

近年、城郭・城下町研究は、織豊期以降、近世を中心として進境著しいものがあり、各地で都市構造、地域構造の解明に大きく貢献している。その研究手法についても、発掘調査の成果はもとより、文献史料・地籍図・空中写真等、様々な方面からのアプローチが試みられ、そこから実に様々な事実が判明している。しかし、そうした中で戦国期、織豊系城郭成立前後の城郭、城下町については、近年増加の傾向にあるものの、以然、研究事例は少なく、その実態は明らかとは言い難い状況である(1)。尾張においては、信長期の清須城(2)や今回取り上げる岩倉城(3)がそれに該当するわけだが、両者とも最近ようやく解明の兆しが見えてきた段階である。そこで、一昨年度より進められてきた岩倉城の発掘調査も、本年度でその主要部を終えるため、その成果と地籍図の検討を中心に、城郭構造の復元を城下町の景観復元も含めて考えていきたい。

さて、ここで岩倉城の沿革について簡単に触れておきたい。築城の経緯については不明な点が多いが、文明８年（1476）頃、当時尾張の守護所であった下津が、織田氏の内紛によりその機能を失った後、文明11年（1479）頃、織田敏広により築城されたとする説(4)がある。その後、落城までの約80年間、守護代織田氏の居城である清須城とともに尾張を二分するもう一大勢力の拠点として繁栄することとなる。しかし、永禄２年（1559）織田信長

	幅 (m)	深さ(m)	滞水状況	遺物	備考
堀 A	10	3	有	陶磁器、土師器が少量	断面箱形
B	23	4以上	有	〃 〃	断面箱形
C	20	7	有	陶磁器類がごく微量	断面箱形
D	12	3.5	有	〃 が少量	断面箱形
E	8～9	2.5	無	〃 が少量	断面Ｖ字
F	8～9	2.5～3	無	〃 が少量	断面緩やかなＶ字
区画溝G	5～6	2.5	有	新しい溝：土師皿、木製品多量 古い溝：	一回掘り返しあり
H	3	1.7	無	新しい溝：土師皿、陶磁器多量 古い溝： 〃 木製品	一回掘り返しあり
I	3	1.0	有(西溝は無)	西溝： 〃 〃 少量 東溝： 〃 〃 多量	中央に土橋状施設あり

表１ 堀・区画溝の規模と概要

により滅ぼされる(5)と、その後再興することなく、近世は犬山街道沿いの在郷町として現在に至っている。以上、ごく簡単に紹介したが、ここで注目されるのは、岩倉城がその落城以後の経緯から城郭、城下町研究における編年上の一指標となり得るということである。つまり、落城の年代が永禄2年（1559）と明らかな上、取り壊された後、跡地が大規模に再利用されることなく現在に至っているため、発掘調査においても、地籍図の地割においても、永禄2年段階の戦国城下町の姿がかなり純粋な形で検出され得るのである。このように岩倉城は、戦国城下町の一つの下限を示す好資料であることを付け加えておきたい(6)。

II　調査の成果

まず、発掘調査による最大の成果は、6本の堀と3本の区画溝を確認したことにより、城の東西方向の規模、及び内部構造の一部が判明したことである。全体の規模は五条川を挟んで堀AからFまで366m、うち主体部のある西岸部が224m、新たに確認した東岸部が90mである。個々の堀や区画溝、及び曲輪の規模は別表に示した通りである。以下、個々の遺構、曲輪を概観していきたい。

最初に、堀A・Bについては、当初、幅45mの一本の堀と考えられていたが、あまりにも幅が広すぎること、AとBの間隔（曲輪1）が15mと広いこと、後でも述べるが東側の堀CとDに対応させる形で二重堀となることから別々の2本の堀と考えるに至った。一方、堀C・Dについては、従来この東側に関しては五条川を守りの要、つまり堀としての利用を想定し、西側の堀A・Bに相当する堀の存在は全く考えられてこなかった。これは地籍図上にその痕跡をほとんど止めないことからも疑う余地は全くなかったといってよい。しかし、今年度の調査において、五条川と平行する形で2本の堀が確認されたことにより、従来いわれてきた城郭構造のプラン(7)は大きく見直しを迫られることとなった。と同時に、五条川に対する評価もやはり見直しが必要となってきたのである。すなわち、川を自然の要害としてとらえるだけでなく、むしろ、一つの輸送経路、つまり、「道」としてとらえる発想が必要となってきたのである。というのは、現在では到底考えられないような小河川が、当時重要な水上交

曲　輪	距　離(m) (東西方向)	備　考
1　(A・B間)	15	無遺構、2より約2m低く水没の可能性あり
2　(B・G間)	33	溝、土坑を若干検出
3　(G・H間)	43	桶組井戸2基、土坑等検出
4　(H・G間)	36	ピット、土坑多数検出 焼土、炭化物の広がりを確認
5　(C・D間)	20	無遺構、土塁等の存在の可能性あり
6　(E・F間)	72	溝、ピット、土坑多数検出
主体部(A・D間 堀の幅含む)	224	
全　体(A・F間 堀・川の幅含む)	366	

表2　曲輪の規模と概要

通路として利用されていたことは決して珍しいことではなく、五条川もその例外ではないと考えられるからである(8)。つまり、川伝いに来襲する敵に対する防御、これが、五条川に沿う形で2本の堅固な堀を築かせた最大の理由と考えるのである。

では、これら4本の堀に挟まれた空間、曲輪1、5はどのように利用されていたのだろうか。ここで1つ考えられるのは、16世紀中頃以降出現するといわれる帯曲輪である。しかし、岩倉城の場合、調査区内で見る限り、両曲輪とも無遺構であること、曲輪1は曲輪2より2mも低く、堀の増水時には水没の可能性もあることなどを考えると、帯曲輪のような独立した空間というより、土塁等が存在する防御施設の一部と理解した方がより妥当であろう。また、後でも少し触れるが、岩倉城末期における城域の拡大、堀割掘削等の防御体制の強化に伴う副産物と考えることもできるであろう。このように、五条川西岸の主要部、いわば「本丸」は二重堀に囲まれた堅固な姿であったことが想定されるが、ではこの「本丸」の内部（曲輪2～4）はどのような構造だったのであろうか。

この「本丸」内に関しては、今年度までの調査により、3本の溝と若干の遺構の存在が明らかになっている。その中で、3本の溝が持つ意味は重要で、「本丸」内を3分割する形で南北に走る溝G・H、更に、この2本の溝をつなぐ形で東西方向に走る溝Iの存在は、そこにこれらの溝により区画された特別な空間、曲輪の存在を連想させるのである。この空間（曲輪3）の規模は、東西43m、南北方向は地籍図から推定すると約100mとなり、南北方向に細長い曲輪であったことが窺われる。また、溝G、Hからは陶磁器、土師器、木製品など種々雑多な遺物が大量に出土することもその特徴の一つで、堀



写真Ⅰ　堀下・区画溝Gと周辺の地籍
堀Fから下へ伸びる畑に注目
（……は推定ライン）

A～Dがその規模に比して少量しか遺物を含まないことと比べても、曲輪3の特殊性は容易に想像されよう。更に、溝Iは中央やや西寄りに土橋が確認され、北方の出入りを確保していたことが考えられる。しかし、この曲輪3については、発掘区が曲輪の北端部にあたることから、具体的な内部構造については不明な点が多く、井戸が2基検出された程度で、建物遺構の配置等の詳細な様相は判明していない。なお、溝G、Hには、一度掘り返しを受けた痕跡があることから、本丸内にも曲輪1、5の出現と時を同じくして拡張、防御の強化等改修の手が加えられた可能性は充分考えられるであろう。一方、曲輪3を取り囲む形の曲輪2・4については、調査面積が狭小なこともあり、詳細な内部構造は必ずしも明らかではない。ただ、曲輪4に関しては、曲輪3寄りの西半部にピット・土坑・溝等の遺構が密集している上、多種多様な遺物が豊富に出土していることから、何らかの城郭関連施設が存在したことは確実で、西側の曲輪2を含め今後の更なる検討が待たれるところである。なお、この曲輪4の西半部には、城の存続期間内のものと思われる整地が認められることから、少なくとも2つの生活面が存在することは確実であり、これも前述の改修の存在を裏付ける重要な事実といえよう。

最後に、五条川東岸の堀E、Fについてであるが、従来、五条川を城の東限として、それ以東には城域は広がっていないという考え方が支配的であり、地籍図上でもこの2本の堀の存在は確認されていなかった。そのため、全く予想外の遺構であったが、2本の堀とも出土遺物からみて、岩倉城に伴うものであることは確実であり、後述する地籍図の検討から、東岸にも堀により囲まれる軍事的な空間の存在が想定されることになった。そして、この空間、曲輪6についてもその位置的条件から、やはり堀C、Dと同様に「道」としての川を意識した結果の産物であることが考えられ、軍事的緊張の高揚に際し、城域拡大の一環として新設された可能性が高い。(9)

さて、以上、今年度までの調査から判明した事実に若干の考察を加えつつ概略を述べたが、調査地点の関係上、その大半は城郭主体部についての記述とならざるを得なかった。そこで次に、これらの成果を踏まえつつ、地籍図の検討をもとに、城郭構造はもちろんのこと城下町の景観についても論及していきたい。

III　地籍図の検討

今回、地籍図を検討するにあたり利用したのは、明治17年、同21年作成(10)のものである。作業は、21年のものをベースに、17年の地目を加味しながら、米軍撮影の空中写真を併用して行った。以下、字ごとに検討を加えていきたい。

まず、岩倉城の中心部にあたる「城跡」部分では、従来指摘されてきた箇所も含め、堀

Ａ～Ｄ、区画溝Ｇ、Ｈに相当する南北方向に伸びる水田、畑の分布を確認した。最初に堀Ａ・Ｂについては、該当する水田が一本の太いラインとなって現われている。しかし、これは前述の調査の所見から２本の堀が一体化したものと判断した。では、この堀Ａ・Ｂが調査地点からどのような形で伸びるのかについてであるが、まず北方は「城跡」の北西の字境をコーナーとして東へ曲り、五条川の少し手前「堤塘」と書かれた細長い高まりの部分[11]で終っていると考えられる。南方へは、堀Ａがそのまま「丸の内」方面へ伸びる可能性があるのに対し、堀Ｂは南の字境まで伸びた後、水路に沿う形で東へ折れ曲り、やはり「堤塘」と書かれた部分で終っていることが窺われる。このように堀Ａと堀Ｂが分岐する根拠としてあげられるのは、「丸の内」へ続く水田と南の字境を東進する水田が、調査地点前後の水田に比べ幅が狭くなっていること、にもかかわらず、両方向へ切れずに続いていることの２点である。次に堀Ｃについては、前述のように当初、地籍図の水田の分布からはその存在がはっきり確認できなかった。しかし、調査の後、再度地籍図を検討した結果、調査地点から南へ伸びる２本の細長い水田、及びそれに挟まれた畑地、北方については北西方向へ折れ曲る形の水田が相当するとの考えに至った。ただし、この堀Ｃも「堤塘」の手前で終わり堀Ａ・Ｂとは接続しないものと考えられる。また、堀Ｄについても調査後の再検討の結果、北方については調査区の十数ｍ先、旧五条川の手前で終わり、南方へは五条川沿いに細長く伸びる畑地部分が相当するとの考えに至った。そして、この堀Ｃ・Ｄは南の字境を走る水路部分でつながり、西へ折れてやはり「堤塘」部分で終っているものと判断した。

このように、堀Ａ～Ｄの囲繞状況を推定したわけだが、その他「城郭」内で二点、地籍図の検討からその存在を推定し得たものがある。１つは本丸部分の出入口（虎口）の位置で、これは、南側が正面[12]（大手）で北側が背面（搦手）にあたると判断した。なぜなら、西と東については、それぞれ後背湿地と五条川を控えており、円滑な通行が困難なことから、出入口の存在は考えにくいからである。では、具体的な位置と形態についてであるが、位置は前に述べた南北の「堤塘」の部分にあたるものと考えられる。というのは、堀Ａ～Ｄに相当する水田及び畑が全てこの「堤塘」の前で終っており、この部分のみ城の内外をつなぐ形で、土橋状に切れているからである。また、虎口の形態に関しては、地籍図の検討からでは明らかにし得ないが、城の存続期間から考えて比較的単純な構造のものであったと考えられる。類推できる今一つの点は、堀と川との接続の問題である。というのは、堀の中に帯水状況を示すものがあり（表１参照）、その供給源としてまず考えられるのが五条川だからである。しかし、これには以下のような問題点が指摘されることから、いずれの堀も五条川とは接続していないと考えるに至った。まず一つは、防災上の問題で、仮に



第Ⅰ図　岩倉城周辺地籍図（明治21年）（1：2500）

（堀・溝の位置は痕跡にあたる水田に合わせてあり、それぞれの間隔は実際とは異なる場合がある。）

接続しているとすれば、五条川の増水、氾濫時には城本体、城下町への水害の波及はまぬがれないということである。また、滞水状況を示す堀の埋土が、流水ではなく止水の状況を呈していることも非接続の傍証となっている。更に、清須城においても、前期、後期を通じて堀と川は接続していないことが調査で確認されており、同時期の城として、示唆に富んだ事実といえるであろう。

では、次にこのような主体部を核として、城下町が展開していたであろう周辺地域について検討を加えていきたい。

まず、「城跡」南側に隣接し、非常に関連深い字名を持つ「丸の内」部分では、前述のように「城跡」部分から堀Aがさらに南下する可能性及び、水田が帯状に巡るブロック状地割の存在を確認することができた。ただ、堀Aについては「城跡」から続いていることはわかるものの、その南端部がどこまで伸び、どのような形で終わるのか、中核部分である「城跡」、「丸の内」部分を囲い込んでしまう可能性があるのかないのかまでは判読不可能であった。

一方、ブロック状地割については、清須城下町において、これと類似した方形地割を溝を巡らせた寺院の痕跡と想定している。[13]しかし、この「丸の内」の場合、字名や「城跡」に隣接する位置から考えて、周囲に溝を巡らせた屋敷地の存在を考える方がより妥当であろう。[14]更に、この方形区画の分布を検討すると、小規模ながらも集住化の進行が認められると同時に、城郭主体部と同様の規格[15]が屋敷地にも及んでいることを確認することができる。具体的には、「丸の内」内を南北方向に並ぶ一町四方の二つの大区画[a]、[b]と、約半町四方の三つの小区画[c]～[e]に分け、大区画はその中を更に溝等で分割するといった構造が読み取れるのである。そして、それらの区画が「本丸」の南に隣接する形で、整然と配置されていた様子も窺い知ることができる。また、この大小の区画の方向性は、調査で確認した主体部の堀や区画溝の方向性（N－15°－W前後）と大概一致することも留意すべき点で、両者の構造が五条川の自然堤防の方向に規制されたものであることが想定されるのである。[16]更に、南方から城へ至る道（第2図参照）が「丸の内」に入る部分で不自然に屈曲していることも注目すべき点で、この部分まで堀Aが伸びているかどうかは別として、ここに城域内の中核部分の出入口（虎口）が存在した可能性が考えられるのである。

次に、「丸の内」同様、関連深い字名である「居屋敷」部分では、地割に何ら特徴が見られず、城下構造は推察し得なかった。しかし、字名や位置から考えて、地籍にはあらわれない町屋、市場等が道沿いに存在した可能性が高く、[17]城下の一部と考えて問題ないであろう。

「城跡」北方の「下市場」については、後世、犬山街道沿いに町屋が発展したため宅地

化が進行しており、地割は当時の状況を反映していないものと考えられる。ただ、ここも「居屋敷」同様、字名や位置から考えて城下に含まれていた可能性は非常に高く、やはり町屋、市場等の存在が考えられる。

「城跡」南西部の「下寺廻」については、元来、低湿な地形ということもあり、城下構造とは無関係に水田が密集しているようで、城下構造を示す地割の存在は確認できなかった。むしろ、この低湿地が岩倉城西辺の防衛ラインとして有効利用されていたことは確実で、当時も湿地及び水田が広がっていた状況が想定される。

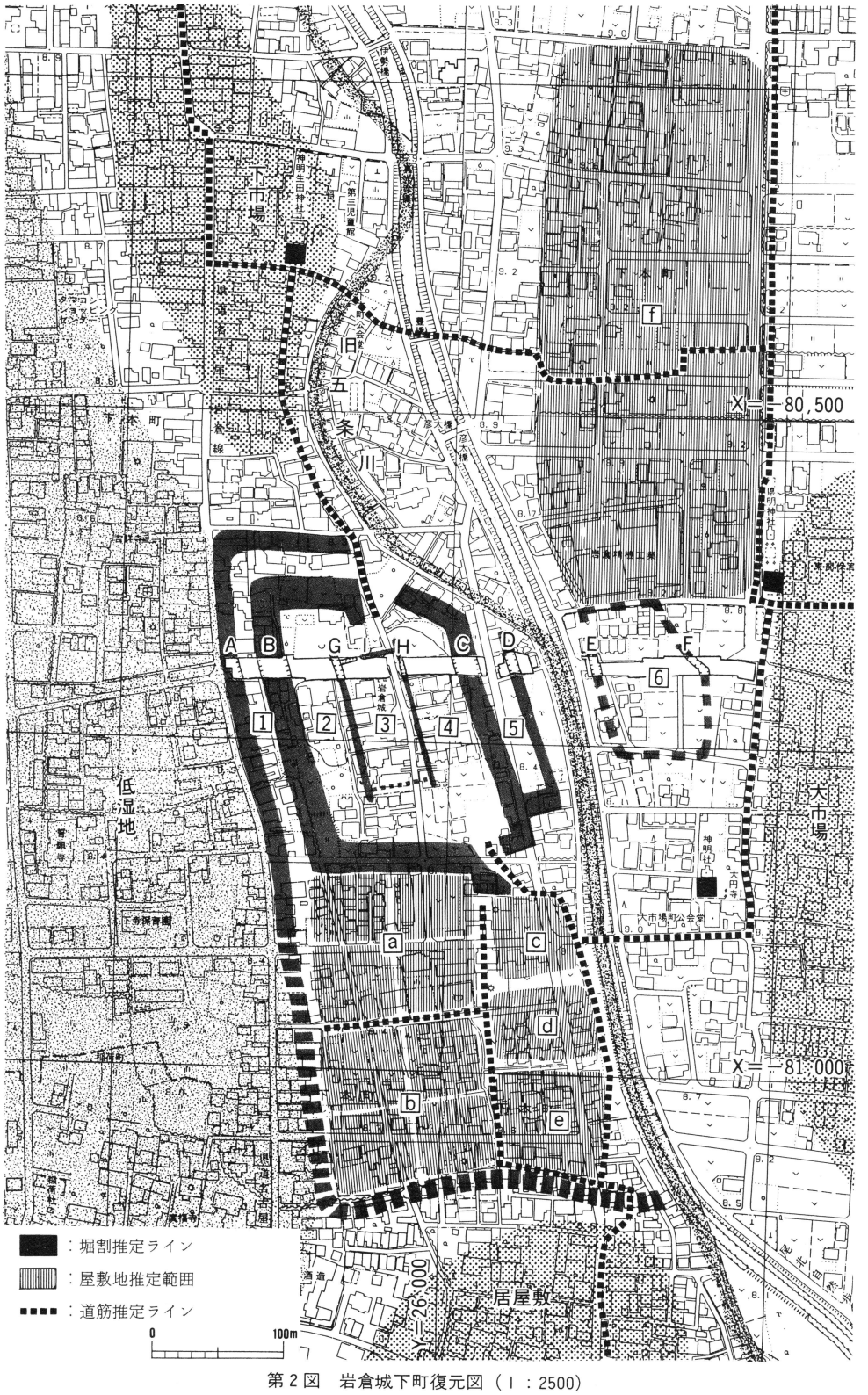
では、次に五条川東岸部について見ていきたい。まず、城の北東にあたる「真光寺」、「天神塚」部分については、「丸の内」同様ブロック状地割がかなり広範囲にわたり、連続して分布している。その推定範囲は、南北約400m、東西約170mで、曲輪⑥も含めた規模は城郭主体部と屋敷地ⓐ～ⓔを合わせた規模に匹敵するものである。しかし、ここでは「丸の内」部分のような一定の規格の存在が見い出せない上、城郭主体部に対する位置的条件は西岸の屋敷地に比べて劣るため、前者が従属性の強い上級家臣等の居住地域とすれば、こちらはそれ以外の、依然独自性を保つ中、下級家臣の居住地域に比定することができよう。また、「真光寺」という字名から寺院の存在も窺われ、屋敷地ⓕのブロック状地割の中に含まれている可能性も考えられる。

最後に「郷廻」部分についてであるが、ここは、調査により堀Ｅ・Ｆが確認され、曲輪の存在が想定される部分である。この曲輪⑥については、前述のように水田、畑の分布等明確な地割上の痕跡はとどめていない。それ故、その推定は堀Ｅ、Ｆから南北に伸びる畑とそれに並走する道及び、曲輪①～⑤の方向性と南北方向の規模に依拠せざるを得ず、あくまで想像の域を出ないものである。なお、この曲輪⑥以外、「郷廻」部分では特徴的な地割は確認できなかったが、位置的条件や「郷廻」の属する「大市場」という町名から、町屋、市場が散在していた状況が想定される。

その他、城下町の重要な構成要素である寺社や街道の様相については、資料が不足していることや検討が不充分なことから、必ずしも明らかになったとは言い難い。よって、ここでは概略を述べるにとどめたい。

まず、神社については第２図で示した三社のうち、神明生田神社が天文23（1554）年の紀年銘資料を持つことから、[18]当時既に存在していた可能性は充分考えられる。また、神明生田社と神明社が五条川の渡河点に近接していることや、県明神社を含めた三社全てが市場地名内に属していることから、渡河点とそれに近接する神社、そしてその周辺に展開する市場、町屋といった構造が看取できるのではないだろうか。

一方、寺院については、当時から存続しているといわれる６寺院（証法寺、龍潭寺、誓



第２図　岩倉城下町復元図（１：2500）

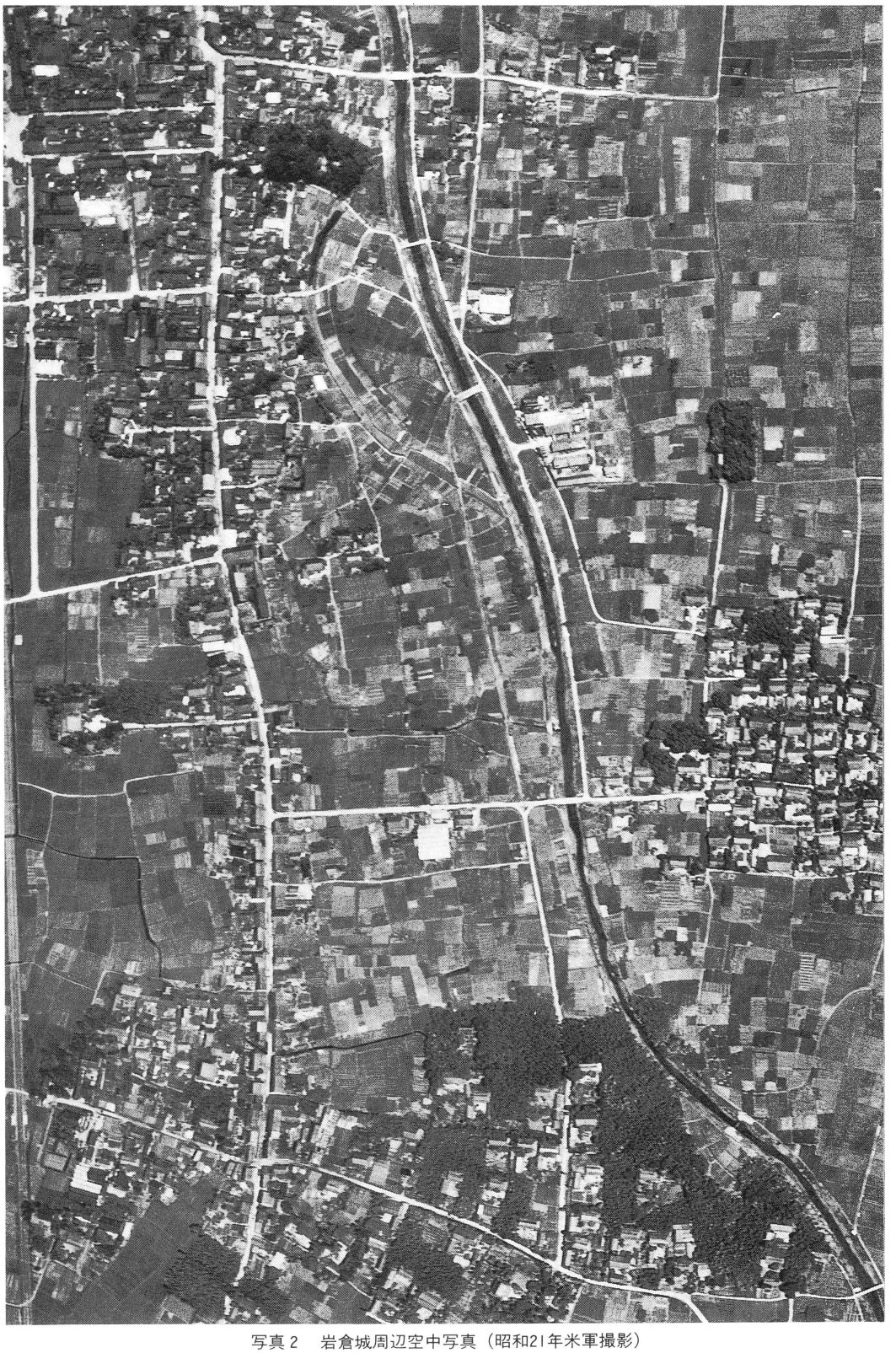


写真２　岩倉城周辺空中写真（昭和21年米軍撮影）
この写真は国土地理院発行の写真番号97－Ｅ－5－86を使用したものである

願寺、吉祥寺、松栄寺、浄正寺）の他、落城後、他地域に移転したという５寺院を含め11寺院の存在が伝えられている。[19]しかし、現存する６寺院の内、松栄寺、証法寺、龍潭寺の３寺院は、現在地が城下町のかなり北方（岩倉城の中心部から約１km）に位置することになり、散在域の範囲が確定できないとはいうものの、神社の所在地と比較しても中心部から離れすぎであることは否めない。また、第２図中に見える誓願寺と吉祥寺についても、現在地は城郭西方の低湿地の中にあたることから、往時の位置とは異なるものと考えられる。

最後に、街道については、当時の状況を伝えるものは全くなく、岩倉市内を通っていたといわれる中世鎌倉街道の伝承ルートが知られるのみである。[20]また、現在、堀Ａ沿いに南北に走る犬山街道は、落城以後、近世の所作である可能性が高く、当時、低湿地であったこの部分を主要街道が通っていたとは考えられない。[21]その他、城下町内の主要道路についても全く推定の域を出ないが、自然堤防の方向や地籍図上の渡河点、神社の位置から第２図の如く復元するに至った。その中で、南から城に至る道筋については、その北端にあたる中核部分の出入口（虎口）の構造が地籍図上にあらわれていることや、屋敷地東辺に沿うように北上していることから、比較的精度は高いと考えられる。しかし、北から城に至る道筋については、地籍図上からは全く窺い知ることができず、自然堤防の方向と神明生田神社の位置に依拠してルートを決めざるを得なかった。その他、五条川東岸部の道筋についても、渡河点及び神社間をつなぐ形で、地籍図上の主要道路をそのまま図示するにとどまった。

以上、寺社及び道筋について概観したが、あまりに不明な点が多く、今後、主要街道のルートをはじめ、市場、町屋、寺社など各々の構成要素の結び付きをより広い範囲の中で検討していく必要があると思われる。

Ⅳ　岩倉城下町の復元　－まとめにかえて－

さて、ここまで、発掘調査と地籍図の検討から判明した事実に、若干の考察を加えながら城郭・城下町を構成する諸要素の分析を試みた。しかし、遺構ごと、字ごとに細分化された状態では城下町の全体像を捉えるのは難しい。そこで最後に、これらの事実を総合してどのような城郭、城下町を再構築できるのか、それを中核部分と周辺部分に分けて考えてみたい。

まず、どれだけの範囲を中核部分とみなすかであるが、字名の「城跡」、「丸の内」の部分と考えてほぼ間違いないであろう。この南北500m、東西250mの周囲から隔絶された空間には、領主と近親及び上級家臣、直属商工業者が定着、集住し、最小単位の城下町を構

成していたのである。[22]その可視的な構造は、中核部分全体を取り囲む「外堀」の中に、守護所的色彩を残しながら戦国城郭としてさらに強固な構えとなった「本丸」部分、小規模ながらも、領主権力の浸透を示唆する“都市計画”に基づいた屋敷地群の両者が、南北に整然と配置されたものであった。

一方、町屋や市場が散在する周辺部分については、その範囲も構造も明らかとはいい難い。しかし、その骨格は、城北東の屋敷地群及び、市場地名部分に想定される町屋、市場の両者により形成され、前者には以然独自性を保つ中、下級家臣団が、後者には未だ権力に掌握されきらない民衆が散在し、共に“大きな城下町”の担い手となっていたのである。

そして、この二つの“城下町”が有機的に結合した姿こそ、戦国期、尾張北部の一大拠点であった岩倉城下町の実像であり、同時に尾張における戦国城下町の典型というべきものであろう。

以上、戦国城下町岩倉について、その景観復元を柱として論考を進めてきたが、筆者の力量不足もあり論じ残した部分はあまりに多い。今後、周辺地域のみならず、より広い範囲の中での類例との比較、検討が必要であり、そうすることによってはじめて、当地方における戦国城下町の様相、ひいては地域構造全体が一層明らかになってくるであろう。

この稿を成すにあたり、愛知県教育委員会遠藤才文氏、名古屋市見晴台考古資料館千田嘉博氏をはじめ、多くの方々から数々の有益な御教示を賜った。また、地籍図の閲覧に際し、岩倉市社会教育課の諸氏には度々御配慮頂いた。末筆ながら記して厚く感謝する次第です。

註

(1)戦国城下町の代表的な研究としては、小林健太郎『戦国城下町の研究』(大明堂　1985)、小島道裕「戦国城下町の構造」(『日本史研究』257　1984) 等をあげることができる。

(2)信長期の清須城については、中部よし子「織田信長の城下町経営」(『ヒストリア』82　1979)　前掲註(1)小島論文　梅本博志「信長期における清須城下町の様相」(東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編　1989) 等で論及されている。

(3)岩倉城については、小林健太郎氏が「大名領国成立期における中心集落の形成－尾張平野の事例研究による検討－」(『史林』48－1　1965、前掲註(1)小林論著の中に再録) の中で、城下町について若干触れている他、『岩倉市史』上巻 (1985) でも、築城から落城までの経緯及び城郭、城下町の構造について論及している。しかし、落城の経緯等からくる城自体の認識の浅さや文献史料の絶対量の不足が災いし、研究は停滞したままであった。

(4)この説は、「張州府志」や「尾張志」の記述によるものであり、前掲『岩倉市史』や『日本城郭大系』9 (新人物往来社、1979) ではこの敏広築城説をとっている。

(5)『信長公記』首巻「岩倉落城の事」

(6)このような事例研究については、小島道裕氏が「戦国・織豊期の城下町－都市の建設と移転－」(東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編　1989) の中で指摘された「廃城下町」研究の有効性と共通するものがあると思われる。また、このような研究上の利点は、城郭、城下町研究の分野だけでなく陶磁器類など当該期の遺物の編年研究にも大きな意味を持つものである。

(7)前掲『岩倉市史』上巻　P42の岩倉城想定図はその代表的なものである。

⑻五条川については『信長公記』首巻「二宮山御こしあるべきの事」の中に、「小真木山へは、ふもとまで川つゞきにて、資財、雑具取り候に自由の地にて候なり」とある様に、重要な水上交通路として利用されていたことが窺われる。

⑼城域の拡大等を必要とする軍事的な緊張が具体的に何にあたるのかについては、ここでは明らかにし得ないが、岩倉城末期が1550年前後の時期にあたることから清須の信長や駿河の今川氏の動向と無関係ではあり得ないだろう。なお、城域の拡大、防御の強化等、改修の存在を指摘する根拠としては、築城年代から想定される当初の姿がこのように大規模なものであったとは考えられず、むしろ旧来の守護所の形態を踏襲したものであった可能性が高いことがあげられる。このことは、地籍図上で「本丸」部分に守護所同様、一町単位の方形プランの存在が確認できることからも想定でき、前述した曲輪[1]、[5]の出現や区画溝G、Hの掘り返しとともに、改修の存在を裏付ける重要な事実といえよう。

⑽明治17年の地籍図は愛知県公文書館蔵のものを、同21年の地籍図は岩倉市公民館（社会教育課）蔵のものを使用した。

⑾「堤塘」とは堤防のことで、後世、岩倉城の土橋を再利用する形で築かれたものと思われる。北の「堤塘」については、現在も神社の境内にその痕跡をとどめている。

⑿『信長公記』首巻「浮野合戦の事」の中に「(前略) 此表、節所たるに依て三里上岩倉の後へまいり、足場の能方より浮野と云所に御人数備へられ (後略)」とあり、「岩倉の後」である浮野は城の北西にあたることから南を正面と考えた。このことは前掲『岩倉市史』においても指摘されている。

⒀方形地割部分を調査した際、溝の中から位牌、板塔婆、柿経等信仰関係の遺物が出土したことによる。前掲註⑵梅本論文参照

⒁このことについては、すでに小林健太郎氏が前掲註⑶論文で指摘されている。

⒂前掲註⑼参照。地籍図からは一町半四方の方形プランが想定されるが、堀割削割等改修の影響で築城当初の姿は必ずしも明らかではない。

⒃信長期の清須城においても、五条川東岸で一定の方向性（N－10°－E）と「町」単位の規格を持った周囲に溝を巡らす屋敷群の存在が確認されている。それらは、地籍図上では「丸の内」同様ブロック状地割を示しており、その中でも屋敷群南半に展開する「武家屋敷」地区の規格が約半町四方であることは、同時期の城として大変興味深い。

⒄この時期の町屋や市場は、まだ集住化も進んでおらず、地籍図上に明確な痕跡を残すほど発達したものとは考えられない。岩倉城下町の場合も他の戦国城下町と同様、道沿いの一本街村ないしは十字街村を呈するものと考えられる。

⒅前掲『岩倉市史』下巻　P170　生田神社所蔵の棟札に記されている。

⒆前掲『岩倉市史』上巻　P415

⒇前掲『岩倉市史』上巻　P342　この伝承ルートは岩倉市内を南下した後、第２図中の誓願寺の南方で東へ折れ、「丸の内」部分を横断し、図中の渡河点を通過するというものだが、低湿地や堀、屋敷地の存在を考えると、岩倉城の存続期間にはあり得ないルートである。しかし、当時の街道が自然堤防上を通っていたことは確実で、やはり近在にルートを求めるべきであろう。

(21)前掲註⑶小林論文及び、浅野弘一「尾張における中世城館の研究」（愛知教育大学歴史学会『歴史研究』35　1989）の中で両氏は、「犬山街道にそって短冊型土地区画を有する町並が形成されている」（小林論文）と述べておられるが、犬山街道自体には検討を加えておられず、やや疑問が残る。また、「短冊型土地区画」についても、註⑰で述べた理由により、近世以降の所作と思われる。

(22)前掲註⑶小林論文の中で、同様の構造のものとして、越前浅倉氏の城下一乗谷をあげておられる。

濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成

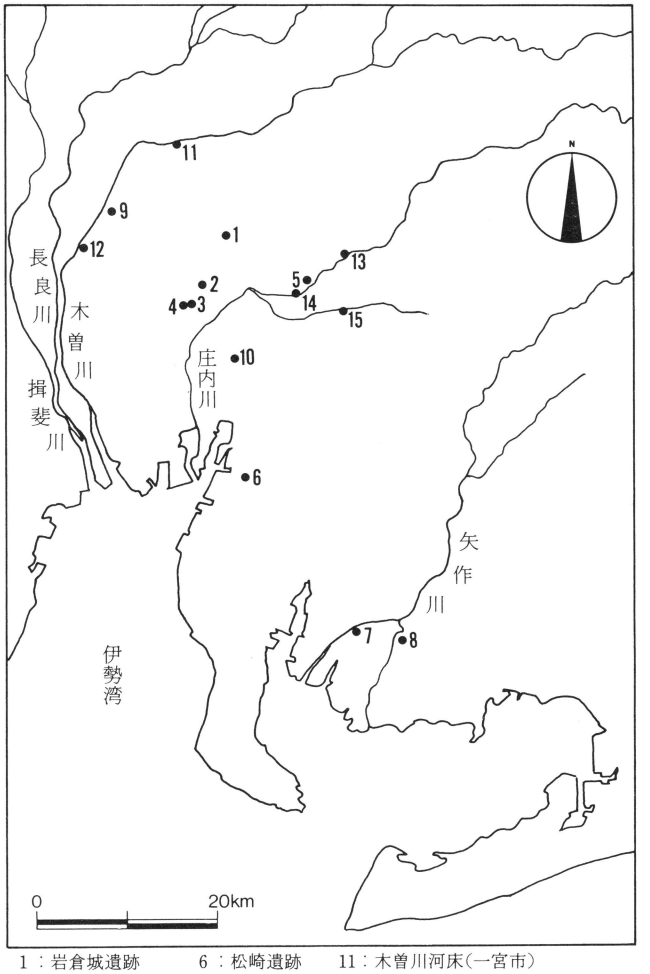
森　勇一・伊藤　隆彦・楯　真美子・永草　康次

Ⅰ　はじめに

濃尾平野などの低地の遺跡では、遺跡包含層下位の遺跡基盤層中に厚い砂層が分布していることが多い。これまで、これらの砂層の堆積環境や供給源などについては、ほとんど調査されたことがなかった。また、このような砂層が広く分布する地域では、近年、歴史地震に伴う噴砂の痕跡が多数発見されるようになり、噴砂の断面観察より液状化した砂と液状化しなかった砂の粒度については、野外においても差異が認められることが指摘された（森・鈴木：1989）。

本研究では、濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度分析を実施することによって、遺跡の立地や地形発達、並びに地震時における地盤液状化のメカニズムについての手がかりを得ることを目的として、分析を行った。

さらに、土器胎土の鉱物組成についての基礎資料を蓄積することを目標に、木曽川水系6地点26試料、庄内川水系3地点3試料、矢作川水系2地点7試料、その他3地点3試料の計39試料について、偏光顕微鏡下で砂層中の鉱物を識別し、分析した。その結果明らかになったことがらについて、ここにその概要を報告する。



1：岩倉城遺跡　6：松崎遺跡　11：木曽川河床（一宮市）
2：朝日遺跡　7：清水遺跡　12：祖父江砂丘（祖父江町）
3：清洲城下町遺跡　8：岡島遺跡　13：庄内川河床（春日井市志段味橋）
4：土田遺跡　9：大平遺跡　14：庄内川河床（同松川橋）
5：松河戸遺跡　10：正木町遺跡　15：矢田川河床（尾張旭市瑞鳳橋）

第Ⅰ図　粒度分析および鉱物分析試料採取地点

II　分析方法

1．粒度分析

第1図に示した8遺跡12地点（比較試料を含む）から採取した合計56試料について分析した。まず、乾燥させた試料を二分法または四分法によって約100～150g取り出し、2mm、1mm、1/2mm、1/4mm、1/8mm、1/16mmの6種類の篩を用いて、約20分間震とうさせ篩別した。次に各篩に残った試料の重量を測定し、片対数方眼紙上に重量百分率の累積頻度曲線を画いた。この曲線をもとに重量百分率が16%、50%、84%に相当する粒径を読み取り、ϕ（ファイ）スケール法によりϕスケールを求めた。ϕスケールの定義は、$d = 2^{-\phi}$（ただしdは粒径mm）で表され、一般式では$\phi = -\log_2 d$で求められる。このようにして求めた各値から、Friedman（1961）により以下の粒度分布係数を算出した。

中央粒径　$Md\phi = \phi_{50}$　（ただしϕ_{50}は50%の粒径のϕ値、以下同様）

平均粒径　$M\phi = (\phi_{16} + \phi_{84}) / 2$

淘汰度　$\sigma\phi = (\phi_{84} - \phi_{16}) / 2$

歪　度　$\alpha\phi = (M\phi - Md\phi) / \sigma\phi$

中央粒径は粒度分布の中央値を、平均粒径は粒度の平均値を表す。淘汰度は粒度分布の分散の程度を表し、値が小さいほど分散が小さく淘汰はよい。また歪度は粒度分布の偏りを表し、正は細粒、負は粗粒に偏っていることを示している。

2．鉱物組成

試料は粒度分析で篩別が終了したものを用いた。まず粒径1/4～1/16mmの砂粒について二分法で適量取り出し、エポキシ系樹脂（ペトロポキシ154：屈折率1.54）を用いてプレパラートを作成し、偏光顕微鏡下で1試料につき200個以上の砂粒を観察した。次にこの観察に加えて、一部の試料は土器胎土の表面観察で対象となる粒径1/4mm以上の砂粒を、実体顕微鏡下で岩片が100個を超えるまで観察した。ここでは岩片を「花崗岩」・「チャート」・「その他の岩片」の3種類に分類した。

III　分析結果および考察

1．粒度分析

各試料の粒度分布係数を第1表に示した。Friedman（1961）をもとにまず領域図A（第2図）により河床砂を識別し、図Aにおいて海浜域に属するものは、さらに領域図B（第3図）によって砂丘砂を識別し堆積環境を推定した。ただし、領域図中の境界線はある程度の幅を持ったものと考えた。また、噴砂試料については横軸に淘汰度、縦軸に平均粒径をとり分布を調べた（第4図）。

これらの分析結果をもとにおもな遺跡について考察する。

⑴清水遺跡89Aa区（試料番号ＳＫ－1～６）

平安時代の製塩土器を含む粗粒砂層の下位より２試料（ＳＫ－１、２）上位より４試料（ＳＫ－３～６）を採取した。標高は約０ｍ～＋1.5ｍである。ＳＫ－４を除く５試料は最大粒径が２㎜を超え、中粒砂と粗粒砂の混じった淘汰の悪い砂層である。図Ｂでは海浜域に位置していること、および粒度が粗く歪度が負に偏っていることから、波によって細粒物質が洗い流された海浜砂であると考えられる。しかし、ＳＫ－４については比較的淘汰のよい中粒砂で構成されており、図Ｂでは他の試料よりも砂丘域近くに位置している。

⑵松崎遺跡63区（ＴＭ－１）

古墳時代の製塩土器を多量に含む包含層下位の標高約２ｍの砂層から１試料を採取した。最大粒径は２㎜を超えない淘汰のよい細粒～中粒砂層である。図Ｂでは、歪度が正で砂丘域に位置することから砂丘の堆積物であると考えられる。また、砂に含まれる輝石などの重鉱物がかなり円摩されていることから、長時間にわたって風の影響を受けた砂丘砂であると考えられる。

⑶岩倉城遺跡89Ｃ区（ＩＪ－１～６）

五条川右岸の調査区において、16世紀の遺物包含層下位の砂層から２試料（ＩＪ－３、４）、さらに下位の砂層から４試料（ＩＪ－１、２、５、６）を採取した。標高は6.5ｍ～8.0ｍである。６試料とも最大粒径１㎜以下の淘汰の悪い細粒砂である。図Ｂでは河床域に位置することから五条川によってもたらされた河成堆積物であると推定される。ただし、Ｊ－１は地震による流動化の可能性が考えられ、他の試料よりも粒径がやや粗い。推定される地震は1586（天正13）年の天正地震、または1891(明治24)年の濃尾地震が考えられる。

⑷土田遺跡89Ｂ区（ＫＴ－１）

標高－0.5ｍ付近の砂層より１試料を採取した。淘汰はよく歪度は正で、図Ｂでは海浜と砂丘の境界付近に位置する。また、試料採取地点の下位（標高－1.5ｍ付近）には海生珪藻を多産する腐植質シルトが存在している（未公表資料）。このことから本試料は海浜近くに形成された砂丘（浜堤）の堆積物であると推定される。

⑸清洲城下町遺跡63Ｄ区（Ｈ－１～14）

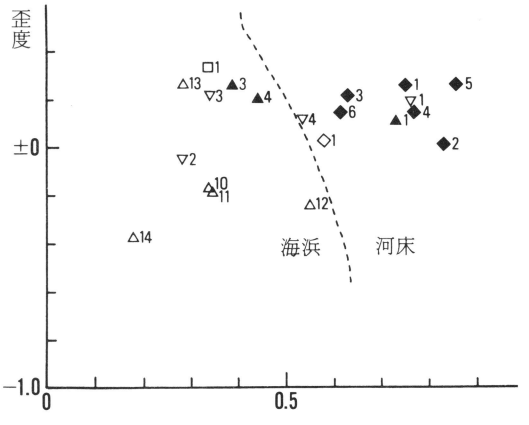
Ｈ－１、２、４～９の８試料は、16世紀末の遺物包含層の基盤層にみられた計９箇所の噴砂より採取した。噴砂試料は平均粒径1.0～2.0ϕの中粒砂域に集中し、淘汰度は0.2～0.6で多少ばらつきがみられた。Ｈ－３は噴砂を供給した砂層より採取した試料で、噴砂試料とは異なった粒度組成を示した。

噴砂以外の試料（Ｈ－10～14）は標高－1.0ｍ～０ｍの砂層より採取した。図Ａでは海浜

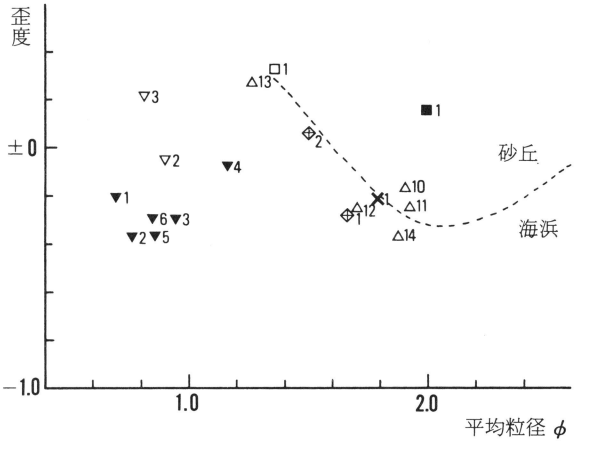
域に位置し、図Bでは5点とも海浜と砂丘の境界付近に分布した。土田遺跡の結果と合わせて考えると、土田遺跡から当遺跡に向かって北西－南東方向に延びる浜堤の堆積物である可能性が高く、これまで言われていた五条川の自然堤防を構成する砂層ではないと考えられる。

⑹清洲城下町遺跡63C区（S－1～15）

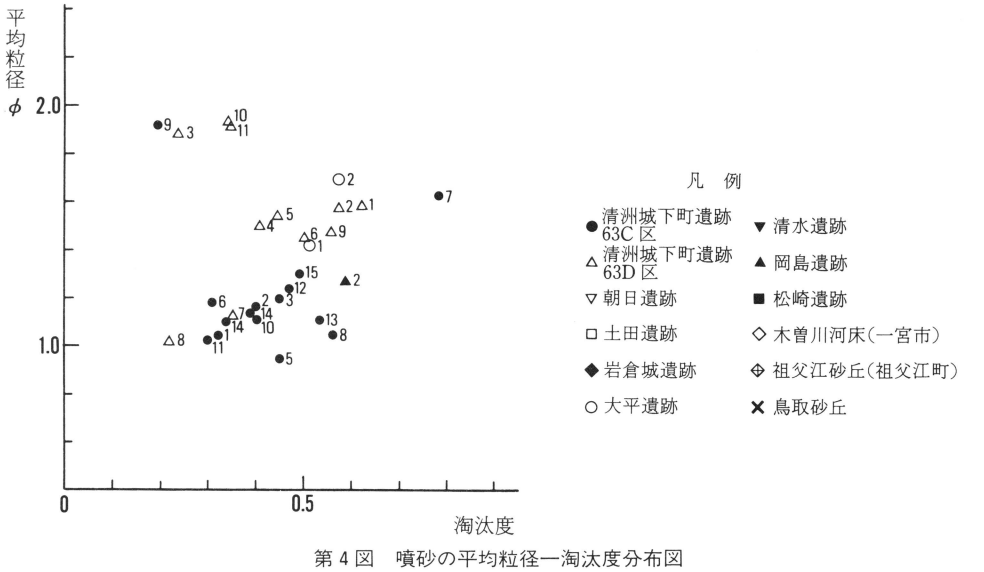
試料は16世紀中頃の遺物包含層の下位、標高約2.0m～2.5mの砂層および包含層を貫く噴砂より採取した。噴砂の時期には天正地震と濃尾地震の二時期のものがある（森・鈴木：1989）。主な噴砂のスケッチと採取位置および累積頻度曲線を第5図に示した。噴砂試料（S－1、2、5、8、10～15）は、Fork & Ward (1957) による淘汰度では「良い（well sorted）



第2図　歪度―淘汰度分布図
（領域図A）



第3図　歪度―平均粒径分布図（領域図B）
（図中の破線はFriedman：1961の境界）



第4図　噴砂の平均粒径―淘汰度分布図

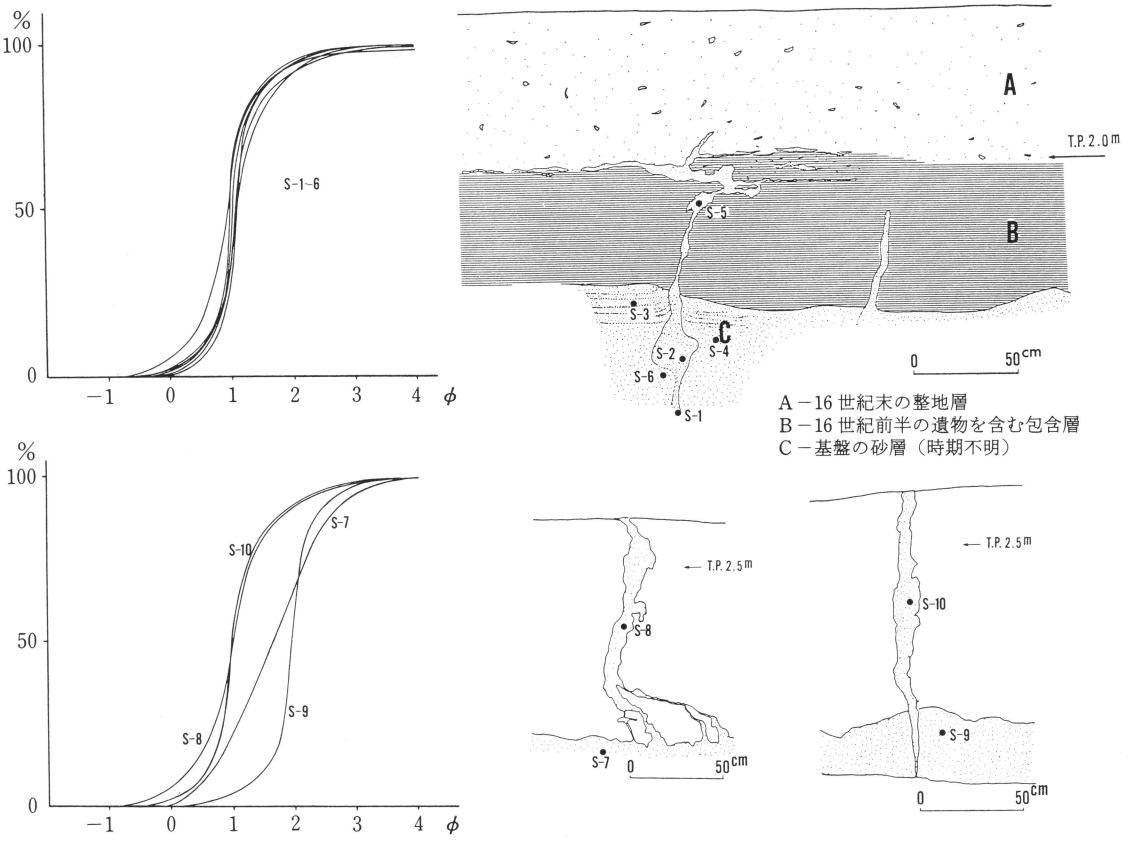
に分類され、平均粒径は0.9～1.3φに集中する。また二地震による粒度の明瞭な差異は認められなかった。一方、基盤層の試料（Ｓ－３、４、６、７、９）では、淘汰度、粒径ともにばらつきがみられ、特にＳ－７の試料では淘汰が悪く、河成堆積物であるとみなすことができる。

⑺朝日遺跡63Ａ区・89Ｂ区（ＡＳ－１～４）

89Ｂ区の弥生時代中期の溝の基盤（標高約1.0m）より１試料（ＡＳ－１）、63Ａ区の旧河道のトレンチより３試料（ＡＳ－２～４）を採取した。ＡＳ－１は淘汰の悪い中粒～粗粒砂層で図Ａでは河床域に位置する。トレンチ最下層のＡＳ－２（標高約－1.0m）とその上位のＡＳ－３（標高約－0.5m）は、図Ａ・Ｂとも海浜域に位置することから海浜砂の可能性が考えられる。さらに上位のＡＳ－４（標高約０m）は、淘汰の悪い粗粒砂で図Ａでは河床域に属する。

⑻岡島遺跡89Aa区（ＮＯ－１～４）

弥生時代中期の遺物包含層の基盤の砂層から４試料を採取した。本調査区では、三河地



第５図　噴砂試料の累積頻度曲線（左）と試料採取位置

第Ⅰ表　粒度分析結果

遺跡名・試料番号		中央粒径 φ	平均粒径 φ	淘汰度	歪度
清洲城下町遺跡63D区	H-1	1.56	1.59	0.62	0.06
	H-2	1.56	1.57	0.57	0.03
	H-3	1.98	1.88	0.23	−0.39
	H-4	1.47	1.49	0.41	0.05
	H-5	1.47	1.53	0.44	0.13
	H-6	1.43	1.43	0.49	−0.01
	H-7	1.09	1.21	0.35	0.35
	H-8	1.00	1.06	0.22	0.27
	H-9	1.47	1.47	0.56	0.00
	H-10	1.95	1.90	0.34	−0.17
	H-11	2.00	1.91	0.35	−0.25
	H-12	1.84	1.70	0.55	−0.25
	H-13	1.18	1.26	0.29	0.27
	H-14	1.94	1.87	0.18	−0.37
清洲城下町遺跡63C区	S-1	1.00	1.04	0.32	0.11
	S-2	1.09	1.16	0.40	0.17
	S-3	1.09	1.19	0.45	0.22
	S-4	1.03	1.10	0.34	0.20
	S-5	0.94	0.95	0.45	0.00
	S-6	1.12	1.17	0.31	0.16
	S-7	1.64	1.62	0.78	−0.04
	S-8	1.00	1.04	0.56	0.07
	S-9	1.94	1.93	0.29	−0.04
	S-10	1.00	1.11	0.40	0.28
	S-11	0.97	1.02	0.30	0.15
	S-12	1.12	1.23	0.46	0.23
	S-13	0.94	1.11	0.53	0.31
	S-14	1.00	1.13	0.39	0.32
	S-15	1.15	1.30	0.49	0.30
朝日遺跡	AS-1	1.09	1.24	0.76	0.19
	AS-2	0.92	0.90	0.28	−0.05
	AS-3	0.74	0.81	0.34	0.22
	AS-4	0.81	0.87	0.53	0.11
岩倉城遺跡	IJ-1	2.00	2.19	0.75	0.25
	IJ-2	2.60	2.67	0.83	0.09
	IJ-3	2.18	2.32	0.63	0.21
	IJ-4	2.84	2.95	0.77	0.15
	IJ-5	2.64	2.86	0.86	0.25
	IJ-6	2.79	2.87	0.62	0.14
土田遺跡	KT-1	1.25	1.36	0.33	0.33
清水遺跡	SK-1	0.84	0.64	0.84	−0.24
	SK-2	0.97	0.67	0.73	−0.42
	SK-3	1.12	0.88	0.81	−0.30
	SK-4	1.18	1.16	0.49	−0.06
	SK-5	1.06	0.76	0.80	−0.38
	SK-6	1.03	0.74	0.95	−0.31
松崎遺跡	TM-1	1.97	2.01	0.27	0.15
岡島遺跡	NO-1	2.25	2.33	0.73	0.11
	NO-2	1.22	1.28	0.59	0.10
	NO-3	2.03	2.13	0.39	0.25
	NO-4	2.47	2.56	0.44	0.20
大平遺跡	OH-1	1.36	1.43	0.51	0.14
	OH-2	1.60	1.69	0.57	0.15
木曽川河床	KR-1	1.36	1.36	0.58	0.01
祖父江砂丘	SD-1	1.74	1.65	0.29	−0.29
	SD-2	1.47	1.50	0.44	0.06
鳥取砂丘	TS-1	1.89	1.79	0.46	−0.22

震（1945年）によると思われる地盤の起伏が広範囲にわたって認められ、採取した試料も地震の影響を受けていると考えられる。ＮＯ－１はラミナが観察され、図Ａでは河床域に位置することから河成堆積物である。ＮＯ－２は噴砂の試料であり、平均粒径1.28φ、淘汰度0.59で清洲城下町遺跡の噴砂の試料と似た粒度組成を示した。ＮＯ－３、４は図Ａでは海浜域に位置するが、歪度が正であることなどから海浜砂とは考えにくく、地震による流動化の影響であると推定される。

⑼大平遺跡*（ＯＨ－１～２）

弥生時代および中世の遺物包含層を貫く、濃尾地震に伴う噴砂より２試料を採取した。平均粒径は1.4～1.8φの中粒砂、淘汰度は0.5～0.6で、第４図では他の遺跡の噴砂の試料と似た分布を示した。

２．鉱物組成

各試料の1/4～1/16㎜の砂粒組成を第２表および第６図に、1/4㎜以上の岩片の組成を第３表に示した。なお、試料番号は粒度分析試料と同じものを用いた。以下におもな地域・遺跡ごとの特徴について述べる。

⑴木曽川水系（岩倉城遺跡・朝日遺跡・清洲城下町遺跡・大平遺跡）

岩倉城遺跡の試料では、石英16.5％（平均、以下同様）、長石34.2％、有色鉱物6.4％、岩片25.0％の組成を示した。朝日遺跡の試料では、石英23.1％、長石26.6％、有色鉱物4.4％、岩片31.2％、清洲城下町遺跡の試料では、石英12.6％、長石26.1％、有色鉱物6.6％、岩片29.7％であった。これらの試料では、無色鉱物と岩片が70％以上を占め、1/4㎜以上の砂粒組成でも遺跡ごとの明瞭な差異は認められなかった。なお、これら三遺跡はいずれも木曽川支流の五条川水系に属する遺跡である。

一方、大平遺跡の試料では、石英11.7％、長石29.9％、有色鉱物6.3％、岩片28.4％であった。また比較試料として採取した木曽川河床（一宮市光明寺）の試料では、石英14.5％、長石22.0％、有色鉱物6.1％、岩片37.4％で大平遺跡とよく似た組成を示した。

以上のことから、これらの地域は、五条川流域を含め木曽川水系の影響を強く受けた鉱物組成を示す地域であると考えられる。また、土器の重鉱物分析において尾張西部地域の土器胎土には一般に輝石類（斜方輝石・単斜輝石）が多く含まれるとされているが、今回の分析では、輝石類はほとんどの試料で２～３％含まれている程度にとどまった。

⑵庄内川水系（松河戸遺跡）

石英25％、長石44％、有色鉱物5.3％、岩片14％が含まれる。木曽川水系の試料に比べ石英、長石が多く岩片が少ないこと、有色鉱物に輝石をほとんど含まないことを特徴とする。

＊　尾西市教育委員会の調査による

1/4㎜以上の岩片の組成は花崗岩32%、チャート42%、その他26%である。この遺跡の砂粒組成に影響を与えたと考えられる庄内川は、濃飛流紋岩類の分布する地域にその源を持ち、花崗岩や第三紀の堆積岩類および中古生層を侵食して流れている。

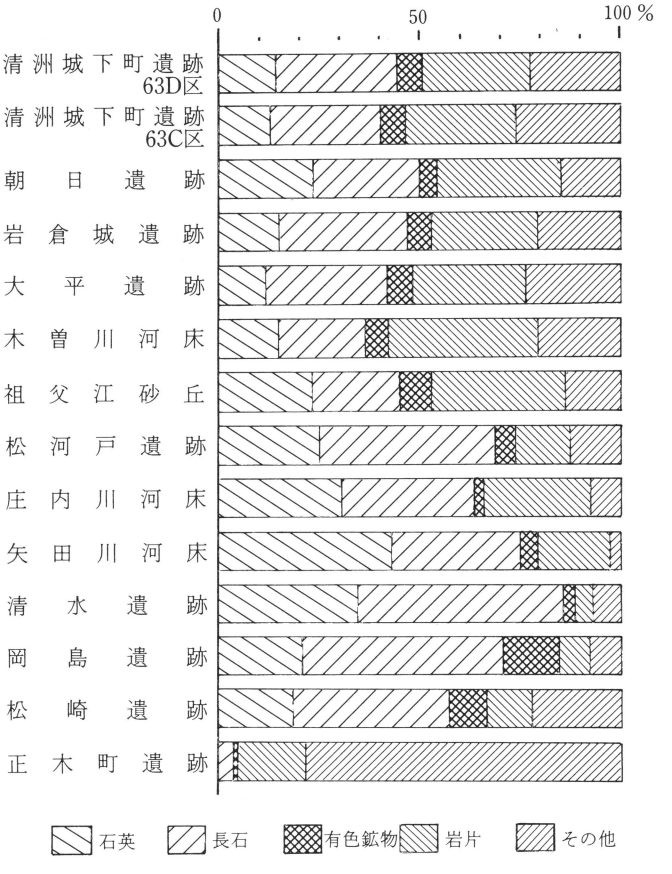
⑶矢作川水系（岡島遺跡・清水遺跡）

岡島遺跡では石英19.4%、長石53.1%、有色鉱物11.7%、岩片8.2%、清水遺跡では石英31.8%、長石51.0%、有色鉱物5.0%、岩片3.5%を示した。これら二遺跡の試料は、無色鉱物が多く岩片が少ないこと、1/4㎜以上の岩片において花崗岩が60%以上を占め、チャートが少ないことなど他地域の試料とは異なった特徴を示した。このことは、矢作川の上流域に花崗岩類が広く分布していることによるものと考えられる。

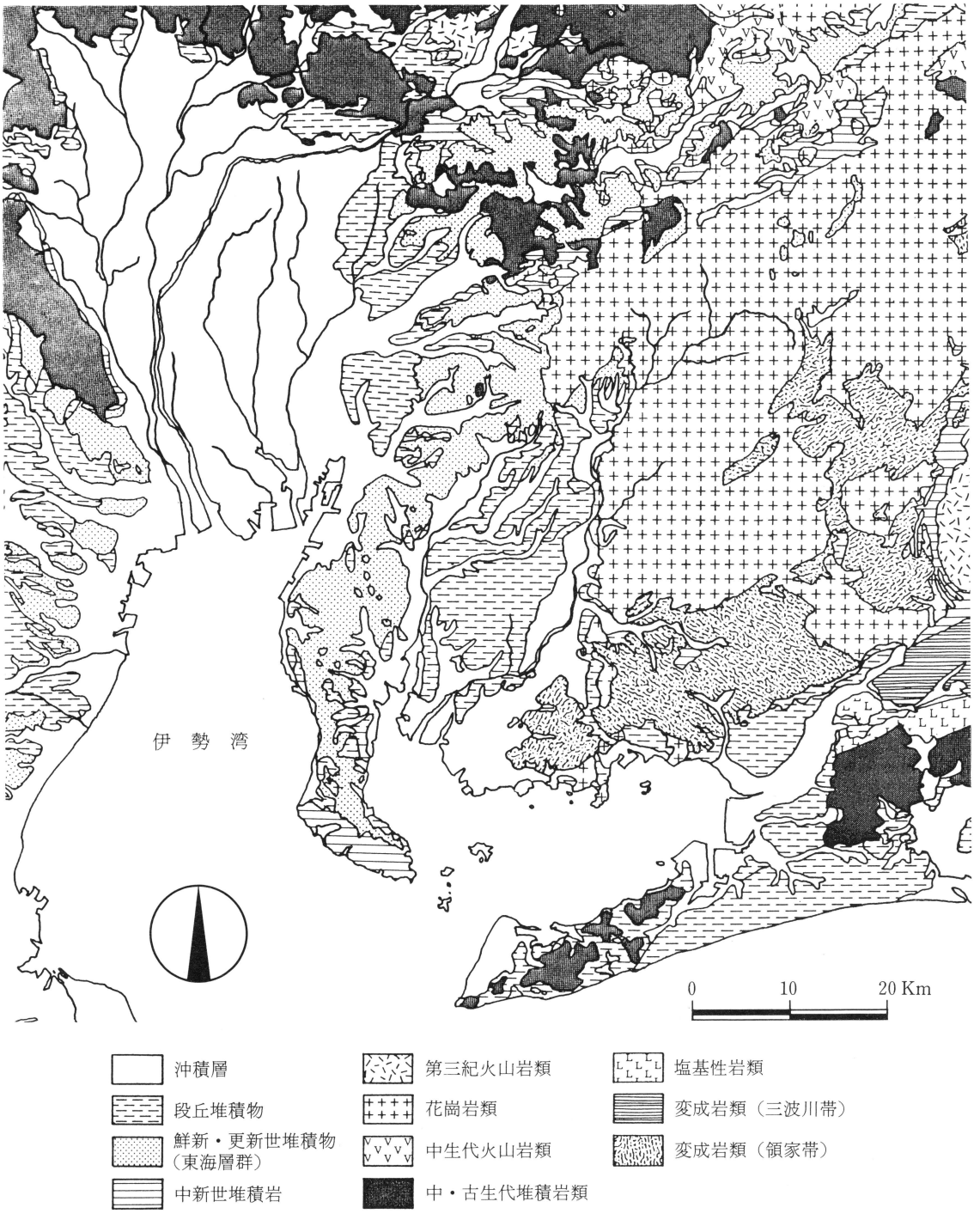
⑷その他

松崎遺跡

石英17.6%、長石39.1%、有色鉱物9.0%、岩片11.9%で、不透明鉱物および斜方輝石が多いことを特徴とする。斜方輝石は、火山灰層中に見られるような自形結晶を呈している



第6図　1/4～1/16㎜の鉱物組成（平均値）



第７図　愛知県周辺の地質(田中ほか：1981をもとに編図)

第2表　1/4～1/16㎜の鉱物分析結果（個数%）

	試料番号	石英	斜長石	カリ長石	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	橄欖石	不透明鉱物	岩片	火山岩	その他
清洲城下町遺跡63D区	H-2	12.5	13.0	15.5	6.0	0.5	0.5	1.0	0.0	3.0	17.5	6.5	24.0
	H-3	14.5	13.0	18.5	4.0	1.5	0.5	1.0	1.0	2.5	21.5	6.0	16.0
	H-7	7.4	15.3	13.4	7.4	1.0	2.5	1.5	0.0	3.0	25.2	8.9	14.4
	H-11	13.4	12.1	18.8	3.6	1.3	0.9	0.4	0.0	0.9	20.5	9.4	18.8
	H-12	14.3	24.3	15.2	2.4	0.5	0.5	0.0	0.0	1.0	13.3	7.1	21.4
	H-13	18.1	13.3	10.6	1.8	0.4	0.4	0.0	0.0	1.3	18.6	4.4	31.0
	H-14	17.4	16.0	12.8	2.3	0.5	0.0	0.0	0.0	1.8	21.5	7.3	20.5
清洲城下町遺跡63C区	S-1	15.3	19.1	11.2	3.3	0.5	2.3	0.5	0.9	0.9	17.2	7.0	21.9
	S-2	15.5	12.1	17.0	1.5	1.5	3.4	1.0	0.0	1.5	14.1	5.8	26.7
	S-3	11.7	13.6	11.3	0.9	0.0	2.3	1.9	0.5	3.8	13.1	8.5	32.4
	S-8	10.0	12.4	11.2	4.8	0.8	0.4	0.4	0.4	1.6	19.7	9.6	28.5
	S-9	11.5	15.3	17.2	1.0	0.5	1.9	0.5	0.0	2.9	18.2	11.5	19.6
	S-10	10.8	14.7	14.2	2.5	0.5	2.9	0.5	0.0	3.9	19.1	14.2	16.7
	S-12	12.7	11.7	14.6	1.4	0.9	2.3	0.0	0.0	3.8	17.8	12.7	22.1
	S-14	12.4	16.4	9.5	7.0	0.0	1.0	0.5	0.0	4.0	19.9	9.0	20.4
朝日遺跡	AS-1	22.2	10.8	13.2	3.8	0.9	0.5	0.0	0.0	0.0	21.7	13.2	13.7
	AS-5	24.1	15.7	13.4	0.9	0.0	2.8	0.0	0.0	1.9	23.6	3.7	13.9
岩倉城遺跡	IJ-1	14.2	19.1	11.3	3.4	0.0	2.0	1.0	0.0	2.0	19.1	6.4	21.6
	IJ-2	12.3	15.7	14.4	2.5	0.4	1.3	0.0	0.0	1.3	17.8	12.7	21.6
	IJ-3	14.9	14.4	15.8	2.3	0.5	1.4	1.4	0.0	4.7	20.0	5.6	19.1
	IJ-4	18.1	16.7	21.6	4.9	1.0	1.0	0.5	0.0	1.5	7.8	16.7	10.3
清水遺跡	SK-1	34.0	44.5	11.0	0.5	0.5	0.5	0.0	0.0	0.5	5.0	0.0	3.5
	SK-3	38.8	32.3	15.4	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	6.5	0.0	6.0
	SK-4	32.9	30.1	19.4	0.5	2.8	0.9	0.5	0.0	1.9	4.2	0.0	6.9
	SK-5	30.8	36.1	16.3	2.9	0.5	1.4	0.5	0.0	2.4	2.9	0.0	6.3
松崎遺跡	TM-1	17.6	31.0	8.1	1.9	1.9	5.2	0.0	0.0	4.3	10.5	1.4	18.1
岡島遺跡	NO-1	21.3	29.8	15.6	15.6	2.2	0.0	0.0	0.0	1.8	6.7	0.4	6.7
	NO-3	21.0	43.9	9.3	9.3	0.0	0.9	0.5	0.0	0.9	7.0	0.0	7.0
	NO-4	17.7	40.9	12.1	6.0	3.7	2.3	0.5	0.0	0.9	8.4	0.9	6.5
大平遺跡	OH-1	10.3	19.7	9.9	2.3	0.0	0.5	0.9	0.0	1.4	14.6	17.8	22.5
	OH-2	13.0	18.8	11.5	5.3	1.0	1.4	1.0	0.0	2.9	11.5	13.0	20.7
松河戸遺跡	MD-1	24.6	29.0	15.0	4.8	0.5	0.0	0.0	0.0	1.9	11.1	2.4	10.6
庄内川河床	SR-1	25.4	17.6	16.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	23.4	8.3	4.9
	SR-2	34.9	19.6	12.9	0.5	0.0	1.0	0.0	0.0	1.4	14.4	7.2	8.1
矢田川河床	YR-1	43.0	14.0	18.0	3.5	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	15.4	2.6	2.6
木曽川河床	KR-1	14.5	10.3	11.7	3.7	1.4	0.5	0.5	0.0	0.9	27.6	9.8	19.2
祖父江砂丘	SD-1	24.0	9.5	13.0	3.5	1.0	2.0	0.5	0.0	2.0	16.0	18.5	10.0
	SD-2	22.8	10.9	10.9	5.9	0.5	1.5	0.5	0.0	3.5	19.8	12.4	11.4
正木町遺跡	M-1	0.0	1.0	2.5	0.0	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	1.5	15.4	78.6

ものが多く観察された。また、試料を採取した砂層中にパミス（軽石）を含んでいたことから、これらの輝石や軽石は松崎遺跡周辺に分布する鮮新・更新統常滑層群の火山灰層に由来するものと推定される。

正木町遺跡*

中世の遺物包含層下位の熱田層最上部に当たる火山灰層より試料を採取した。火山ガラスが約80%を占め、その他の鉱物はほとんど含まれていなかった。本層は、層位および層相などからPm－Ⅲ火山灰層であると考えられる。

土器の胎土分析において、火山ガラスを多く含む土器がみられることから、火山灰を胎

＊　名古屋市教育委員会の調査による

第3表　1/4㎜以上の鉱物組成（個数）

	試料番号	石　英	長　石	黒雲母	白雲母	有色鉱物	その他	花崗岩	チャート	その他	合　計
清洲城下町遺跡	H-13	250	52	11	0	14	0	23	53	38	441
	S-9	242	78	28	0	17	0	16	69	35	485
朝　日　遺　跡	AS-5	192	63	9	1	11	0	31	40	38	385
岩倉城遺跡	IJ-1	199	86	41	2	30	0	17	49	47	471
	IJ-4	237	96	101	0	12	0	54	21	57	578
清　水　遺　跡	SK-2	870	181	3	6	8	0	68	18	15	1169
	SK-6	1048	90	1	3	10	0	82	19	9	1262
松　崎　遺　跡	TM-1	308	58	0	0	11	3	28	58	25	491
岡　島　遺　跡	NO-1	782	116	236	19	8	3	64	24	16	1268
	NO-3	410	83	295	6	6	0	92	6	10	908
大　平　遺　跡	OH-2	294	90	26	0	10	0	35	53	23	531
松河戸遺跡	MD-1	707	262	81	6	17	0	34	44	28	1179
庄内川河床	SR-1	248	79	10	1	8	0	8	81	29	464
	SR-2	293	84	8	0	14	0	15	69	22	505
矢田川河床	YR-1	481	107	18	1	12	0	34	59	30	742
祖父江砂丘	SD-1	167	53	11	0	13	0	15	56	31	346
	SD-2	219	64	29	0	18	1	10	91	21	453

土に混ぜて使用した可能性が指摘されている（森・永草ほか：1989）。

Ⅳ　まとめと今後の課題

今回の分析を通じて、砂層の堆積環境を推定する手段として粒度分析が有効であることが確認された。粒度組成から朝日遺跡・清洲城下町遺跡・土田遺跡においては遺跡基盤層の下位に、河成堆積物とは異なった海浜の堆積物が存在することが明らかとなった。

噴砂の粒径については、清洲城下町遺跡（2地点）・岡島遺跡・大平遺跡の計4地点とも、よく似た粒度組成を示し、すべて淘汰のよい中粒砂で構成されていることが判明した。また、噴砂と噴砂を供給した砂とが異なった粒度組成を示した試料がいくつか見られたことから、地震によって特定の粒径の砂が選択的に噴き上げたことが考えられる。

鉱物分析では、木曽川・庄内川・矢作川などの水系を中心に、鉱物組成について検討を行った結果、次のことがらが明らかになった。木曽川水系では石英約15%、長石約30%、有色鉱物約6%、岩片約30%であり、有色鉱物中に輝石類が2～3%含まれていた。また、庄内川水系では無色鉱物が約65%を占め、岩片が約20%と少ないこと、および輝石類をほとんど含まないことなど、木曽川水系とは異なった傾向がみられた。一方、矢作川水系では無色鉱物が70～80%を占め黒雲母がやや多いこと、1/4㎜以上の岩片に花崗岩を60%以上含むことなど、花崗岩地帯の影響を強く受けた鉱物組成を示した。

今後、粒度分析では各地の砂丘や海浜・河床砂などの資料を集めるとともに、篩の間隔を小さくしてより精度の高い分析を行うことなどが必要であろう。また、鉱物分析では、試料数を増やすことはもとより、新たに重鉱物分析を実施するなどさらに研究を深めていきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、名古屋大学の井関弘太郎氏、同海津正倫氏、名古屋市見晴台考古資料館の竹内宇哲氏、尾西市歴史民俗資料館の伊藤和彦氏、愛知県埋蔵文化財センター調査員の方々、服部恵子・中村明実の両名にご協力をいただいた。ここに記して御礼申し上げる。

文献

地学団体研究会（1982），土と岩石（自然を調べる地学シリーズ３）．東海大学出版会、200p.

Folk, R.L. and Ward, W. (1957), Brazos river bar ; a study in the significance of grain size parameters. J. Sed. petrol., **27**, 3-26.

Friedman (1961), Distinction between dune, beach, and river sands from their textural characteristics. J. Sed. petrol., **31**, 514-529

井関弘太郎（1980），愛知県の地震・地盤（その３）　沖積層の分布と液状化現象．愛知県防災会議地震部会、78p.

神谷友和（1989），Ｓ字状口縁台付甕の胎土分析．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第９集　町田遺跡、32－43.

黒田吉益・諏訪兼位（1983），偏光顕微鏡と造岩鉱物．共立出版、343p.

森　勇一・永草康次・楯真美子（1989），尾張地域を中心とした土器胎土の地域色について．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第９集　町田遺跡，44－49.

森　勇一・鈴木正貴（1989），愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義．活断層研究、**7**、63－69.

野尻湖火山灰グループ（1983），火山灰同定の手引－野尻湖の火山灰分析法－．78p.

大久保雅弘・藤田至則（1984），地学ハンドブック．築地書館、233p.

砕屑性堆積物研究会（1983），堆積物の研究法－礫岩・砂岩・泥岩－．地学団体研究会、378p.

田中啓策・山田直利・坂本　享・吉田史郎・宮村　学（1982），50万分の１地質図幅京都．通産省地質調査所.